国際日本研究センター
International Center for Japanese Studies

Online edition: ISSN 2186-0777

日本語・日本学研究 vol.14 (2024)

《論文》

否定形における能動態・受動態の選択について …… 劉志毅 (1)

安部公房『鴉沼』論 …… 解放 (17)
ー帝国と植民地の間で揺らぐテクストの意味合いー

『輝ク』における日中女性の連帯とその変節 …… 楊佳嘉 (37)
ーインターナショナル・フェミニズムから帝国のフェミニズムへー

紀長谷雄「九月尽日惜残菊応製詩序」成立背景に関する再検討 …… 廖栄発 (53)

《研究ノート》

日本語教育への「意味順」の応用 …… セーンウライ・ティティソーン (67)
ー読解授業において日本語文の構文分析力を育成するための指導例ー

歎異抄研究会と『歎異抄入門』についての覚書き …… 小美濃彰 (83)
ー冷戦期日本における仏教者平和運動の一断片ー

《寄稿》

研究ノート

即興ミニ漫才づくりとネタに見られる特徴 …… 鈴木美加、島岡学 (107)
ー学部言語科目における漫才ワークショップの可能性ー

執筆者一覧
国際編集顧問一覧
編集後記

東京外国語大学 国際日本研究センター

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』要項および編集・応募規程

発行の目的：国際日本研究センターにおける研究や研究活動と関連を有する研究成果を公表することを通じて、日本研究の発展に寄与することを目的とする。

発行回数並びに発行時期：年 1 回、3 月（2010 年度より開始）
※第9号から電子版のみ発行。

編集規程：
・国際日本研究センターは『日本語・日本学研究』の発行のために編集委員会を置く。編集委員会はセンター長、副センター長、編集幹事および各部門から選出された教員により構成される。
・投稿論文について：『日本語・日本学研究』は、本センターの研究活動に関連した日本研究の諸論考を受け入れる。(本センターの研究活動については、本センターのホームページを参照のこと）
・査読：投稿された研究論文については、編集委員会の責任において2名の査読者を選定するが、その際、編集委員会は外部の査読者を依頼することができる。査読は、査読要領にもとづき審査を行い、採否の決定をする。
・編集委員会は、東京外国語大学教員ならびにセンターの研究活動に積極的に参画した者、および必要に応じて外部の者に寄稿を求めることができる。
・その他、編集上の細則については編集委員会が適宜これを定める。

応募規程：
・日本の文化・社会・歴史並びに日本語・日本語教育に関する研究論文（15ページ程度）、海外の研究動向・研究潮流の紹介（15ページ程度）、研究ノート（10ページ程度）、書評（10ページ程度）
・原稿の書式：投稿論文は日英いずれかの言語とする。掲載決定後、日本語論文には、英語の概要（300 語程度）、英語論文には日本語の概要（800 字程度）をつける。
・投稿申込みと申込み締め切り：論文の投稿を希望する場合は、指定の期日までに、「執筆申込書」に必要事項を記入し、下記編集委員会アドレスに E メールで投稿予定の旨を連絡すること。また、メールの Subject（件名）には「『日本語・日本学研究』投稿希望」と記入すること。

原則、投稿された論稿はすべて査読対象とする。ただし、編集委員会の判断により査読対象に含めないものを認める場合がある。
公開、複製、公衆送信に関する権利：掲載された論文等の公開、複製、公衆送信の権利は、本センターに帰属する。本誌に発表されたものを転載する場合は、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに、当該論文等の初出を明示すること。

投稿申込み締切日：毎年 7月 31日
原稿締切日：毎年 9月 30日

【連絡先】 東京外国語大学国際日本研究センター
『日本語・日本学研究』編集委員会
〒 183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
電話 / FAX：042-330-5794
E-mail：icjs_editorial@tufs.ac.jp
URL：http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/

Call for papers and the information
The Journal of the International Center for Japanese Studies,
Journal for Japanese Studies

Editorial policy and guidelines of Journal for Japanese Studies

Purpose:
To contribute to the development of Japanese Studies through publishing efforts and results pertaining to the research activities conducted at the International Center for Japanese Studies.

Publication Period and Frequency: Starting from the fiscal year of 2010, published annually.
From volume 9, this journal will be published in electronic format only.

Policies:
・Editorial Committee: For the publication of International Japanese Studies, the International Center for Japanese Studies will establish an editorial committee. The committee will be composed by the director of the Center, the associate director, a chief editor, and a staff member each from three divisions of the Center.
・Articles: The articles to be submitted for the Journal are selected considering their relations to the Japanese studies conducted by our center (please refer to the official website of the Center as below for details on our research areas and activities.)
・Reference: Two referees appointed by the editorial committee will review and select the submitted articles based on the selection guidelines. The editorial committee is permitted to request experts for referees from outside of Tokyo University of Foreign Studies (TUFS.)
・The editorial committee may request submission of articles from faculty members at TUFS, or other individuals who have actively contributed to the Center's research activities. The editorial committee will add or modify any other details as needed.

Submission Requirements:
Topics: Research article on Japanese culture, society, history, language, and language education (double space, approx. 15 pages,) international research trends (approx. 15 pages,) research report (approx. 10 pages,) book review (approx. 10 pages.)
Format: The articles may be written in Japanese or English. For articles in Japanese, attach a summary in English (approx. 300 words,) and for articles in English, attach a summary in Japanese (approx. 800 letters.)

In principle, all the articles are subject to be peered review. However, the editorial committee might, at their discretion, permit the article not to be included in the review.

Policy Acknowledgement: All rights relating to the publication, reproduction, and public transmission of the articles published on the journal shall belong to the International Center for Japanese Studies. Any contents shall not be reproduced without showing the credit, first appearance of the article, nor the express written permission given by the editorial committee.

Entry Deadline: Every 31st of July
Submission Deadline: Every 30th of September

【For further information, please contact 】
International Japan Studies Editorial Committee International Center for Japanese Studies Tokyo University of Foreign Studies

【Address】 3-11-1, Asahi-cho Fuchu-shi, Tokyo 183-8534 Japan
Telephone and Fax: +81 (0) 42-330-5794
E-mail: icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL：http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/

否定形における能動態・受動態の選択について

The Choice of Active or Passive Voice in the Negative Form

劉志毅

Abstract

This paper examines the conditions for the possibility of choosing between active and passive in negative forms, and for semantic (in)variance between the two, as well as how "negation" influences the choice between active and passive. We have focused on the "sinai form" and "sinakatta form" and found the following. Active-passive choice and semantic (in)variance is contingent upon the ease with which the subject's property is obtained from the verb negated with sinai. On the other hand, when the verb is negated with sinakatta, the aspectual property of the verb plays the key role. More concretely, active-passive choice and semantic (in)variance depend on how readily one can get the meaning of "unfinished events" (i.e., avoidance of contact and avoidance of change) from the verb negated by sinakatta. In addition, regarding the conditions under which negation influences active-passive choice, it was found that negation tends to do so when the verb is negated with sinai and the subject's property is hard to obtain from the negated verb form. It was also found that the choice is affected when the verb is negated by sinakatta and belongs to class A (reversible change/durational verbs) or class B (verbs expressing contact between the agent and object).

Keywords

能動態、受動態、述定、「シナイ形」、「シナカッタ形」

active voice, passive voice, nexus, sinai form, sinakatta form

1. はじめに

能動態・受動態(1)の選択については、工藤(1990)、光信(1998)、林(2005, 2009)、劉(2022, 2023a, 2023b)等で議論されてきたように、これまでは動詞が肯定形である場合に着目する研究がほとんどであった(2)。しかし、動詞が否定形の場合は、能動・受動の選択が肯定の場合と異なっているという現象が見られる。

(1) a. 太郎が次郎を騙す。　　b. 次郎が太郎に騙される。
　　c. 太郎が次郎を騙さない。　　d. 次郎が太郎に騙されない。

(1)　便宜上、以下は能動・受動と略称する。

(2)　工藤(1990)、光信(1998)、林(2005, 2009)では、能動・受動について「対立」という用語が使用されている。工藤(1990)では、能動・受動が共に存在しうる場合を「対立が成立する」としているが、光信(1998)では、能動も受動も使用できる場合を「対立がなくなる」としている。また、林(2005, 2009)では、能動・受動が同様の意味を表す場合を「対立が成り立つ」としている。このように、同じ用語でも全く逆の意味を表すことがあるため、本稿では、劉(2023a, 2023b)に従い、「対立」という用語を使用せず、能動・受動が共に自然である場合に、表現主体(話し手／書き手)が能動・受動のどちらを選択するのかという観点から、「選択」という用語を使用する。また、劉(2023b:47f)を参考に、能動・受動が共に自然である場合のことを「両方選択可能」、能動・受動の片方しか自然でない場合のことを「片方選択可能」と呼ぶ。能動だけが自然である場合のことを「能動優位」、受動だけが自然である場合のことを「受動優位」とする。一方、能動・受動の否定形の意味が同じものである場合を「意味的一致」、異なる場合を「意味的不一致」と呼ぶ。さらに、能動・受動が共に不自然である場合を「非文法的」とする。

(2)　a.太郎が次郎を逃がす。　　b.次郎が太郎に逃がされる。
　　c.太郎が次郎を逃がさない。　d.??次郎が太郎に逃がされない。

上の(1ab)(2ab)のように、肯定形の場合は、能動・受動が共に自然であるため、両者は両方選択可能であるが、(1cd)(2cd)のように、否定形になると、能動・受動は両方選択可能であったり、片方選択可能であったりする現象が見られるのである[3]。

また、(3)のように、動詞が「シナカッタ形」である場合は、能動・受動は両方選択可能となるが、林(2005, 2009)では、両者が意味的に一致する場合もあれば一致しない場合もあると指摘されている。

(3)　a.太郎は花子を騙さなかった。〈未生起〉[4]
　　b.＃花子は太郎に騙されなかった。((3b)、林2005 :109)〈未生起・未成立〉

林(2005:108f, 2009:101f)によると、(3a)のように、能動は「太郎が花子を騙そうと考えているが、結局実行しなかった」という意味しか表さない。これは「未生起」と呼ばれており、「動作や変化が最初から全く生起しなかった」ことを意味する。それに対し、(3b)の受動は「未生起」だけでなく、「太郎が色々な手口を使って花子を騙そうしたが、結局失敗した」という意味も表しうる。これは「未成立」と呼ばれており、「動作や変化が実際に生起したが、事象の達成に到達しなかったため、途中で終わってしまい、結果的に完遂されなかった」と定義されている[5]。事象が「未生起」である場合は、能動・受動は対立しているが、事象が「未成立」である場合は、能動が「未生起」しか表さないため、能動・受動は対立していないという。

また、林(2005:110f, 2009:103)によれば、(4)の動詞「殴る」のように、「終了限界」が語彙的意味に内在せず、「開始限界」しかない場合は、「未生起」の意味しか含意しないという。しかし、(5a)のように、能動は「未成立」を表さないが、(5b)の受動「殴られなかった」の場合は、「太郎が次郎を殴ろうとして何発もパンチを繰り出したが、うまく次郎に避けられた」というような場合を想定すれば、「殴られなかった」も「未成立」の意味として解釈できると思われる。

(4)　僕は山田くんに殴られなかった。(林2005:110)〈未生起〉
(5)　a.太郎は次郎を殴らなかった。〈未生起〉

---

(3)　以下、特に出典を明示していない用例は作例である。なお、本稿では、例文の自然さに揺れがあると思われる用例に絞って、母語話者に確認したりアンケート調査したりした。アンケート調査については、詳しくは第3節の注8で取り上げる。

(4)　本稿では、〈　〉で動詞の否定形の意味を示す。また、動詞の否定形の意味の違いによって、能動・受動が意味的に不一致である場合は、受動態の例文の冒頭に「#」を付ける。

(5)　なお、林(2005:108, 2009:101)では、「成立」という用語も挙げられており、「実際に生起した動作または変化が事象の達成点に至り、完結した」と定義されている。

b.＃次郎は太郎に殴られなかった。〈未生起・未成立〉

以上のように、動詞が否定である場合、どのような条件において、能動・受動の選択状況が決まるのか、また、能動・受動が両方選択可能である場合の、能動・受動の意味的一致性の問題や、「否定」が一つの影響要素としてどのような条件において能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいのかについては、検討すべき課題が残されている。

そこで本稿では、述定の「シナイ形」と「シナカッタ形」に絞って、否定形による能動・受動の選択の可能性と意味的一致性についての条件を考察する。また、肯定の場合と比較することを通して、「否定」が単一の影響要素(6)として、能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件を明らかにする。さらに、「シナイ形」と「シナカッタ形」の間の、能動・受動の選択の可能性／意味的一致性の異同及びその原因を解明することを目的とする。

以下、第2節では、先行研究をまとめ問題の所在を提示する。続いて、第3節では、本稿の研究対象と研究方法を述べる。また、第4節では、動詞が「シナイ形」の場合と「シナカッタ形」の場合に分けて考察を行う。さらに、第5節では、動詞が「シナイ形」の場合と「シナカッタ形」の場合の異同とその原因を分析する。最後に、第6節では、全体をまとめ、今後の課題を示す。

2. 先行研究

この節では、能動・受動の選択と否定に関する先行研究を取り上げ、問題の所在を提示する。第1節で触れたように、林(2005:118f, 2009:112f)によると、事象達成の観点から、事象が「未生起」である場合は、能動・受動は対立しているが、事象が「未成立」である場合は、能動・受動は対立していないという。また、林(2005:109-112, 2009:102-105)では、事象の不成立を表す受動文の「未生起」「未成立」の意味は動詞の語彙的意味に内在する「開始限界」「終了限界」のあり方によって決まってくると指摘されている。例えば、(6)～(9)のような限界動詞の場合、事象の不成立を表す受動文は「未生起」「未成立」の両方を表しているのに対し、(10)のような非限界動詞の場合は、受動文は「未生起」だけを表している。

(6)　罐詰だけは消えてるが, 庫は破られなかったんだ。

(三浦哲郎『忍ぶ川』、林2005:109)(7)

(7)　花子は太郎に騙されなかった。

(林2005 :109)((3b)再掲)

(8)　二〇四航空隊の六機の護衛戦闘機は, 実際には一機もおとされなかった。

(阿川弘之『山本五十六』、林2005:109)

(6)　劉(2022:64)によれば、能動・受動の選択に影響を及ぼす要素については、「動詞の他動性」や「名詞句階層」などといった様々な要素が先行研究からまとめられる。また、劉(2023a)では「テンス」、劉(2023b)では「アスペクト」もそれぞれ単一の影響要素として、能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件として検討されている。詳しくは第3節で述べる。

(7)　下線は原文のままである。以下同様。

(9)　昨日は皆で足首に風船をつけて割りあうというゲームをやったが, 彼女の風船だけは最後まで割られなかった。

(林2005:109)

(10) 僕は山田くんに殴られなかった。

(林2005:110)((4)再掲)

ただし、(11)(12)の「与える」「気づく」は限界動詞ではあるが、瞬間動詞に類似するものであり、動詞の「開始限界」と「終了限界」がほぼ重なっているため、「未成立」は表さず「未生起」だけを表すと指摘されている。

(11) 近藤は松永の話を聞いてがっかりした様子であったが,「とにかく言うだけのことは言う」と言った。だが,「言う」機会すらすぐには与えられなかった。

(阿川弘之『山本五十六』、林2005:111)

(12) しかし, 市民たちには気づかれなかったが, 長崎市内にもひそかな動きはみえていた。

(吉村　昭『戦艦武蔵』、林2005:111)

以上のように、林(2005, 2009)の指摘は非常に示唆的ではあるが、それだけでは説明できない例も存在する。既述のように、(13b)では、「殴る」は非限界動詞であるため、受動の「殴られなかった」は「未生起」の意味だけを持つとされているが、「太郎が次郎を殴ろうとして何発もパンチを繰り出したが、うまく次郎に避けられた」というような場合を想定すれば、「殴られなかった」も「未成立」の意味として解釈できると考えられる。

(13) a. 太郎は次郎を殴らなかった。〈未生起〉

b. #次郎は太郎に殴られなかった。〈未生起・未成立〉((5)再掲)

また、(14)の「育てる」は、動詞が「シナカッタ形」であり、かつ動詞の開始限界と終了限界は重なっていないが、受動態の方も「未生起」しか表さず、能動・受動は「意味的一致」となる。以上のことから、動詞が「シナカッタ形」である場合の、能動・受動の意味的一致性については、まだ検討する余地があるように思われる。さらに、動詞が「シナイ形」である場合の、能動・受動の選択の可能性や意味的一致性、「否定」が単一の影響要素として、どのような条件で能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいのかについても、不明のままである。

(14) a. 太郎は花子を育てなかった。〈未生起〉

b. 花子は太郎に育てられなかった。〈未生起〉

そこで本稿では、以下の三つの課題を設け、動詞が「シナイ形」「シナカッタ形」である場

合の、能動・受動の選択の可能性、意味的一致性の条件を明らかにし、否定の形による異同の原因を解明することを目的とする。

①動詞が「シナイ形」である場合の、能動・受動の選択の可能性と意味的一致性の条件、及び、「否定」がこの場合において能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件を解明すること

②動詞が「シナカッタ形」である場合の、能動・受動の選択の可能性と意味的一致性の条件、及び、「否定」がこの場合において能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件を解明すること

③「シナイ形」と「シナカッタ形」の間の条件の異同及びその原因を解明すること

3. 研究対象と研究方法

この節では、研究対象と研究方法を述べる。研究対象と研究方法については、同じ能動・受動の選択を扱う劉(2022, 2023a, 2023b)と林(2005, 2009)を参考にする。

まず、受動態の類型については、村木(1991:5f)では、受動文に対立する文の違いに基づいて、受動文を直接受動文と間接受動文に分けている。(15)のように、直接受動文と能動文とは変形関係によって対立しているのに対し、(16)のように、間接受動文は基本文との派生関係によって対立しているという。

(15) a.太郎は次郎をなぐった。　　b.次郎は太郎になぐられた。(村木1991:7)

(16) a.雨ガ降ッタ。　　b.花子は雨に降られた。(村木1991:18)

林(2005:105, 2009:97)でも指摘されているように、また上の用例からも分かるように、村木(1991:18)によれば、直接受動文((15b))は能動文((15a))と同じ事象を表すのに対し、間接受動文((16b))は基本文((16a))に被動者(花子)が追加され、つまり二つの事象を表していることになる。本稿では、上の(1cd)(2cd)のように、能動・受動が同じ事象を表すにもかかわらず、能動・受動が両方選択可能になったり片方選択可能になったりする現象(能動・受動の形式選択)、また、林(2005:105ff, 2009:97ff)で指摘された上の(3)のように、能動・受動が同じ事象を表すように見えて、実際は、動詞が「シナカッタ形」の場合、両者の否定形の意味が異なる場合もあるという現象(能動・受動の意味的一致性)、の二点を考察の対象としている。そのため、(16)のような間接受動文はそもそも能動と受動の項が対応しておらず、両者の表す事態も異なっていると判断し、それを対象外として、村木(1991)の直接受動文のみを研究対象とする。

また、動詞の否定の形に関しては、(17)(18)のように、動詞が「シテイナイ形」「シテイナカッタ形」である場合でも、能動・受動の否定形の意味が基本的に「シナカッタ形」の場合と同様であるため、本稿では、動詞の「シナイ形」と「シナカッタ形」に限定して考察を行う。

(17) a. 太郎は次郎を殴っていない。〈未生起〉
b. #次郎は太郎に殴られていない。〈未生起・未成立〉
c. 太郎は次郎を殴っていなかった。〈未生起〉
d. #次郎は太郎に殴られていなかった。〈未生起・未成立〉
(18) a. 太郎は次郎を殴らなかった。〈未生起〉
b. #次郎は太郎に殴られなかった。〈未生起・未成立〉((5)再掲)

次に、研究方法については、以下、考察に使用する動詞、他の要素の影響を排除する方法の二つに分けて説明を行う。本稿で使用する動詞については、劉(2022, 2023a, 2023b)を参考に、小泉ほか(1989)の『日本語基本動詞用法辞典』にある受身用法のある動詞から、使用する動詞を抽出する。また、工藤(1990)で指摘された、能動・受動の選択に関係する「動詞の他動性」と角田(1991)での「名詞句階層」を考慮し、動詞の動作主と対象／相手／所有者が共に有情物を取る動詞を抽出する。その結果、(19)のようになる。

(19) A類　預ける、奪う、隠す、囲む、殺す、縛る、絞める、育てる、倒す、騙す、逃がす、盗む、雇う、渡す(14語)
B類　愛する、謝る、追う、感謝する、嫌う、蹴る、誤解する、断る、刺す、誘う、叱る、救う、攻める、責める、助ける、尋ねる、叩く、頼む、注意する、殴る、憎む、踏む、褒める、招く、見せる、認める、求める(27語)

林(2005, 2009)で指摘されたように、能動・受動の意味的一致性が動詞の開始限界と終了限界に関わっているため、本稿では、劉(2023b)を参考に、抽出した動詞をA類(主体動作・客体変化動詞)とB類(主体動作動詞)に分けた。劉(2023b:50f)では、畠山(2008)と影山(1996)を参考に動詞を分類しているが、具体的には、以下の通りである。動詞の性質を明らかにするために、「てある」構文に入る動詞、あるいは「ひとVする」構文に入らない動詞は対象に状態変化があるとするテスト(影山1996:65, 82f)、及び「Vしたのはいつ？」に「発話時にVしている(結果継続)」の意味がある場合には動詞が限界動詞になるとするテスト(畠山2008:33)を組み合わせることを提案した畠山(2008)に従って分類を行っている。

なお、工藤(1990:62)では「騙す」が「対象に対する積極的心的態度を表すもの」、すなわち、対象に変化をさせるものではない動詞とされているが、「ひと騙しする」が不自然なように、対象に変化が生じなければ「騙す」にならないことから、本稿ではそれをA類に位置づける。また、劉(2023b:47)でも言及されているように、工藤(1995:83f)によると、「埋める―埋まる」のような有対自他動詞の場合、他動詞が主体動作・客体変化動詞、自動詞が主体変化動詞となる。また、金水(2000b:29)でも同様の趣旨が述べられている。従って、「育てる」の場合も、「ひと育てする」が不自然であり、また「育てる」が「育つ」と有対自他動詞の関係にある他動詞であるため、主体動作・客体変化動詞と判断した。

さらに、「否定」という単一の要素の影響を考察する際には、他の要素の影響を避ける必要がある。劉(2022:64)では、能動・受動の選択に影響する要素として、本稿で扱う述定の場合に関しては、「動詞の他動性」「名詞句階層」「名詞の不特定性」「文脈」が挙げられている。それらに加えて、劉(2023a)の「テンス」、劉(2023b)の「アスペクト」も考慮に入れる必要がある。本稿では、劉(2022等)を参照し、以下のような方法を取る。①動詞の他動性が弱い動詞を研究対象外とする。②動詞の動作主と対象／相手／所有者の階層・特定性を揃える。③単文だけを対象とする。④動詞のテンス・アスペクト形式ごとに考察を行う。また、「テンス」の影響を避けるために、劉(2023a:180)で指摘された「テンス」による影響を考慮しない。つまり、「現場性」を持たず、かつ動詞がスル／シタ形である場合は、モダリティが真性ではないため、スル形の能動・受動が文法的ではありながらやや不自然になる、という点を考慮しないことにするという意味である。というのも、用例自体は文法的であっても、用例の自然さをめぐる判定には、母語話者によって判断の揺れが出るとも思われるからである。

なお、上の③は「文脈」の影響を避けるためである。奥津(1983:78)では、「〈視点〉固定の原則」が指摘されている。それは「一度立てた主語は、必要のない限り、途中で変えない」というものである。また、古賀(2013:12, 18)によれば、「できるだけ長く同じ誰か(何か)を話題の中心に据えておきたいという「テクストの結束性」に対する要求が受動文の使用／不使用を左右する」という。文脈を含めて考察する場合には、前の文脈に影響されて、能動・受動の選択がおのずと決まってくると思われる。この点を避けないと、否定における能動・受動の選択の可能性の本質や、「否定」という要素がどのような条件において、能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいかについて検討できなくなる恐れがある。ただし、工藤(1996:84)、王(2003:32)でも指摘されているように、否定は文脈に依存する性格を持つという。また、実際に、用例の自然さの判断には、その表現が自然に用いられる文脈がどの程度想定できるかという点も大きく関わるため、完全に文脈を考慮しないわけにもいかない。よって、本稿で用いた母語話者へのアンケート調査[(8)]においては、劉(2023a:185)を参考に、その前書きに、用例が用いられる文脈が想定しやすければ容認度が高くなり、使用の文脈がなかなか想定できない場合には容認度が低いと思われる、という記述も加えておいた。

---

(8)　アンケート調査での用例の容認度のスケール設定や調査の結果の処理方法については、本稿では、劉(2022:65)を参考にした。劉(2022:65)では、容認度のスケールを「0点(不自然)～3点(自然)」のように設けており、そのうちの「1点」と「2点」はそれぞれ「どちらかと言えば不自然」「どちらかと言えば自然」である。また、例文冒頭の記号の付し方の基準に関しては、劉(2022:65)では、島田ほか(2017:10)を参考に、基本的に平均値を基準に付しているが、用例の容認度のばらつきが大きい場合、つまり、「自然／どちらかと言えば自然」と判断する人数が半数以上占めているにもかかわらず、平均値が不自然なレベルになっている場合には、中央値をもとにする。さらに、例文冒頭の記号の付し方については、大江(2019:55)を参考に、「0以上1未満:「??」、1以上2未満:「?」、2以上3以下:記号なし」のようにしている。なお、アンケート調査は10名の母語話者に協力を仰いだ。調査の回答はLINEのオープンチャットにあるアンケート募集グループで収集した。調査協力者は全員大学生と思われ、具体的な情報は以下のようになる。①男性:4名、女性:6名　②年齢:全員20代、③出身地:関東(東京、埼玉、神奈川):4人、中部(愛知、石川、岐阜):3人、その他(山形／大阪／宮崎):3人。

4. 考察

この節では、動詞の否定の形ごとに、能動・受動の選択の可能性と意味的一致性について考察していく。

4.1「シナイ形」の場合

動詞が「シナイ形」の場合、能動・受動は両方選択可能の場合もあれば、片方選択可能の場合もある[9]。(20)～(29)は、能動・受動が共に自然であるため、両者は両方選択可能となる。また、能動・受動の否定形の意味に関しては、能動は「主体が何らかの行為を実行しない」という意味を表し、受動は「被動者が何らかの動作をされることは起こらない」という意味を表し、両者共に「未生起」として位置づけられると思われる。

(20) a.太郎は[10]次郎を騙さない。〈未生起〉 b.次郎は太郎に騙されない。【A】[11]〈未生起〉
(21) a.太郎は次郎を縛らない。〈未生起〉 b.次郎は太郎に縛られない。【A】〈未生起〉
(22) a.太郎は次郎を倒さない。〈未生起〉 b.次郎は太郎に倒されない。【A】〈未生起〉
(23) a.太郎は次郎を蹴らない。〈未生起〉 b.次郎は太郎に蹴られない。【B】〈未生起〉
(24) a.太郎は次郎を刺さない。〈未生起〉 b.次郎は太郎に刺されない。【B】〈未生起〉
(25) a.太郎は次郎を雇わない。〈未生起〉 b.次郎は太郎に雇われない。【A】〈未生起〉
(26) a.太郎は次郎を救わない。〈未生起〉 b.次郎は太郎に救われない。【B】〈未生起〉
(27) a.太郎は次郎を愛さない。〈未生起〉 b.次郎は太郎に愛されない。【B】〈未生起〉
(28) a.太郎は次郎を褒めない。〈未生起〉 b.次郎は太郎に褒められない。【B】〈未生起〉
(29) a.太郎は次郎を認めない。〈未生起〉 b.次郎は太郎に認められない。【B】〈未生起〉

それに対して、(30)～(33)は、能動が自然であり、受動が不自然になるため、能動・受動は片方選択可能となる。なお、林(2009:101)では、「未生起」は「動作や変化が最初から全く生起しなかった」と定義されているが、ここでは、動詞が「シナイ形」であるため、「動作や変化が最初から全く生起しない／しなかった」というように修正する。

(30) a.太郎は次郎を育てない。 b.?次郎は太郎に育てられない。[12]【A】
(31) a.太郎は次郎を逃がさない。 b.?次郎は太郎に逃がされない。【A】

---

(9) ここで使用する用例に関しては、やや非日常的とも思われるかもしれないが、金水(2000a:13)では、文法性判断をする際に、「文法の例文は日常的な文ではないと非難する向きがあるが、日常的でないからこそ内在化された能力が際立つ、という面がある」と述べられている。それも一理あると考えるため、本稿は金水(2000a)の立場に従う。

(10) 動詞の「シナイ形」の場合は、「が」で主語を表示するより、「は」の方がより座りがよいと考えられるため、本稿では、これ以降は、「シナイ形」の場合とそれに対応する肯定の「スル形」の場合のみ、主語を「は」で表示する。

(11) 本稿では、【 】で動詞の類型を示す。

(12) 本稿では、能動・受動が「片方選択可能」となる以上、意味的に一致するか否かは問わないこととする。

(32) a.太郎は次郎に花子を預けない。　b.?次郎は太郎から花子を預けられない。【A】
(33) a.太郎は次郎に謝らない。　b.?次郎は太郎に謝られない。【B】

上のように、能動・受動の選択状況に違いが生じるのは、受動動詞の否定形の意味による性質解釈の可能性に関わっていると思われる。最も典型的なのは、動詞の表す動作が被動者に不利益を与える意味を持つ場合である。(20)の「騙す」の場合は、否定文の主語が不利益を回避するための何らかの性質を持っているということが読み取りやすいため、成立しやすい。「騙されない」とすることで、「次郎が慎重だ」といった良い性質が読み取れるからである。逆に、動詞の表す動作が被動者に利益を与える場合でも、(25)の「雇う」のように、主語が何らかの悪い性質を持っていることが読み取られ、用例が自然になる。「雇われない」の場合は、「次郎が怠惰な人だ」等といった良くない性質が考えられるのである。それに対し、(30)～(33)の「育てられない」「逃がされない」「預けられない」「謝られない」の場合は、動詞が被動者に利益／不利益を与えるか否かにかかわらず、主語の何らかの性質が想起しにくいため、受動が不自然になる。

また、上の(20)～(22)を(34)～(36)の肯定と比較して分かるように、この場合には、否定でも肯定でも、能動・受動が両方選択可能であり、否定の能動・受動の意味的一致性の面でも同様であるため、「否定」による影響は認められない。それに対し、上の(30)～(32)の場合は、(37)～(39)の肯定と比較して分かるように、肯定と否定における能動・受動の選択状況が異なるため、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼすことになると言える。

(34) a.太郎は次郎を騙す。　b.次郎は太郎に騙される。【A】
(35) a.太郎は次郎を縛る。　b.次郎は太郎に縛られる。【A】
(36) a.太郎は次郎を倒す。　b.次郎は太郎に倒される。【A】
(37) a.太郎は次郎を育てる。　b.次郎は太郎に育てられる。【A】
(38) a.太郎は次郎を逃がす。　b.次郎は太郎に逃がされる。【A】
(39) a.太郎は次郎に花子を預ける。　b.次郎は太郎から花子を預けられる。【A】

4.2「シナカッタ形」の場合

動詞が「ナカッタ形」の場合、能動・受動の否定形の意味が一致するか否かについては、林(2005, 2009)の記述は部分的に成功しているが、第2節で触れたように、林(2005, 2009)の論で説明できない例も存在するため、本稿では次のように整理しなおす。

まず、「終了限界の有無」という基準により、二つのパターンに分ける。動作に「終了限界」がない場合、すなわち、動詞が客体の変化を捉えていないB類である場合には、「動作主と対象の接触の有無」という基準により、さらに二分することができる。(40)～(43)のように、動作が発生する際に、動作主と対象が接触する必要がある場合には、動作主が対象に接触して働きかけるまで、対象がその動作を避けるとすれば、事態は「未成立」になりうると思

われる。このような「未成立」は、接触を回避して「未成立」の意味が生じるため、本稿ではそれを「未成立(接触の回避)」と呼ぶ。

(40) a. 太郎が次郎を殴らなかった。〈未生起〉
　　b. #次郎が太郎に殴られなかった。【B】〈未生起・未成立(接触の回避)〉
(41) a. 太郎が次郎を刺さなかった。〈未生起〉
　　b. #次郎が太郎に刺されなかった。【B】〈未生起・未成立(接触の回避)〉
(42) a. 太郎が次郎を叩かなかった。〈未生起〉
　　b. #次郎が太郎に叩かれなかった。【B】〈未生起・未成立(接触の回避)〉
(43) a. 太郎が次郎を蹴らなかった。〈未生起〉
　　b. #次郎が太郎に蹴られなかった。【B】〈未生起・未成立(接触の回避)〉

それに対し、(44)～(47)のように、動作が発生する際に、動作主と対象が接触する必要がない場合には、「～(ら)れなかった」は「未生起」の意味だけを表す。例えば、(45)のように、「太郎」が「次郎を責める」という動作を行ったとする場合、「次郎は何かをすることでそれを避けた」ということは通常あり得ないからである。

(44) a. 太郎が次郎に仕事を頼まなかった。〈未生起〉
　　b. 次郎が太郎に仕事を頼まれなかった。【B】〈未生起〉
(45) a. 太郎が次郎を責めなかった。〈未生起〉
　　b. 次郎が太郎に責められなかった。【B】〈未生起〉
(46) a. 太郎が次郎を招かなかった。〈未生起〉
　　b. 次郎が太郎に招かれなかった。【B】〈未生起〉
(47) a. 太郎が次郎を憎まなかった。〈未生起〉
　　b. 次郎が太郎に憎まれなかった。【B】〈未生起〉

また、動詞に「終了限界」がある場合、つまり、客体を変化させるA類の場合は、「非可逆的変化を表すか否か」、「動詞が瞬間動詞であるか否か」という二つの基準によって状況が異なってくる。(48)(49)のように、客体の非可逆的変化を表す動詞の場合は、受動態の否定形の意味が「未生起」しか表さず、能動・受動は「意味的一致」となる。それは客体の変化が非可逆的であるため、動作が開始限界を越えていれば、仮に途中であっても、動作が成立していると見なされるからである。

(48) a. 太郎が次郎を殺さなかった。〈未生起〉
　　b. 次郎が太郎に殺されなかった。【A】〈未生起〉
(49) a. 太郎が花子を育てなかった。〈未生起〉

b.花子が太郎に育てられなかった。【A】〈未生起〉

さらに、動詞が可逆的変化を表す場合は、動詞が瞬間動詞であるか否かによって、状況が異なってくる。(50)のように、動詞が瞬間動詞である場合は、受動態の否定形の意味が「未生起」しか表さず、能動・受動は「意味的一致」となるが、(51)(52)のように、動詞が継続動詞である場合は、受動態の否定形の意味が「未生起」だけでなく「未成立」も表すようになり、能動・受動は「意味的不一致」となる。(51)(52)のように、動詞に終了限界がある場合には、「未成立」の意味は、対象が動作主の働きかけを阻止したりすることによって、終了限界にたどり着くまでの変化の発生を回避することで生じるのである。そのため、本稿では、これを上の「未成立(接触の回避)」とは区別して、「未成立(変化の回避)」と呼ぶ。なお、瞬間動詞と継続動詞の違いについては、日本語記述文法研究会(2007:84)によれば、両者は物理的にその動きが継続的に成立するか瞬間において成立するかという区別ではなく、動きを時間の幅のあるものとして捉えるか否かの違いだとされている。

(50) a.太郎が次郎に資料を渡さなかった。〈未生起〉
b.次郎が太郎から資料を渡されなかった。【A】〈未生起〉
(51) a.警察隊が犯人を囲まなかった。〈未生起〉
b.＃犯人が警察隊に囲まれなかった。【A】〈未生起・未成立(変化の回避)〉
(52) a.太郎が次郎の首を絞めなかった。〈未生起〉
b.＃次郎が太郎に首を絞められなかった。【A】〈未生起・未成立(変化の回避)〉

以上のように、動詞の表す運動様態によって、受動動詞の否定形の意味が決まってくることを図式化すれば、以下の図1と図2のようになる[13]。さらに、林(2005:108, 2009:101)では、「未成立」が「動作や変化が実際に生起したが、事象の達成に到達しなかったため、途中で終わってしまい、結果的に完遂されなかった」と定義されているが、本稿では「未成立」は「動作や変化が実際に生起した、あるいは動作主が対象に働きかけようとしたが、動作主と対象との接触が回避されたり、事象の達成に到達しなかったりするため、結果的に完遂されなかった」のように修正する。

(13) 図1と図2にある点線の枠は「基準」を意味する。

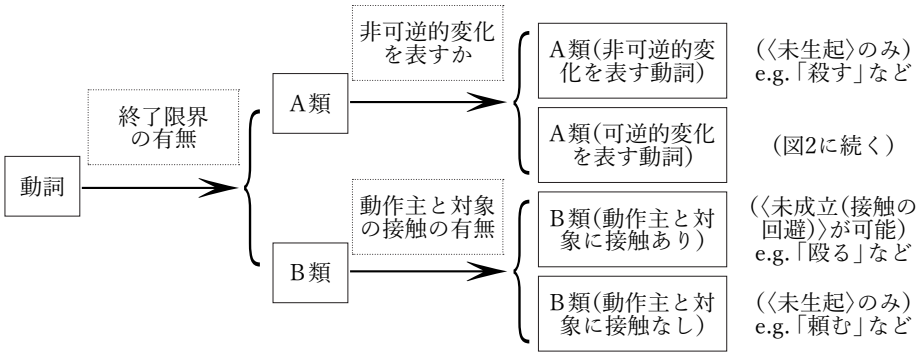

図1 「シナカッタ形」における受動動詞の否定形の意味の決まり方(その1)

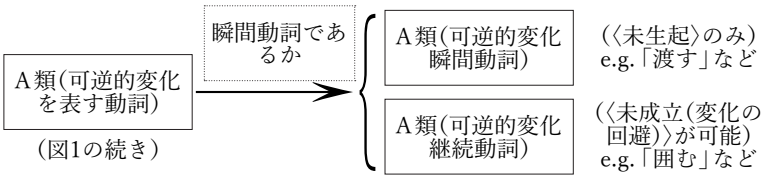

図2 「シナカッタ形」における受動動詞の否定形の意味の決まり方(その2)

加えて、この場合において、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいのかについては、(53)(54)のように、動詞が肯定である場合には、能動・受動は「意味的一致」であるのに対し、動詞がB類、かつ動作主と対象に接触がある場合や、動詞が可逆的変化を表すA類の継続動詞である場合には、否定形の能動・受動は「意味的不一致」になる。以下の二つのペアを比較することで、能動・受動の意味的一致性に違いが見られるため、動詞が「シナカッタ形」であり、動詞が動作主と対象に接触があるB類の場合や、動詞が可逆的変化を表すA類の継続動詞である場合には、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしていると言える。

(53) a. 太郎が次郎を蹴った。〈成立〉
b. 次郎が太郎に蹴られた。〈成立〉
c. 太郎が次郎を蹴らなかった。〈未生起〉
d. #次郎が太郎に蹴られなかった。【B】〈未生起・未成立(接触の回避)〉
(54) a. 太郎が次郎を騙した。〈成立〉
b. 次郎が太郎に騙された。〈成立〉
c. 太郎が次郎を騙さなかった。〈未生起〉
d. #次郎が太郎に騙されなかった。【A】〈未生起・未成立(変化の回避)〉

4.3考察のまとめ

以上の考察をまとめると、能動・受動の選択の可能性／意味的一致性は表のようになる。能動・受動が「片方選択可能」になる場合と「両方選択可能(意味的不一致)」になる場合には、

「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいと言える。

表　能動・受動の選択の可能性／意味的一致性(14)

否定の形	条件	選択の可能性／意味的一致性	動詞例
シナイ形	受動動詞の否定形の意味により主語の性質が想起しやすい場合	両方選択可能（意味的一致）	「騙す」「倒す」等
	受動動詞の否定形の意味により主語の性質が想起しにくい場合	片方選択可能	「育てる」等
シナカッタ形	A類（非可逆的変化動詞）／A類（可逆的変化・瞬間動詞）／B類（動作主と対象に接触なし）	両方選択可能（意味的一致）	「殺す」／「渡す」／「褒める」等
	A類（可逆的変化・継続動詞）／B類（動作主と対象に接触あり）	両方選択可能（意味的不一致）	「囲む」／「殴る」等

5.「シナイ形」と「シナカッタ形」の異同及びその原因

この節では、動詞が「シナイ形」と「シナカッタ形」である場合の、能動・受動の選択の可能性／意味的一致性の異同とその原因について考察する。

まず、上の表に示したように、二つの場合の、能動・受動の選択の可能性／意味的一致性は、類似点というより、主に相違点が目立つと言える。言うまでもないが、両者の類似点を強いて言えば、動詞がいずれの否定の形であっても、能動・受動が「両方選択可能（意味的一致）」になる場合があるという点が挙げられる。それは、二つの場合における能動・受動の選択の可能性／意味的一致性に関わる要素の条件を整えれば、能動・受動が共に自然になり、両方選択可能になるということである。

また、両者の相違点としては、能動・受動の選択の可能性／意味的一致性の条件は、動詞が「シナイ形」である場合には受動動詞の否定形の意味による性質解釈の可能性に関わり、動詞が「シナカッタ形」である場合には、動詞の表す運動様態の違いに関わるという点が挙げられる。それは、動詞が「シナイ形」である場合は、テンスから解放された恒常的事態を描くことに重点が置かれ、受動の否定形の意味によって主語の何らかの性質が想定しやすいか否かという点が関係しているため、受動動詞の否定形の意味が重要になってくる。一方、動詞が「シナカッタ形」である場合、能動でも受動でも過去に行われなかった事態に対する描写であるため、否定形の意味が主語の性質に関わることはない。むしろ、動詞の表す運動様態として、具体的にどのような動作を表しているのかが重要となり、「～（ら）れなかった」の形で「未成立（接触の回避／変化の回避）」の意味が想定できるか否かという点がクローズアップされるのである。

6. まとめと今後の課題

本稿では、動詞が「シナイ形」「シナカッタ形」である場合の、能動・受動の選択の可能性／

(14) 本稿では、「否定」が影響を及ぼしやすい条件に二重線を引く。

意味的一致性、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件を明らかにした上で、二つの場合の異同及びその原因を解明した。その結果、選択の可能性／意味的一致性の状況は上でまとめた表のようになる。また、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしやすい条件については、能動・受動が「片方選択可能」になる場合と「両方選択可能(意味的不一致)」になる場合には、「否定」が能動・受動の選択に影響を及ぼしやすいと言える。

能動・受動の選択の可能性／意味的一致性の条件は、動詞が「シナイ形」である場合には、受動動詞の否定形の意味による性質解釈の可能性に、動詞が「シナカッタ形」である場合には、動詞の表す運動様態の違いに関わる。それは、動詞が「シナイ形」である場合には、受動動詞の否定形の意味によって主語の何らかの性質が想定しやすいか否かという点が関わっていることと、動詞が「シナカッタ形」である場合には、受動動詞の否定形に「未成立(接触の回避／変化の回避)」という意味が想定できるか否かが関係していることによるものである。

本稿は、これまで注目されてこなかった「否定」と能動・受動の選択との関係に着目して、以上の諸課題の解明に取り組み、能動・受動の選択についての研究に一定の貢献ができたのではないかと考える。なお、本稿は述定のみに着目しているが、装定の場合には、必ずしも述定と同様とは言えない複雑な側面があると思われる。また、本稿では、「シテイナイ形／シテイナカッタ形」を基本的に「シナカッタ形」と同様と位置づけているが、これらの形の場合には、動詞によって、その否定形の意味についての判断が母語話者の中でも分かれることがあるため、さらなる考察が必要である。それらすべてを今後の課題とし、別稿に譲ることとする。

劉 志毅(りゅう しき、LIU Zhiyi)
早稲田大学大学院教育学研究科

参考文献

王学群(2003)『現代日本語における否定文の研究』日本僑報社
大江元貴(2019)「形容詞基本形反復文の談話的・統語的特徴」『日本語の研究』15-2、pp.52-68
奥田靖雄(1986)「現実・可能・必然(上)」『ことばの科学1』むぎ書房、pp.181-212
奥津敬一郎(1983)「何故受身か？―〈視点〉からのケース・スタディ―」『国語学』132、pp.65-80
影山太郎(1996)『動詞意味論―言語と認知の接点―』くろしお出版
川村大(2003)「受身文の学説史から―「被影響」の有無をめぐる議論について―」『言語』32(4)、pp.42-49
川村大(2012)『ラル形述語文の研究』くろしお出版
金水敏(2000a)「文法性判断とステレオグラム」『日本語学』19(5)、pp.8-13
金水敏(2000b)「時の表現」仁田義雄・益岡隆志編、金水敏・工藤真由美・沼田善子著『日本語

の文法2　時・否定と取り立て』、岩波書店
工藤真由美(1990)「現代日本語の受動文」、言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房、pp.47-102
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
工藤真由美(1996)「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」言語学研究会編『ことばの科学7』、pp.81-136
工藤真由美(2000)「否定」、金水敏・工藤真由美・沼田善子著『日本語の文法2　時・否定と取り立て』岩波書店、pp.93-150
小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
古賀悠太郎(2013)「受動文の使用／不使用と日本語話者の視点」『神戸市外国語大学研究科論集』16、pp.1-20
江田すみれ(2013)『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト―異なるジャンルのテクストにおける使用状況とその用法―』くろしお出版
島田めぐみ・野口裕之(2017)『日本語教育のためのはじめての統計分析』ひつじ書房
高橋太郎(1994)『動詞の研究―動詞の動詞らしさの発展と消失―』むぎ書房
張威(1998)『結果可能表現の研究―日本語・中国語対照研究の立場から―』くろしお出版
角田太作(1991)『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』くろしお出版
寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集Ⅰ―日本語文法編―』くろしお出版
日本語記述文法研究会(2007)『現代日本語文法3　第5部アスペクト　第6部テンス　第7部肯否』くろしお出版
日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法2　第3部格と構文　第4部ヴォイス』くろしお出版
畠山真一(2008)「動詞の限界性を判定するテストセット」『尚絅学園研究紀要』(2)、pp.27-39
光信仁美(1998)「現代日本語の受動文について―典型・非典型と文中における機能との関係について―」立正大学博士論文
村木新次郎(1991)「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
劉志毅(2022)「能動態・受動態の交替と連体修飾節構造の類型」『早稲田日本語研究』31、pp.61-72
劉志毅(2023a)「能動態・受動態の選択とテンスとの関わり」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』第30号-2、pp.177-187
劉志毅(2023b)「日本語における能動態・受動態の選択と意味的一致性―アスペクトによる影響を中心に―」『日中言語対照研究』第25号、pp.46-60

林青樺(2005)「事象達成の観点から見たヴォイスの対立をめぐって―受身文の否定の意味解釈を通して―」『日本語文法』5-1、pp.104-120(林2009 pp.97-113再録)
林青樺(2009)『現代日本語におけるヴォイスの諸相―事象のあり方との関わりから―』くろしお出版
ルチラ パリハワダナ(1997)「日本語の否定文のテンス・アスペクト」東京外国語大学博士論文

付記

本稿は、2021年度早稲田大学国語教育学会秋季例会(第15回学生会員研究発表会)での口頭発表の一部をもとに加筆修正したものです。発表の際などにご意見をいただいた皆様、査読者の先生方、早稲田大学の松木正恵教授・久野正和教授、慶応義塾湘南藤沢中等部・高等部教諭の佐藤優大さん、アンケート調査に協力していただいた皆様に、心より感謝を申し上げます。

安部公房『鴉沼』論
―帝国と植民地の間で揺らぐテクストの意味合い―

The Ambivalence in the Text between Empire and Colonies in Abe Kōbō: "Karasu numa"

解　放

Abstract

This study focuses on Abe Kōbō's short story "Karasu numa"(1948) and shows that the characters' acts of adultery suggest a complex relationship between the colony and the empire. The representation of the colony and empire is inseparable from the author's own experience of Manchuria and memories of repatriation.

The symbolism of the characters in "Karasu numa" is diverse. The man in the character symbolizes the Japanese soldier and also suggests imperialism. The woman symbolizes the repatriates and at the same time signifies colonialism itself. Therefore, the process by which the man was forced to attack by the Chinese and the destruction of the woman's dwelling reflect the historical events in which Japanese soldiers and civilians were counterattacked by the colonial natives in the immediate aftermath of the war. Furthermore, the fact that the man has been counterattacked by the woman points to another historical fact: the excessive development of colonialism will ultimately lead to the dismantling of imperialism.

Among the diverse experiences of Abe Kōbō, the experience of repatriation is related to the sociological theory of crowds in his novels. "Karasu numa" depicts two crowds, one a group of settlers represented by the woman and the man, and the other a group of Chinese in Manchuria. However, although the two crowds conflict, it is not aimed to extinguish one of the crowds, but rather to work for the survival of the crowd.

Abe Kōbō's mode of thinking is that the repatriates are excluded yet survive without fear of their exclusion. Furthermore, the setting in which female repatriates seduce male repatriates in the text faithfully illustrates the internal breakdown of the repatriate crowd. This paper finds a situation in which the legitimacy of repatriates, who are incompatible with the Japanese on the mainland, is severely questioned.

Keywords

安部公房、『鴉沼』、引揚げ、群衆、姦通

Abe Kōbō, "Karasu numa", Repatriation, Crowds, Adultery

はじめに

日本の戦後文学を代表する作家の一人である安部公房は、『砂の女』(1962)や『他人の顔』(1964)といった、1960年代以降の作品群によって世界に名を知られるようになった。『砂の女』が話題を呼び起こした理由の一つに、小説のタイトルが示している通り、作品の女主人公が呈示する複雑な意味合いが挙げられる。これ以降、フェミニズムやジェンダーの観点から安部作品の登場人物、とりわけ女性登場人物への関心が高まった。しかし、1960年代の作品群における女性登場人物の多様な示唆性と対照に、作家として出発した際、安部作品の女性像は固定したイメージを帯びているように思われる。

安部公房は1946年に引揚げ者として日本へ戻ってから間もなく本格的な創作活動を始

めた。その初期作品において、たとえば『虚構』(1948)という短編小説では、「しかし同時にすべての男にとって姦婦だというのはどうしたわけだろう。だから君は盗人だというのさ」と、女主人公を「姦婦」と称する箇所が散見される[(1)]。留意すべきは、ここでの「盗人」という言葉は、この時期の安部作品では大抵の場合、夫を持ちながら他の男性と関係を持つ、すなわち〈姦通〉という不貞行為を行った女性のことを指しているという点である。この傾向は短編小説『薄明の彷徨』(1948)からも同様の意味で確認できる。「盗人……。おまえか！俺がおまえと結婚したんだって。嘘をつくな、盗人め」にあるように、語り手は不貞の妻を「盗人」と告発している[(2)]。ここに挙げられた作品のみでなく、『虚妄』(1948)や『〈友を持つということが〉』(1948)などの同時代の短編小説においても、妻は〈姦通〉行為を行った登場人物として設定されている[(3)]。

また、このような女主人公が同時に女性引揚げ者でもある、という設定は注目に値する。具体的に例を挙げるならば、『虚妄』という小説の女主人公「K」は次のように描かれている。

> とにかくKの主人というのは[…]既に結婚し、社会的にも相当の地位にありながら、やっと女学校を出たばかりのまるで世間知らずな子供にすぎぬ彼女に分別を失い、親子ほども違う年齢も忘れてくどき落とし、前の妻を捨てて上海に渡ったが終戦になって一人の男の子までつくって引揚げて来た。[(4)]

この引用に、「K」という既婚の女性は引揚げ者でありながら、テクストの別な箇所において、「もっと不作法でもっと懶けものであったら更に沢山の男を永く引きつけておけただろう」と描かれているように、事実上、男性を誘惑する背徳な女性と設定されている[(5)]。

次に、同時代の『〈歴史の頁が〉』という小説に焦点を当てれば、この作品の冒頭は「それは一隻の使い古され寿命のきた二千トン級のボロ貨物船。[…]満洲から引揚げる千二百人の餓えた難民をつんで長崎に向う途中」という一節から始まっており、引揚げ者の経歴を主に語っている[(6)]。ここで留意すべきは、この作品の女主人公「ツダ」が、引揚げ船の中の男性を誘惑して、ヘロインの入ったタバコで男を気絶させたのちに、デッキから男たちを海に突き落した悪女であるという点である。「その間ツダはぼんやり笑いつづけていた。[…]みんな一緒に私にかかってくればいいんだわ。そうすればすぐ仲よくなってしまうのに」

---

(1)　安部公房「虚構」『文学季刊』第8号、1948年11月(『安部公房全集2』新潮社、1997年9月、p.95)

(2)　安部公房「薄明の彷徨」『個性』1949年1月号(『安部公房全集2』新潮社、1997年9月、p.125)

(3)　安部公房の『〈友を持つということが〉』という小説は、題目も署名もなく、『安部公房全集』によれば、この作品は1948年11月8日に書き上げたものとみられる。全集では本文の冒頭部「友を持つということが」の一節を使用して題目としている。

(4)　安部公房「虚妄」(生前未発表)『安部公房全集2』新潮社、1997年9月、p.13。

(5)　同上、p.19。

(6)　安部公房「歴史の頁が」『安部公房全集3』新潮社、1997年10月、p.144(安部公房の『〈歴史の頁が〉』という作品は未完成の作品で、題目も書かれていないために、全集では本文の冒頭部「歴史の頁がめくられようとするとき」の最初の言葉を使用して題目としている。『安部公房全集』によれば、本作は1951年に書かれた。)

とあるように、この女主人公は引揚げ者でありながら、複数の男性を誘惑している(7)。以上の描写より、安部の初期作品において「盗人」と称される女性が同時に引揚げ者でもあることは、この時期の安部作品における一つの傾向と言えるかもしれない。

このように、安部公房の1940年代の作品に登場する女性人物は、明らかに統一された性格を持ち、否定的な眼差しで語られている傾向にある。また、こうした女性像の背景に、安部自身の引揚げ体験を見出すことも可能である。しかし、後ほど述べるように、従来の先行論では『砂の女』をはじめ、安部の60年代の作品における女性像に着目したものは数多くみられるが、40年代の作品の女性像について十分に検討されてきたとは言い難い。本論文では、安部公房の短編小説『鴉沼』(1948)を対象に、登場人物の不貞行為に焦点をあて、このような背徳な行為を行う人物の示唆性と作者の満洲体験や引揚げの記憶との関連性について考証を試みる。

一、〈姦通〉のアレゴリー

『砂の女』に関しては、磯貝英夫が「私たちは、日本の働き者の農村婦人の姿をあざやかに思いうかべないだろうか。[…]戦後文学の持ちえた最もリアルな女性像」と述べているように、婚姻に対する忠誠を誓う女性像を定説とする評価が同時代評にいくつか確認できる(8)。しかし、その後の研究では、『砂の女』の女性像への評価は一転した。鳥羽耕史が「夫と娘に去られた女が、妻と別居していた男を誘惑して失踪させ、新たな夫として獲得するというのが、女の側から見たこの小説の物語になっているように思われる」と指摘しているように、この「女」は男性を誘惑するものとされ、その評価は真逆の方向に進んだ(9)。

この男女関係を破壊する女性のイメージは、『砂の女』のみならず「失踪三部作」の一作でもある『燃えつきた地図』(1967)からもうかがわれる(10)。これについては、藤井里菜が「『燃えつきた地図』は、女性の台頭を描き、女性の活躍をいち早く認識していたようにも見える。しかし、実際は女性によって落とされている男性の姿が露見し、都市化における女性の台頭が、社会の傾きであることを表現している」と述べているように、『燃えつきた地図』における女性の登場人物もまた、男性を誘惑する存在としての側面を帯びている(11)。このように、1960年代以降の作品における女性登場人物は両極の評価を呈示している。しかし、その評価の一端である〈女性が男性を誘惑する〉という特徴は、前述のように本論文の考察対象で

(7)　同上、p.155。

(8)　磯貝英夫「〈砂の女〉の女」『国文学　解釈と教材の研究』1969年10月、p.227。

(9)　鳥羽耕史「安部公房「砂の女」――性的な戦略について」『国文学　解釈と鑑賞』第73巻第4号、2008年4月、p.126。

(10) 安部公房は失踪に関する自身の作品について、「失踪に対して、すぐに回復ということを持出すことに、非常に疑念があるのです。一応三部作という形で、失踪前駆症状にある現代を書いてみましたが、この次は、すでに失踪してしまった状況で、失踪の向こうにある世界を書いてみたい」(「私の文学を語る」『三田文学』1968年3月号、『安部公房全集22』新潮社、1999年7月、p.45)と述べている。この記述以降、『砂の女』、『他人の顔』、『燃えつきた地図』の三作品は「失踪三部作」と称されるようになったのである。

(11) 藤井里菜「安部公房『燃えつきた地図』論――都会が生み出した女性像」『清泉語文』第2号、2012年3月、p.255。

ある『鴉沼』をはじめとした、安部公房の1940年代の作品の普遍的テーマの一つでもある。

『鴉沼』は『思潮』1948年8月号に掲載された安部の短編小説で、作品の概要は次のようになっている。敗戦直後の満洲にある町で、結婚式を迎える日本人「娘」はかつての恋人である「男」と出会うことになる。二人が逢引を約束したその夜、「娘」の住処は暴徒と化した満洲の住民によって焼かれてしまう。この動乱の次の日、「娘」は内面の葛藤を経た上で、全てを捨てて過去の恋人と駆け落ちすることを決心する。しかし、「男」はこの動乱の中で負傷し、「鴉」の群れに片目を取られて発狂してしまう。発狂した「男」は「娘」の首を絞めて殺そうとしたが、「娘」に押されて沼の中に落ちたあげく死んでしまう。

この小説に関する希少な先行研究の中、「安部の日常性に対する考え方、すなわち、『満洲国』における日常の世界観は精神的な抑圧によって成立していたのだという認識を確認できる」という波潟剛の論述は、日本人引揚げ者の異常な行為と、「満洲国」という複雑な空間との因果関係を指摘したことで有意義である(12)。この時期の安部は、満洲を題材とする作品を他にも刊行しているが、この『鴉沼』は異色をなすものと言える。たとえば『終りし道の標べに』(1948)という作品は、満洲を舞台とする長編小説と言われているものの、実存哲学が多様に反映されているために、小説的性格よりも「哲学論文」の性格が強い(13)。また、山田博光が「小説的構成はそれほど意味あるものでないかもしれない」と指摘したように、該当時期の作品において、小説の構成は重要視されていなかったと考えるのが妥当であろう(14)。

しかし、『鴉沼』のテクストでは、実存哲学の占める割合は小さく、その反面、男女の不貞行為、つまり〈姦通〉という行為が、暗喩のレベルであるものの小説の構成として重要な機能を果たしているように思われる。尚、この〈姦通〉とは、広義的には男女が不倫関係を結ぶことだが、狭義の意味では、夫を持つ妻が他の男性と関係を持つことを指す。この狭義の〈姦通〉概念は、前述にあったように、安部の初期作品にみる「盗人」――婚姻関係中の妻が他の男性を誘惑する――という言葉の意味合いとも一致する(15)。

事実、この〈姦通〉という不貞行為は、東西を問わず近代文学において最も普遍的なテー

(12) 波潟剛『越境のアヴァンギャルド』NTT出版株式会社、2005年7月、p.226。

(13) 安部公房は『終りし道の標べに』について、「二十三歳で書いた処女作『終りし道の標べに』は、小説を書いたつもりじゃなかった。哲学論文みたいなもの」(「新人国記'82　外地㉜――現代の先端を行く」『朝日新聞』1982年10月4日、『安部公房全集30』新潮社、2009年3月、p.676)と評している。

(14) 山田博光「『終りし道の標べに』」『国文学　解釈と鑑賞』第36巻第1号、1971年1月、p.78。

(15) 1908年(明治四十一年)に改正された刑法によれば、「姦通罪」とは、妻が姦通した際、夫は妻とその姦通相手を告訴することが可能だが、逆の場合、夫が姦通しても妻は夫を告訴できないということになっている。戦後の憲法で男女平等が実現できたために、「姦通罪」自体は廃止され、1972年に改正された民法において、配偶者に不貞行為があった際、どちらも離婚の告訴が可能となったのである。ただし、川西政明が「これで姦通は刑法上罪にならないことになったが、この姦通罪を支えてきた精神が日本人の生活から一掃されたわけではない」(『文士と姦通』集英社、2003年3月、p.10)と指摘しているように、狭義の「姦通」概念、つまり婚姻関係の中で、妻の不貞行為のみが「姦通」と認識されることは、日本人の脳裏に深く烙印されているこの「姦通罪」の影響によると思われる。

マの一つでもあった[16]。ただし、日本近代文学の場合、〈姦通〉の場面は明確に描かないのがある種の暗黙の了解となっている[17]。本論文における〈姦通〉の概念は、明確な性的および肉体関係を前提としているのではなく、アレゴリーとして広義的な意味での男女間の不倫行為を指している。これはたとえば、『鴉沼』で〈姦通〉と思われる行為は以下のように仄めかされている。

> 娘には逢いびきの約束があったのだ。時刻は昨夜、場所は鴉沼。娘が男に出逢ったのは一昨日、駅前の中央市場の中だった。
>
> 娘は心持ち蒼ざめ、自分でも血の気が失せていくのを知った。と忽ち逆に紅潮するのを感じた。長いあいだ心に描き、あまりにも永すぎたため却ってほとんど忘れ去っていた十年ぶりの再会ではなかったか。[…]娘は息をこらして男を見上げた。一瞬嵐のような不安と期待が言葉と肉体をつなぐ部分、二人の心臓の間で音をたてた。(下線引用者、以下同)

下線の「紅潮するのを感じた」と「言葉と肉体をつなぐ部分」という表現は、比喩のレベルで二人の肉体関係を示唆し、〈姦通〉の成立を物語っているように思われる。ここで注目すべきは、作品冒頭において、この〈姦通〉行為を積極的に推し進めるのは、「男」側であるという点である。

> 憎しみに変形していく愛を支えてくれるのは君だけ、今夜鴉沼で、それ以外には考えられない。待っているよ。いいんだ。返事はいらない。そうする以外には方法がないということを聞いてもらえばそれでいいんだ。(傍点引用者、以下同)

引用に示されているように、小説の序盤では、この「男」は女性を強引に求めようとしている。おそらく、「男」の強気を支えているのは、健全な男性性という本来男性に付与された権力と言えるだろう。しかし、この「男」が負傷した後のテクストを辿ってみると、男性と女性の力関係は逆転し、その権力構造は一転を見せ始める。

> 哀願するような弱々しい声だった。[…]そしてその手は首へ、はっと思った時娘は首を強くしめ上げられるのを感じた。何も彼もが余りにとう突すぎる。強い眩暈い、驚愕、衝激。叫び声をあげながら娘は反射的に強く男をはねのけた。[…]意外なほど脆く男は手を離すと、水の底を歩いていくようにゆらゆらと体をふりながら二三歩後ろによろめいて行く。

---

(16) トニー・タナー著、高橋和久、御輿哲也訳『姦通の文学　契約と違犯　ルソー・ゲーテ・フロベール』朝日出版社、1986年6月、p.31。

(17) 川西政明『文士と姦通』集英社、2003年3月、pp.205-206。

引用部では、「弱々しい声」で「哀願する」「男」が「娘」の首を締めようとしたが、「娘」に反撃される経緯が描かれている。「意外なほど脆く」という言葉にあるように、負傷後の「男」の身体が衰弱していることによって、ここでは男性と女性との力関係が逆転してしまってたという結果が示されている。これによって男性があらかじめ持っていたはずの優位性は喪失し、女性に対する男性固有の権力を喪失した「男」は、「娘」との〈姦通〉の可能性を徹底的に失うこととなった。この「男」が主導権を握る〈姦通〉行為の失敗に関しては、「鴉」からの攻撃で視力を失ったことが重要な要因となっている。下記の箇所はその一部始終を書き記している。

> 沼のほとり、鴉の飛び立ったあと、しばらく置き忘れていた男を見てみよう。男は苦痛に身もだえている。死んではいなかったのだ。丁度いま肉体の場所を感じることが出来ぬほどの痛みに叫び声をあげて目覚めたところだった。痛いといえば、とりわけ左の眼、鴉についばまれて破れた眼。

前文で分析したように、この引用にある「肉体」という言葉自体、「男」と「娘」の〈姦通〉を表象するものである。したがって、ここでの「肉体の場所を感じることが出来ぬ」という一節は、「男」の男性性の欠如を意味した上で、〈姦通〉の不可能性を示唆しているように思われる。また、この「男」の身体の負傷とは、「痛いといえば、とりわけ左の眼、鴉についばまれて破れた眼」にあるように、具体的には目が潰されたことを指している。

そして、この登場人物の目が「鴉」に潰されるというエピソードは、おそらく安部公房が愛読したエドガー・アラン・ポーの『黒猫』(1843)に由来すると考えられる。また、『鴉沼』という小説のタイトル自体も、ポーの『大鴉』(1845)にインスパイアされたのではないかと予測できる[(18)]。なぜならば、『黒猫』において猫の目を抉り取る行為を去勢の代替行為とする認識とも酷似しており、この「男」の目が「鴉についばまれて破れた」行為も、ある意味で去勢の代替行為と言えるかもしれないからである[(19)]。

つまり、「男」の身体上の欠陥＝去勢されたことによって、この「男」は「娘」との〈姦通〉の可能性を徹底的に喪失したのである。こうした推論を踏まえて、「男」と「娘」にまつわるこの〈姦通〉のアレゴリーに、さらなる深い象徴性を見出せるのではないかと考えられる。

---

(18) 安部公房は自筆年譜の中で、エドガー・アラン・ポーについて「中学時代に、『世界文学全集』を読み、とくにポーに強い印象をうけ、学校の昼休みに、級友を集めて話し、好評を得たりした」(「年譜」『新鋭文学叢書2　安部公房集』筑摩書房、1960年12月、p.277)と述べている。

(19) フロイト著作のフランス語訳者で、エドガー・アラン・ポーの作品に関する精神分析研究で有名な学者、Marie Bonaparte は、『黒猫』における一匹目の黒猫の片目をえぐりだす行為が去勢の代替行為であると指摘している。*The Life and Works of Edgar Allan Poe: A Psycho-Analytic Interpretation,* trans. John Rodker (Lodon: Imago Publishing,1949) pp.468-470.

二、帝国と植民地の象徴性

前節では『鴉沼』における「男」と「娘」の〈姦通〉行為について分析した。本節ではテクストにおいて表象されている登場人物の〈姦通〉行為の象徴性について考察してみたい。まず注目すべきは、「娘」を誘惑する男性のアイデンティティの複雑性である。「男」と「娘」が再会する場面で、「男」は自身のことを次のように紹介している。

> もう十年も遇わずにいたんだもの、隊が解散して復員したとき、僕はほとんど生きる目的を失っていた筈なのに、却って今まで味ったことのない生命力を感じて驚いたりした。[…]むろんそれも承知の上で君が来ていると噂に聞いていたこの町にやって来た。丁度機関区に務めていた友人が知恵を貸してくれて、上手く軍用列車の火夫になりすませたのさ。

引用部にあるように、「男」は長い間、帝国日本の軍人であったことを「生きる目的」としている。また、「男」が「軍用列車の火夫」の身分で「娘」と再会していることを考慮すれば、この「男」は小説中で語られている過去から現在までずっと軍人というアイデンティティを持っていたと言えるかもしれない。言い換えれば、この「男」は、戦前や戦中の旧日本軍を象徴しており、ひいては軍人を駆動する帝国主義自体を示唆しているように思われる。「男」のこのような象徴性を考えるに際して、下記の箇所に注目してみる。

> すでに舞い上り不眠に興奮している一羽の鴉が融けかった沼のほとりの枯草の中に若い男が倒れ伏せっているのを目ざとく見つける。恐らく昨夜モッブに追われて逃げてきたのだろう。「…」いきなり羽をすぼめて緻密な朝の大気をつきさすように落ちかかりその眼球をついばんだ。破れた角膜から血のにじんだ半透明な粘液がもくもくと湧きあふれる。

上記の一節によれば、「男」の満身創痍は「モッブ」の襲撃と「鴉」の攻撃によるもので、この箇所にのみ焦点を当てれば、「男」は暴行を受ける側、すなわち被害者と設定されていることがわかる。しかし、この「モッブ」の由来を遡れば、そこには複雑な事情が絡んでいたように思われる。

> 一発の狼烟が合図だった。一九四五年、あの忘れ難い九月の暮れ、旧市街の一角からけたたましい太鼓の音が湧き起った。笛がなりあえぐような群集の叫びが城門を打ち倒し、しっ黒の中にきながら息をこらす敗れた人間の町を目掛けてつき進んだ。不具者と病人と気狂いとが火薬の臭いに酔った夜、モッブの夜。手榴弾が破裂し、人々の衣は石油に濡れ、火がついた。しかしこげた指でも太鼓は鳴る。かすれたうめきも集れば立派に叫ぶ。沼は笑い、まだ夜だというのに鴉たちも目を覚ました。妖怪のように美し

> く鳴き、沼をふるわして黒く羽ばたいた。何千という白い眼がモッブの投げた火に濡れて瞬いた。ああ、復讐の日が来たのであろうか。

「モッブ」とは、英語の「mob」という単語の意味で使われており、主に暴力を駆使する群衆や、無秩序に集まった騒がしい群衆を指し示している。ここから『鴉沼』での「モッブ」という表現には、引用部に示されている通り、〈暴徒〉の意味合いが込められていると推測できる。たとえば、「手榴弾が破裂し、人々の衣は石油に濡れ、火がついた」という一節からも、ここでの「群集」が暴徒へと豹変することで、「モッブ」という小説内の言葉は暴力と結びつくのである。

ただし、「1945年、あの忘れ難い九月の暮れ」に留意すれば、小説中の時間帯は旧日本政府が既に敗戦を宣告した後の時期に設定されていることがわかる。つまり、この「敗れた人間」とは、戦前や戦中の満洲へ送られた開拓民であり、物語内の時期にあわせれば、日本政府による引揚げを待つ〈引揚げ者〉のことでもある。つまり、「モッブ」対「敗れた人間」という物語内の対立構造は、物語外における満洲の中国人対日本人引揚げ者という現実の対立構造を反映している。

したがって、こうした「モッブ」という暴徒の暴力的活動は、物語中では「敗れた人間」への「復讐」として描かれているものの、これは敗戦後の元植民地で発生した歴史的事実、すなわち、今まで抑圧されてきた植民地の人々による敗戦後の日本人引揚げ者への復讐行為を示唆しているのだろう。また、「何千という白い眼がモッブの投げた火に濡れて瞬いた。ああ、復讐の日が来たのであろうか」という一節については、「モッブ」という満洲の中国人が「鴉」と同一視されており、「モッブ」の復讐がそのまま「鴉」という動物の復讐と重なるように描かれている。このように両者が同一視されている偶発的な設定は、事実上、作品の冒頭からすでにその必然性が暗示されている。

> 新旧両市街を隔てて一里四方にひろがる赤土の草原。湿地帯を避けて敷かれた鉄道がこんな片輪な町を拵えてしまったという。[…]その草原の中に原生動物さながら不規則な枝を出してはりついているほそ長い沼がこのまわり道を余儀ないものにしているのだ。しかし植民地特有の膨大な重工業発展は、この隔りを直線化する必要にせまられていた。数年後には理想的な鉄の道路がこの草原を横切り、この一帯は完備した緑地帯になり、沼には白いボートさえ浮ぶはずであった。

この小説冒頭部の引用で、「植民地特有の膨大な重工業発展」とは、植民地空間への改造を指す。しかし、この改造はまた、〈満洲での中国人の生活空間を排除する〉という、侵略行為や支配統治も同時に示唆している。また、「沼には白いボートさえ浮ぶ」という言葉が意味する生活環境の改善からは、確かに満洲での日本人に利便性を提供していることがうかがえるものの、こうした環境の改善によって「鴉」の棲家である「沼」を破壊し、「沼」から「鴉」

を駆除する結果をもたらすこととなることから、いわゆる満洲の自然破壊でもあった。したがって、「鴉」も満洲の中国人と同様に、占領側の日本人入植者に支配統治され、その抑圧に対して同等の憤りを実感しているために、このような入植者たちに対して、中国人と共通する復讐心をもっていたと考えられる。

であるならば、満洲の自然を象徴する「鴉」と「モッブ」と化した中国人が力をあわせて、戦争中の日本軍を象徴する「男」と、日本人引揚げ者を指し示す「敗れた人間」を、協力して負傷させるまでの経緯は、まさに敗戦直後の帝国日本の軍人と一般邦人が、旧植民地や元占領区の民衆に逆襲された歴史を忠実に再現しているということができるだろう。

この「男」との遭遇が、第二次世界大戦直後の帝国日本が直面した歴史的事実の示唆であることを見出した以上、〈姦通〉の主導権を失ったこの「男」が、〈姦通〉相手の女性――従来弱者とされてきた「娘」に殺されたことにも、やはり何らかの特別な意義が孕んでいよう。

そこでまず、「男」と対立項をなす「娘」の象徴性を追究する必要がある。

> 丁度そのころ、別な世界からこの鴉の叫びと黒い渦の柱を気遣わしげに眺めているものがいた。新市街から草原中途までのびて来ているアスファルトの道を沼の方へ歩いている一群の人に混って、広い額から眼のまわりに黒く疲れを漂わせているうら若い娘であった。[…]むろん彼等の目的は沼ではない。彼等は賢明にも都市の発展を見越し選りも選って鴉沼に近く、やっと沼から続く草原と丘の波がつきるこのあたりまでのびて来た道路にそって建てられた侘しい三棟の住人なのだ。そしてまず手始めにとモッブに打たれ追われてやっと生き残った十一人であった。

引用にあるように、「モッブに打たれ追われてやっと生き残った十一人」の中に、この「娘」がいたのである。「娘」は、「別な世界からこの鴉の叫びと黒い渦の柱を気遣わしげに眺めている」ために、彼女が植民地で暮らす一般の日本人市民とは異なる「別な」存在であったかもしれない。事実、「娘」だけでなく、「彼等は賢明にも都市の発展を見越し選りも選って鴉沼に近く、やっと沼から続く草原と丘の波がつきるこのあたりまでのびて来た道路にそって建てられた侘しい三棟の住人なのだ」という下線部にも着目すれば、「見越し選りも選って」や「侘しい」といった言葉に示されているように、昨夜の暴動から生き残った「十一人」で構成されているこの小共同体は、「新市街」に住んでいる多くの日本人集団とは異なる特殊な存在としての小共同体であると察することができる。

ただし、ここで留意すべきは、この小共同体の住処である「侘しい三棟」の建設過程において、〈植民地主義〉という概念の痕跡を見出すことが可能であるという点である。

> その草原の中に原生動物さながら不規則な枝を出してはりついているほそ長い沼がこのまわり道を余儀ないものにしているのだ。しかし植民地特有の膨大な重工業発展は、この隔りを直線化する必要にせまられていた。[…]事実その歴史的な大工事は新市街

の側から一部始められ、沼を囲むように波打っている丘陵近くにも二三軒の家が建てられていた。

「娘」を含むこの「十一人」が暮らす場所は、引用に示されている通り、満洲に移住した日本人が「重工業発展」という経済的な理由によって、「新市街」から距離を置いたところであり、新しく開拓した空間である。言い換えれば、「娘」を含むこの小共同体は、都市開発の最先端を走る人間であり、経済発展のためにかつての居留地から離れた場所で、新しい居住地を作り上げた集団でもある。エドワード・サイードによれば、「『植民地主義』というのは、ほとんどいつも帝国主義の帰結であり、遠隔の地に居住区を定着させること」であり、「経済は海外市場や原材料や安価な労働力や膨大な収益のあがる土地をもとめてやまなかった」とされる(20)。この理論に沿うかのように、「沼」の近くに住む「娘」を含むこの小共同体の形成は、まさに帝国化に伴う必然的な結果の一つである〈植民地主義〉そのものを示唆している。「娘」に植民地主義の象徴性が見出されるならば、この「娘」が帝国主義を象徴する「男」に反撃する裏には、何か重大な歴史的事実が隠されているかもしれないのだ。

ぼんやり眼を上げたものの娘は何も理解していない。まっ先に駆けつけたいいなずけの腕に支えられて立上ってみたが、肉体を支配する力さえ失ったらしく手をゆるめられると融けるように崩れてしまう。

物語の最終場面で、「娘」は「いいなずけ」――暴動から生き延びた「十一人」のうちの一人――に支えられながら、「肉体を支配する力さえ失ったらしく」、「融けるように崩れてしまう」、と描かれている。前述したように、「娘」をはじめ、この生き延びた「十一人」は、植民地主義を象徴しており、帝国主義を象徴する「男」から「いいなずけ」の元に戻った「娘」の結末は、帝国主義との関係を完全に断ち切っただけでなく、植民地主義自体も「支配する力」を喪失し「崩れて」いかざるをえない、という歴史的事実を指し示しているのかもしれない。また、たとえ故意ではなかったとしても、この「娘」は確かに「男」を「沼」に押し付けて殺害した。こうした行為は、帝国主義が必然的に植民地主義の拡張をもたらすものの、その拡張によって最終的には帝国主義自体が終焉を迎えることになる、という別の歴史的事実を示唆しているのではないだろうか。

このように植民地と帝国に関わる複雑な歴史が、テクストに反映されている理由の一つに、安部公房の満洲での複雑な実体験を挙げることが可能であろう。たとえば、安部には「毎日のように、(奉天の、引用者)旧市街の城内を、冒険して歩いた」といった記述があり、こうした記述がそのまま『鴉沼』のテクストに反復されていることは、この作品の背後に作者の実体験がなんらかの影響を与えていると言えよう(21)。作家自身の経験を小説で描くことに

(20) エドワード・サイード著、大橋洋一訳『文化と帝国主義1』みすず書房、1998年12月、pp.39-40。

(21) 安部公房「年譜」『新鋭文学叢書2　安部公房集』筑摩書房、1960年12月、p.277。

ついては否定的に考えてきた安部だが、本作は『けものたちは故郷をめざす』(1957)と似て、作者の実体験を踏まえて描かれたものであることは否定できない[22]。

次節では、安部の引揚げに関する認識が、テクストの多様な象徴性と如何に関連しているかについて考察を試みる。

三、〈群衆〉と引揚げ

ここで改めて『鴉沼』に登場する「モッブ」という存在に着目したい。実は、この「モッブ」という言葉が安部の同時代の作品において反復して使用されていることは注目に値する。たとえば、前述した『〈歴史の頁が〉』には以下のような記述が見られる。

> 急行列車の専務車掌をしていたウラは夢から覚めかけていた。窓の外を餓え怒りにみちた数千の中国人群衆が、打ち鳴らす太鼓の音を先頭に、警察官舎めがけて雪どけの渓流のようにしぶきをあげてゆく。手榴弾の炸裂する音、もえ上る火……[…]そのモッブのリズムだけが手にふれ目に見える敗戦だった。[23]

上記の引用部では「群衆」としているが、ここでの「群衆」の暴力的行為は、『鴉沼』に見られる「群集」(『鴉沼』では「群集」と表記されている。)表現と共通している。ただ、『鴉沼』のテクストでは、二つの群衆が見られ、一つは「娘」や「男」が代表する入植者たちのそれであり、作品が語られた時点では住所を破壊され、身体が傷付けられた日本人引揚げ者から構成する群衆である。もう一つは、入植者に抑圧された満洲の中国人によるもので、作品が描かれた時点では「モッブ」となって日本人引揚げ者を襲撃する群衆である。また、「鴉」という動物の集合体も、二つ目の群衆のメタファーとして同一視されている。加藤弘一によれば、『鴉沼』に登場する「群集」は、安部公房に影響を与えたブルガリア出身のユダヤ人作家、エリアス・カネッティの「群衆論」と緊密な関係を持つ[24]。カネッティはその著作『群衆と権力』(1960)の中で、「群衆」の形成に関して次のように語っている。

> 以前には影もかたちもなかった場所に、忽然と現れる群衆というものは、神秘的な、しかも普遍的な現象である。最初は少数の人間が立っていただけかもしれない——五人か一〇人か十二人、それ以上ではない。何も予告されてはいなかったし、何も予期されてはいなかった。突然どこもかしこも黒山のような人だかりとなる。四方八方から

(22) 安部公房は満洲での体験を次のように語っている。「ぼくが育った奉天市の南の境界は、雨期ごとに氾濫する渾河という大きな河の堤防だった。その堤防と鉄道線路がまじわるあたりに、大きな沼があり、その沼全体が、市のゴミ捨て場になっていた。[…]もっとも、中心部を覆っていたのはゴミではなくて鴉だったのかもしれない。夕暮、その沼の表面をめくり上げるようにして、何千羽という鴉が舞い上るのを見たような記憶もある」(「シャボン玉の皮——周辺飛行23」『波』1973年9月号、『安部公房全集24』新潮社、1999年9月、p.417)。『鴉沼』の舞台はおそらく安部のこうした満洲体験をモデルにしている。

(23) 前掲、安部公房(1997年)、pp.145-146。

(24) 加藤弘一「解説」『(霊媒の話より)題未定　安部公房初期短編集』新潮社、2013年1月、p.294。

> 他の人びとが、まるで通りという通りが全部そこへ向っているかのように、殺到してくる。多くの者は一体何が起こったか知る由もなく、尋ねられたところで返事のしようもない。だが、かれらは他の大多数の人びとがいる場所へ急ぐのである。[…]群衆は、その発生する場所、そのもっとも内部的な核においては、外見ほどには、必ずしも自然発生的とはいえない。しかしながら、実際に群衆をつくった五人か一〇人か十二人の人間を除くと、群衆はどこでも自発発生的である。(25)

カネッティの『群衆と権力』によれば、群衆の形成において、まず核となる「少数の人間」が必要で、その数は「五人か一〇人か十二人」である。『鴉沼』において、日本人引揚げ者の群衆の場合、その核心となる人間はすでに述べたように、「生き残った十一人」である。そして中国人の場合、「笛がなりあえぐような群集の叫びが城門を打ち倒し、しっ黒の中にきながら息をこらす敗れた人間の町を目掛けてつき進んだ」という一節にあるように、ここでの中国人群衆は、カネッティが「四方八方から他の人びとが、まるで通りという通りが全部そこへ向っているかのように、殺到してくる」と語っている「群衆」の特徴と一致している。つまり、『鴉沼』に登場する二つの群衆は、ともにカネッティの『群衆と権力』で言及されている「群衆」の痕跡を思い起こさせるのである。

これは実際に、『鴉沼』や『〈歴史の頁が〉』という二つの小説だけでなく、石橋佐代子の考察によれば、安部公房の『壁』(1951)に収録されている作品の大半に、このエリアス・カネッティの「群衆論」の痕跡が見られるという(26)。また、安部自身もそのエッセイにおいて、カネッティをカフカと並んで、自身に多大な影響を与えていた人物と告げてもいる(27)。とりわけ、安部公房の「共同体」に関する思考の基盤は、カネッティの理論にあると考えられる。

> 共同体というものには、自分たちが連帯をつくるという機能と同時に、敵をつくって何かを排除するという作用があって、その排除作用を強化することで内側を固める。

(25) エリアス・カネッティ著、岩田行一訳『群衆と権力(上)』法政大学出版局、1982年1月、p.5。

(26) 石橋佐代子は安部公房の『壁』を対象に、エリアス・カネッティの『群衆と権力』と照合しながら、「『S・カルマ氏の犯罪』も同様に、名刺(一つ)を中心にした身のまわり品たち(九つ)によって、攻撃目標を偶然的犯罪者ぼくとして、群集が形成される。[…]『バベルの塔の狸』では、狸に影を取られたぼくが、目だけを除いた透明人間になると、目を追う人々が押し寄せ、警察もラジオも巻き込んだ群集となる。『洪水』には、群集は形成されないものの、労働者を手始めにどんどん液化し洪水をなす人類が描かれる。洪水は、E・カネッティの群衆シンボルと見做せよう。『事業』は、何んの値打もないような人間共が、事業主の私におびきよせられ、自発的に(死の)群集を形成していく予感が描かれる」(「安部公房文学にみる「群衆と権力」――『壁』を中心に　F・カフカ、E・カネッティと――」『名古屋近代文学研究』第17号、1999年12月、p.60)と指摘している。

(27) ガルシア＝マルケスを賞賛する際、安部公房は「マルケスの魅力は、まずどこどこの作家というような所属の括弧からはずれたところにあると思う。あえて所属を言うならむしろ時代でしょう。空間より時間、地域よりも時代に属する作家なんだ。[…]よく知られているところでは、ブレヒトであるとか……それからエリアス・カネッティも、やはりその周辺に位置づけられる。もっと輪を広げればフランツ・カフカなんかも含まれる」(「ガルシア・マルケスをめぐって」『イベロアメリカ研究』第5巻第1号、1983年4月、「地球儀に住むガルシア・マルケス」『安部公房全集27』新潮社、2000年1月、p.124)と述べている。この無所属性の文学的特徴は安部文学の特徴とも言われており、こうした中で、エリアス・カネッティの観点も国家を超えた普遍性を孕むために安部を惹きつけたのかもしれない。

だから、ある段階で弱い共同体を急速に固めようとすると、固めることよりも排除するシステムを強化するわけです。たとえばナチスがそうでしょう。ユダヤ人を排除する、非アーリア民族を排除する、という形をとって凝縮をさせていく。(28)

引用部に示されているように、安部はここで、「共同体」を「固めよう」とするには、「排除するシステムを強化」しなければならないと述べ、「ナチス」という「共同体」の形成プロセスが「非アーリア民族」の「排除」を伴うことを否定的に評価している。この安部による「共同体」についての思考様式は、『群衆と権力』で言及されている理論と緊密に関わっているように思われる。

群衆にとって自らを保持しうるもっとも確実な――しばしば唯一の――可能性は、群衆が相互関係をもつ第二の群衆の存在にある。二つの群衆が競技において競争者として競いあうにせよ、お互いに対する重大な脅威として敵対しあうにせよ、第二の群衆の姿を見たり、あるいはただ第二の群衆のことを思い浮かべるだけでも、第一の群衆の崩壊は食いとめられる。(29)

引用箇所に示されているように、カネッティによれば、群衆が「保持しうる」ためには、「第二の群衆」という対立した存在が必要である。とりわけ「お互いに対する重大な脅威として敵対しあう」にあるように、この「第二の群衆」とは「競争者」といった「敵対」関係でなければならない。したがって先述した通り、カネッティの「群衆論」は、安部がこの時期に考えていた「共同体」思想の基盤になっていると言うことができるだろう。

尚、カネッティの『群衆と権力』で呈示されている「群衆論」は、安部公房の有名なエッセイ『内なる辺境』(1968)を代表とする1960年代の諸作品を中心に反映されているが、実のところ、1948年の『鴉沼』のテクストにもカネッティの理論が反復されているように思われる(30)。たとえば、『鴉沼』において、日本人引揚げ者群衆と中国人群衆は、まさに敵対する二つの群衆でありながら、互いの存在と矛盾によって、「自らを保持しうる」ことになっている点に注目する。具体的には、暴動から一夜があけ、日本人引揚げ者の群衆が次のような結末を迎えている場面を引用する。

見るかげもなくおとろえた十一人が、一塊りになってよろよろと丘の背を越えたとき、丁度太陽が色彩をつき破って大地に光を投げかけた。その確実な復帰に鴉たちが歯を

(28) 安部公房「根なし草の文学」『波』1969年9・10月号(『安部公房全集22』新潮社、1999年7月、p.350)

(29) 前掲、エリアス・カネッティ(1982年)、p.78。

(30) 安部公房は「内なる辺境」の中で、〈群衆〉形成についてカネッティの観点を援用しながら、「一般民衆が、自然自発的に反ユダヤ思想を持つに至るなどということはありえない。煽動者なしに――その野心的な働きかけなしに――ファシズムが成立つなどと言うことは、絶対にありえないのだ」(「内なる辺境」『中央公論』1968年11月-12月号、『安部公房全集22』新潮社、1999年7月、p.221)と述べている。

むき出して叫ぶ。そしてたちまち数千の群が黒い渦になって西の空に舞い立った。

下線部に注目すると、「一塊り」という言葉は、恐怖の一夜を共に過ごした引揚げ者たちが、この時点では逆に強固に団結している状態を示している。また、「確実な復帰」という言葉も、苦難を乗り越えた引揚げ者たちが、この「大地」において永遠とまではいかないものの、ある程度以上のスパンがある前提で一時的に生活の継続が可能であることを示唆している。このように満洲の中国人群衆との対立と衝突を経た上で引揚げ者たちが迎えたのは、その群衆の消滅ではなく、むしろ依然とした群衆の「保持」という結末である。

同様に、『鴉沼』に描かれているもう一つの群衆、満洲の中国人＝「モッブ」もまた、同じような傾向を示している。

> 鴉沼が王者の誇りをもって此の稀有の増悪と愛情に慄えたのが、白く泡立つ霧となって湧き始めたのは丁度そのときであった。霧は次第に押し広がり、丘を越え、畑を越え、町々の屋根を越え、みだらに酔い狂うモッブの顔までも包み込んでいく。月はかくれ、太鼓の音はにぶり、火事は輝きを失い、人々は足を取られてよろめいた。

上記の引用は、満洲の中国人が暴動を起こした直後の夜を描いたものである。「鴉沼」から発生する「霧」が「みだらに酔い狂うモッブの顔までも包み込んでいく」ことは、この時点において、「鴉沼」が代表する満洲の自然と、「モッブ」が代表する人間が複雑な集合体となっていることを表しているのだろう。また、「王者の誇り」という言葉に示されているように、この際の「鴉沼」と「モッブ」、すなわち満洲の自然と人間は、入植者を襲撃して奪われた土地を取り戻したことで共に勝利を味わっている。言い換えれば、満洲の土地で従来抑圧されてきたこの特別な群衆は、入植者との対抗によって自身の「保持」が得られたということが示唆されているとも表現できよう。

このように、『鴉沼』のテクストには、日本人引揚げ者で構成する群衆と、この引揚げ者を襲撃する満洲の中国人群衆、という二つの群衆が登場する。ただし、二つの群衆の対立は、一方の〈群衆〉の消滅を目的としているのではなく、むしろそれは動的なバランスの中で〈群衆〉自体の存続を求める行為を意味している。したがって、安部は1960年代になって初めてカネッティの『群衆と権力』における「群衆」の諸概念について考え始めたのではなく、おそらく1940年代からすでにカネッティの「群衆論」に近いものを考えていたと言えるかもしれない。

ここで留意すべきは、安部が『鴉沼』の刊行時期の1940年代後半に〈群衆〉理論を考えていた背景に、敗戦直後の引揚げ者の社会状況、つまり600万人以上の帰国者が、重要な〈群衆〉として戦後の日本国内で存続するという状況に、彼の思考の一端を見出せることである。周知のように、安部は生後間もなく満洲に渡り、彼の地で終戦を迎えた後の1946年に日本へと引揚げてきた。安部は自身の引揚げについて語ることは少ないが、その痕跡は多くのエッ

セイから確認できる。

> 農村と都市というのは、まさに閉鎖された社会と、展開された社会という関係なんだ。だから、都市へ出てきた人はその都市に対する不安感に耐えられない。民話のように、その不安感につけいるのは、ずるいというか、卑怯というか、下司根性だと思うんだ。そのばく然とした不安感、空虚感、しかも自分がイカリをおろしていたと思った場所も水草のようなもので、頼りないものだと気づいたとき、民話もアスピリンくらいの役目はしてくれるだろう。アスピリンだけならべつに問題はない。しかしやがて民話が自己主張をしはじめる。正統性を要求しはじめるんだ。そして、異端告発、つまり郷土を持たない人間を、“根なし草”として叩くスタイルをとるんだよ。戦争中でも、「愛国心とは何か」というようなことを言っているうちは大したことはないんだけれども、そのうちに「非国民とは何か」ときたときに、はじめて“牙”がむき出しになる。しかも、心情的には、まだ日本人の中に郷土意識というようなものは強くある。(31)

引用部では引揚げや引揚げ者といった言葉は出現していないが、「郷土を持たない人間」との表現は、敗戦後に旧植民地での土地を失った引揚げ者と共通している。また、「非国民」との表現も、戦後の引揚げ者に貼られたレッテルの一つでもあったことは言うまでもない。他の引揚げ作家とは異なり、安部は常々より〈作者の実体験の物語化〉というものについて否定的であったがために、自身の引揚げ体験や引揚げ者というアイデンティティを文章化することが少なかった。しかし、「郷土を持たない人間」や「非国民」といった言葉からは、安部公房の言説が引揚げ者の戦後日本社会での位置づけを鋭く指摘していることが読み取れるだろう。

その上で、安部の引揚げ直後に書かれた『鴉沼』に改めて着目すれば、引揚げ者たちの結末はオープンエンディングとして不確定のままであったことがわかる。しかし、「あの壊された三軒の住人達も、いよいよ蒼ざめてうなだれる。[…]生存の無意味さを取戻すことこそ吾等の倖せではなかったか」が示しているように、引揚げ者という〈群衆〉は「生存の無意味さを取戻」し、そこに「倖せ」を覚えたことを予測できる。〈群衆〉の存続を実感した引揚げ者たちだが、「あの壊された三軒の住人達」が最終的に結束を遂げた点に焦点を当てるならば、この時期の彼らは互いに同じアイデンティティを持っていることに気づかされたのである。

さらには、その共同体の結束が強固なものとなった前提が、満洲での中国人〈群衆〉による襲撃であった点についても注目しておきたい。おそらくは、テクストから見出される〈群衆〉の対立による〈群衆〉自体の存続、という思考様式の裏に、引揚げ者たちが本土の日本人に嫌悪されるものの、そこには集団の消滅ではなく、むしろ引揚げ者同士の結束や団結を

(31) 安部公房「問いと答えの間――第一部・問題提起」『海』1969年10月号(『安部公房全集22』新潮社、1999年7月、p.408)

生み出す可能性が孕んでいるのではないか、という安部の願望が隠されているのかもしれない。

このように安部の〈群衆〉に関する思考が引揚げと関わっていることを踏まえれば、不貞の女性が同時に引揚げ者と設定されていることにも、重要な意義を見出すことができる。なぜならば、「盗人」と称される女性引揚げ者が男性引揚げ者を誘惑することは、引揚げ者共同体内部の破綻につながる可能性を帯びるからである。たとえば、前節で引用した『〈歴史の頁が〉』という小説だが、女主人公の「ツダ」は引揚げ船の中で異なる男性を誘惑したあげく、その男性たちの間で生じる衝突について、「どうしてみんなそんなに腹を立てあっているのかしら？」と嘲笑している(32)。男性引揚げ者同士のトラブルの全てが、必ずしも全部女性引揚げ者の誘惑に由来するわけではないものの、その誘惑によってお互いに亀裂が生じていることは確かである。

更に、この破綻は道徳の側面から批難され得るのみではなく、「姦通罪」のような法律上の控訴もできるため、そこに生じる亀裂は必然的に引揚げ者の〈群衆〉の団結を破壊してしまうと言えるかもしれない。言い換えれば、引揚げ者の〈群衆〉内部にこうした〈姦通〉行為が発生すれば、〈群衆〉の合法性、すなわち引揚げ者としてのアイデンティティは根本から揺ぎかねない状態に陥ってしまう。『鴉沼』の「娘」が最終的に抱く自己懐疑がこうした推論を裏書きしているように思われる。

> ぼんやり眼を上げたものの娘は何も理解していない。まっ先に駆けつけたいいなずけの腕に支えられて立上ってみたが、肉体を支配する力さえ失ったらしく手をゆるめられると融けるように崩れてしまう。そして娘の顔はもう見違えるほど醜くなっていた。

ここでは「男」を誘惑したあげく、彼を殺害した後の「娘」の状態が描かれている。留意すべきは、「崩れてしまう」や「見違えるほど」といった「娘」の変容を意味する言葉が、語り手によって「まっ先に駆けつけたいいなずけ」の視線から語られた内容であり、また、こうした言葉はある意味で「娘」を否定的に評価していると言える。つまり、同じ引揚げ者を象徴する「娘」と「いいなずけ」ではあるものの、「男」との〈姦通〉を経た「娘」にとっては、道徳と法律の両方においてその正当性が疑わしいものになり、引揚げ者〈群衆〉内部の亀裂が前景化されている。このように引揚げ者を象徴する登場人物のアイデンティティ危機は、そのまま日本へ帰還直後の引揚げ者が直面しているアイデンティティの混乱と一致しているかのようである。そこで、引揚げ者であり、文芸評論家でもある尾崎秀樹の言葉に着目してみたい。

> 日本人は、ぼくも日本人であるとするならば、無条件で迎えてくれるという甘えがあったんですよ。[…]親戚はいたんだけれども、迎えてくれないんだな。[…]欲しいのは心

(32) 前掲、安部公房(1997年)、p.155。

なんですよね。日本人として引揚げて来たんだったら、日本人として迎えて欲しいという感じがあったわけなんだが、違うんだなあ。[…]ぼくは日本人じゃないのかなあ、という感じね。これはやっぱり、非常に裏切られた感じでしたね。おれは違うんだなあ、招かれざる人間なんだなあ、と。この実感は三十何年たってもなくならないね。(33)

引用部に示されているように、引揚げ者が帰還した際、彼らを迎えたのは日本という祖国の歓迎ではなく、「招かれざる人間」という感覚を覚えさせるほどの内地の日本人による排除であった。引揚げ者としての尾崎は、「ぼくは日本人じゃないのかなあ」という違和感を抱きながら、自身のアイデンティティの混乱を実感するようになり、日本人でありながら日本人ではなくなってしまうという曖昧な存在と化している自分自身を初めて意識する。これは尾崎秀樹個人の認識と体験ではなく、多くの引揚げ者の普遍的な認識と体験でもあった(34)。同じ引揚げ者として、敗戦直後の安部もこうしたアイデンティティの混乱を経験した可能性が高く、それ故に不貞の女性引揚げ者という存在がアイデンティティの危機を示唆する、という一連の作品を創作してきたのかもしれない。

以上考察してきたように、『鴉沼』に描かれている〈群衆〉の対立と「娘」の不貞行為は、ともに引揚げ者の歴史的コンテクストと関連しており、安部公房の引揚げ者としてのアイデンティティや引揚げへの認識を反映している。テクストから読み取れる〈群衆〉の対立による〈群衆〉の存続には、引揚げ者という共同体が戦後も日本で存続してほしいという安部の願いが込められているのではないだろうか。と同時に、作品に見られる女性引揚げ者の不貞行為が、引揚げ者同士の内部の破綻を引き起こすという描写には、戦後しばらくの間、引揚げ者の存続状況を不安視する安部の懸念が示唆されているように思われる。

おわりに

本論文では安部公房の短編小説『鴉沼』を対象に、比喩のレベルで語られてきた登場人物の〈姦通〉行為が、植民地と帝国との複雑な関係性を示唆していることを明らかにした。また、このような植民地と帝国との関係をこれほど巧に設定しながら描くことを可能にしたのは、作者自身の満洲体験と引揚げの記憶であったことを指摘した。

『鴉沼』での登場人物が象徴するものは非常に多様であると言える。たとえば、登場人物である「男」は日本軍人を象徴すると同時に、帝国主義をも示唆している。また、「娘」は引揚げ者を象徴すると同時に、植民地主義そのものを示唆してもいる。したがって、この「男」が「モッブ」となった中国人に負傷させられるプロセスと、「娘」の住処が破壊された過程は、そのまま敗戦直後の帝国日本の軍人と民間人が、旧植民地の民衆に逆襲された歴史上に発

(33) 尾崎秀樹「日本の“カミュ”たち　「引揚げ体験」から作家たちは生まれた」『諸君』第11巻第7号、1979年7月、p.208。

(34) 本田靖春は引揚げ体験を持つ芸術家の話をまとめ、こうした日本人引揚げ者として、本土の日本人から排除される違和感を「各氏の思い出に色濃くにじんでいるのは、はみ出し者、余計者、よそ者の意識である」(同上、p.208)と述べている。

生した事件を反映している。また、負傷後の「男」は「娘」との〈姦通〉が不可能となったうえ、「娘」に逆襲までされてしまったことは、植民地主義の過度な発展によって最終的に帝国主義が解体されてしまうという、歴史的な事実を指し示している。このような歴史的コンテクストがテクストで巧妙に再現されている理由の一つに、安部の植民地での実体験を挙げることが可能である。

安部公房における戦後の様々な体験の中でも、引揚げ体験は彼の小説において〈群衆〉というカネッティによる社会学の理論と深く結びついている。『鴉沼』には二つの〈群衆〉が描かれ、一つは「娘」や「男」が代表する入植者集団であり、もう一つは「モッブ」となった満洲の中国人集団であった。そして、このカネッティの理論に従っているかのように、二つの〈群衆〉は対立するものの、それは片方の〈群衆〉を消滅することを目的としているのではなく、むしろ〈群衆〉の存続のために働いていると結論付けることができる。

ただし、安部の思考はカネッティの理論が打ち出された以前に提出され、それは引揚げ者たちが排除されながらも、その排除に心折れることなく如何に生存していくべきか、という願望を内実とする思考様式であったと考えられる。さらに、テクストにみる女性引揚げ者が男性引揚げ者を誘惑する設定は、引揚げ者という〈群衆〉内部からの破綻を如実に示しており、その背後には本土の日本人と相容れることのできないという、引揚げ者の正当性そのものが問われているという厳しい現状を見出すことができるかもしれない。

解　放（かい　ほう、XIE Fang）
吉林大学

付記

本稿は、東アジア日本研究者協議会第6回国際学術大会（北京外国語大学、2022年11月4日）における口頭発表の原稿を基に改稿したものである。『鴉沼』の引用は『安部公房全集2』（新潮社、1997年9月）に拠る。

参考文献

安部ねり『安部公房伝』新潮社、2011年
有村隆広・八木浩編『カフカと現代文学』同学社、1985年
石田建男「国家へのアンビバレンス――安部公房」『戦後文壇畸人伝』藤原書店、2002年
石田雄『記憶と忘却の政治学　同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店、2004年
五木寛之・日野啓三「異邦人感覚と文学」『文學界』1975年4月号
ウィリアム・カリー著、安西徹雄訳『疎外の構図――安部公房、ベケット、カフカの小説』新潮社、1975年
小熊英治『〈民主〉と〈愛国〉――戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社、2002年
呉美娅『安部公房の〈戦後〉――植民地経験と初期テクストをめぐって』クレイン社、2009年
オルデガ・イ・ガセット著、佐々木孝訳『大衆の反逆』岩波書店、2020年
高野斗志美『増補　安部公房論』花神社、1979年
小久保実「安部公房の満州体験」『国文学　解釈と鑑賞』第40巻第6号、1975年
ガブリエル・タルド著、稲葉三千男訳『世論と群集』未来社、1964年
ギュスターヴ・ル・ボン著、櫻井成夫訳『群衆心理』講談社、1993年
坂堅太『安部公房と「日本」――植民地／占領経験とナショナリズム』和泉選書、2016年
朴裕河『引揚げ文学論序説――新たなポストコロニアルへ』人文書院、2016年
ヘーゲル著、長谷川宏訳『精神現象学』作品社、1998年
松田政男「引揚げ者一〇〇人の告白」『潮』第142号、1971年
山田博光「安部公房論序説――リアリズムと共同体」『帝塚山学院大学研究論集』第14巻、1979年
若槻泰雄『戦後引揚げの記録』時事通信社、1991年
渡辺広士「安部公房と共同体」『國文學　解釈と教材の研究』第17巻第12号、1972年
渡辺広士『安部公房』審美社、1976年

『輝ク』における日中女性の連帯とその変節
―インターナショナル·フェミニズムから帝国のフェミニズムへ―

Sino-Japanese Women's Solidarity and its Apostasy in *Kagayaku*: An Analysis of the Transformation from International Feminism to Imperial Feminism

楊　佳嘉

Abstract

Founded during the Fifteen Years' War, *Kagayaku* (1933-1941) aimed to promote "solidarity with all women" and serve as a platform for Japanese intellectual women in the literary and critical fields. This magazine contains several pieces about China, particularly the issue of solidarity between Chinese and Japanese women, which is discussed by these women cultural figures. Their narratives, divided into the earlier and later periods, show the following characteristics. In the earlier period, they were closely associated with leftist Chinese women cultural figures, and it can be pointed out that there was a growing sense of solidarity toward women's liberation. There is sometimes a look of envy, and at other times self-reflection and reaffirmation of themself as an opportunity to reassess the Japanese situation. In the latter period, blood, based on the geographical framework of the Orient, and motherhood, based on the gender framework of women, are positioned as important links in the goodwill and alliance between Japanese and Chinese women, through which peace between the two countries is expected to be achieved in their narratives. At the same time, "same blood" and motherhood became the new form of hope for Japanese and Chinese women's "solidarity". In the name of the " East Asia Construction", international feminism in the earlier period of *Kagayaku* slipped into the middle zone between internationalism and nationalism, and by being limited to "solidarity" of blood and motherhood, it embraced an affinity with the logic of aggression and was transformed into imperial feminism. Consciously or unconsciously, these intellectual women have fallen into the trap of " East Asia Construction" while advocating goodwill, alliances, and so on, and their good intentions have been distorted.

Keywords

『輝ク』、女性連帯、インターナショナル·フェミニズム、帝国のフェミニズム、日中戦争

Kagayaku, Women's solidarity, International Feminism, Imperial Feminism , Second Sino-Japanese war

はじめに

『輝ク』(1933.4-1941.11)は長谷川時雨[(1)]によって創刊されたリーフレット(月刊)である。このリーフレットは「全女性が手をつないで進んでゆく為に」[(2)]生まれたものであり、その

(1)　長谷川時雨(1879-1941):戯作家、小説家。明治時代から昭和初期にかけて文壇で活躍し、代表作は戯曲『海潮音』(1905)、『日本美人伝』(聚精堂、1911)、『旧聞日本橋』(岡倉書房、1935)などである。昭和初期において、雑誌『女人芸術』と『輝ク』の発行を通して、女性の社会進出、地位の向上に力を入れた。

(2)　「輝く会の発生」、『輝ク』、1933.5、p.8。その出発点は『女人芸術』の創刊と同じである。

前身である『女人芸術』[3]（1928.7-1932.6）の方針を継承している。モノクロ、4ページの狭い誌面であるが、文芸評論、消息作品、紀行、海外および国内各地からの通信などが多く載せられ、創刊当初の会員は、『女人芸術』時代の投稿者たちが多数を占めていたので、文芸、評論界の大多数の女性をつなぐ紐帯であったといえる。こうした女性知識人、文化人たちが集まる場としての『輝ク』は、個々の作家の動向を知ることに資料的価値がある[4]のみならず、1930年代の女性インテリ層の人たちの思想的動向とその変化がうかがえる資料としても注目に値するだろう。

先行研究においては、『輝ク』の全体像と性格、個別作家と『輝ク』の関係、越境した執筆者たちの投稿などの側面から論じられてきた。例えば、尾形明子は、1937年7月の日中全面戦争の開始を境に、インターナショナルな雰囲気が漂う前期と銃後運動の拠点となる後期に区分し、雑誌の性格と全体像を明らかにした[5]。個別作家と『輝ク』の関係については、『耀ク』を拠点とする時雨の銃後の原点[6]、田村俊子と『輝ク』の関係[7]、戦時下の『輝ク』における円地文子の執筆活動をめぐる分析[8]などがなされている。越境した執筆者たちの投稿については、サラ・フレデリックの議論と李煒の議論があげられる。フレデリックは戦時下という文脈における芸術と政治、ジェンダー、階級との緊張関係に注意しつつ、アメリカ、ブラジル、フィリピンなどの海外に在住する女性たちの寄稿を分析することで、ナショナリズムと軍国主義が高揚している時期にもかかわらず、『輝ク』における一部の女性たちの国際的な経験についての語りには、コスモポリタンで折衷的な視点が反映されており、それは当時のイデオロギーに完全に回収されているとは言い難いものであったことを指摘している[9]。李煒は尾形の研究を踏まえ、『輝ク』における中国関連の記事を整理したうえで、その内容を「中国女性への関心」、「「満洲」についての記録」、「中国戦地での取材／「慰問」についての記録」に分類し、それらの記事の時代を追った変化の特徴を、「ジェンダーの言説」（前期）から「政治の言説」（後期）へ、というようにまとめている[10]。しかし、このような評価

(3) 『女人芸術』(1928.7-1932.6): 長谷川時雨によって創刊された文芸雑誌である。創刊当初は新人女性作家の発掘という役割を果たしていたが、やがて左傾化し、極左の雑誌と認定され、三回の発禁処分を受けた。資金不足、時雨の病気などの関係で、1932年6月を以て廃刊したが、多くの女性作家を文壇に送り出した点では、『女人芸術』という媒体の貢献度は高い。また、女性作家のみならず、多くの女性評論家、女性知識人もこの場で発信し、多層な読者に返信した。同時代のほかの女性雑誌と比べ、『女人芸術』は「全女性」を網羅し、様々な階級と地域を超え、女性たちを広くつなぐ回路を形成していたといっても過言ではない。

(4) 渡邊澄子「戦争下の円地文子 ――『輝ク』時代を中心に」、『芸術至上主義文芸』第35号、2009.11、p.92。

(5) 尾形明子『「輝ク」の時代 ―― 長谷川時雨とその周辺』、ドメス出版、1993。

(6) 尾形明子「『輝ク』の銃後運動 ―― 主宰者長谷川時雨を中心に」、『女たちの戦争責任』(岡野幸江ほか編)、東京堂出版、2004、pp.177-193。

(7) 尾形明子「田村俊子と『輝ク』」、『俊子新論：今という時代の田村俊子』(渡邊澄子編集、[国文学解釈と鑑賞]別冊)、至文堂、2005.7、pp.78-86。

(8) 同注(4)、渡邊前掲論文。

(9) Sarah Frederick, Beyond *Nyonin Geijutsu*, beyond Japan: writings by women travellers in *Kagayaku* (1933-1941), Japan Forum 25:3, 2013.7, pp.395-413.

(10) 李煒『她們的叙事 ―― 近現代日本女性作家的戦争書写研究』、上海交通大学出版社、2023、p.118。

には問題もある。十五年戦争中に発行されていた『輝ク』が、厳しい検閲と弾圧の下で政治と離れたものであることは難しかったのは言うまでもない。しかし、その後期の特徴を「政治の言説」と一括りにしてしまえば、『輝ク』においてもっとも重要視されているジェンダーの問題が矮小化されてしまうのである。

後述するが、『女人芸術』と『輝ク』という長谷川時雨が主宰した二誌は、終始、女性文化の向上を目指し女性文化人に発信する場を提供するというフェミニズムの姿勢を貫いていた。換言すれば、前期と後期を通じて、『輝ク』の中国関連の記事において「ジェンダー」問題への関心は存在し続けていたのである。本稿で注目したいのは、時局の変化によって、そのジェンダーの言説がどのように政治と交渉しながら変化していくかという問題である。具体的には、『輝ク』における海外関連の記事の性格を明確にし、変化しつつある日中関係の時局の下における、日中女性の連帯とその変節をめぐる問題を中心に論じていく。この研究を通して、1930年代を生きる日本の女性文化人たちがインターナショナル ·フェミニズムから帝国のフェミニズムへと変質していった過程と、その思想の軌跡を究明したい。

一、『輝ク』と外部——『女人芸術』からの継承とその変節

全女性の連帯を夢として出発した『輝ク』は、その前身である『女人芸術』と同じく、海外へ強い関心[(11)]を示している。その特徴は、次の三点にまとめられる。

第一の点は、世界各地へ渡った日本女性からの通信と寄稿が豊富に載せられていることである。海外在住者からの寄稿の例としては、創刊当初は北米に在住していた田村俊子のカナダとアメリカからの書簡の掲載があり、閉塞感の中にいた会員たちからの反響が大きかったという[(12)]。アメリカで仕事をしていた坂西しほは、ワシントン議会図書館日本部における日本書籍、日本学研究、日本文学の出版状況などを紹介していた[(13)]。また、外務省の役人の妻である大石千代子は夫と共に世界中を移動し、『輝ク』が発行されていた間に滞在していたブラジル、フィリピン、「満洲」での経験を通信やエッセイの形で絶え間なく寄稿している。そのほか、1938年7月以降、国内での運動に挫折し、逃げ場としての「満洲」で新たな生活を開始したアナーキスト(望月百合子、八木秋子)やマルキスト(永島暢子)たち、作家として「満洲」で活躍していた横田文子らの通信やエッセイも少なくない。旅行者として海外から通信を送って来た者には、岡田八千代(フランス 1934.2)や望月百合子(中国　1936.4、6)、長谷川春子(中国　1938.1)、森三千代(中国　1939.1)、野上弥生子(イギリス　1939.2)などがいる。さらに、仕事の関係で訪問した海外から報告や通信を寄稿してくるのは、ソビエトを視察した除村ヤエ(1936.2)や文部省によって中国へ派遣された田村房の他には、従軍した記者や慰問団に参加した女性たちが多かった。

(11) 『女人芸術』における海外への関心の問題について、飯田祐子「「女人芸術」と外部」、『女性と闘争 —— 雑誌「女人芸術」と一九三〇年前後の文化生産』(飯田祐子、中谷いずみ、笹尾佳代編、青弓社、2019、pp.164-167)を参照されたい。

(12) 同注(7)、尾形前掲論文「田村俊子と『輝ク』」、p.80。

(13) 坂西しほ「ワシントン議会図書館日本部」、『輝ク』、1936.10、p.173。

第二の点は、『女人芸術』の時代のように、外国の事情を多く紹介することである。前期には、ソビエトの児童読物、「満洲」、朝鮮で活躍する女性の姿、台湾での見聞、中国人女性作家、女子留学生、中国北京での見聞、フランスのジャーナリスト、オーストラリアの小説、アメリカの日本関係の書籍、研究紹介、ブラジルの日系二世の問題など、様々な内容を紹介している。後期には、各国への関心がファシズム国家を中心とした戦時下の婦人の仕事、生活の紹介に偏っている。また、外国に関する記事の中で、中国と「満洲」についての記事が前期よりだいぶ増えており、そのほとんどは現地についての報告と講演である。

第三の点は、外国の職業婦人やインテリ女性を囲む座談会の開催、視察団との交流、外国人留学生を招く行事などを多く設けていることである。例えば、前期においては、ソビエトの職業婦人、童話作家などを囲む座談会についての記事が散見し(14)、中国の女優、女性作家からの寄稿(15)、アメリカの女性教育者からの通信など(16)も掲載されている。『女人芸術』と比べ、外国の女性知識人からの寄稿が載せられることが増えたのは前期『輝ク』の顕著な特徴であろう。後期になると、そうした寄稿はなくなったが、外国人留学生を招待する行事は続いており、留学生の少女たちからの寄稿が現れてきた。そのほか、中国の女性と親善するための評論や宣伝文などが多く掲載されており、親善という枠組みの中で銃後の活動の一環を果たしていたと言えるだろう。

以上のような特徴からは、時局の変化にもかかわらず、『輝ク』における外部への関心は薄くなっておらず、『女人芸術』の時代よりも積極的に海外の情報を取り入れていたことがわかる。女性自身の外地や外国での経験を語る文章が多く掲載されていることは『女人芸術』と同じであるが、海外の情報の取り扱いについては別の特徴が示されている。左傾化した『女人芸術』においては大量のソビエト関連の記事が誌面を占めていた(17)のに対して、『輝ク』ではソビエトに関する記事がだいぶ減っており、中国と「満洲国」に関する記事が急増している。また、多くの外国人女性や留学生との交流があったことも『輝ク』の特筆すべき特徴である。しかし、時局の変化によって、前期と後期でその性質が変化したことも否めない。尾形が指摘しているように、前期の『輝ク』はこの時代のどの雑誌よりもインターナショナルで、後期は銃後運動の中で国策に適うように図られていった(18)。

二、前期の『輝ク』と日中女性の連帯 ── 日中インテリ女性の交流をめぐって

前述したように、前期の『輝ク』の特徴の一つは、外国人女性からの寄稿が載せられ、外国人のインテリ女性との交流が重視されていたことである。この点については、特に中国

(14) 例えば、「クラフチエンコ女史に聴く：児童読物その他について」(1933.5)、「これからの童話についての抱負 ── メクシン氏座談会より ──」(1933.6)などがあげられる。

(15) たとえば、王瑩「小さいお友達に：文化学院参観の後で」(1934.7)、謝冰瑩「輝クに寄す」(1935.1)などがあげられる。

(16) モーリン・ベンバートン(狩野弘子訳)「アメリカ通信」、『輝ク』、1936.11、p.177。

(17) 同注11、飯田前掲論、p.165。

(18) 尾形明子「『輝ク』解説」、『『輝ク』解説・総目次・索引』、不二出版、1982、p.6、15-16。

へ視線を向けたものとして、次の二つの事例が挙げられる。

2.1 来日した中国女性の発信とその応答 ── 王瑩と謝冰瑩の寄稿を中心に

1934年7号には、日本へ留学に来た中国の女優王瑩[19]の寄稿が載せられている。王瑩は文化学院に参観した後、小さな女子学生たちに対して前日歌った歌の意味を解釈したという。その中の一つの歌の曲名と意味は明言されていないが、「涎が垂れそう」な小虎が小さな山羊に「門をお開け」と声をかけるという歌の内容からすると、日中の時局を隠喩した歌であることがわかるだろう。また、彼女は中国の古い叙事歌の『花木蘭』の内容を引用し、女性主人公の木蘭のように、「一般の被圧迫女性達を導き」、「「自由」「平等」の輝ける路を歩んで」いくようと呼びかけている[20]。それに対する応答として次号に、会員の西村アヤと戸川エマの、王瑩の容姿や人柄に惹かれたことや、異国の友達になれたことの嬉しさを素直に表現した記事が掲載されている[21]。時局に無関心であったか、あるいはわざと時局の問題を避けたのかは、現在のところ明らかなことは言えないが[22]、王瑩が投げかけた二つの問題について、二人とも正面からの応答をしていない。

1935年１号には、中国の女性作家謝冰瑩[23]についての紹介文[24]があり、同ページに、謝冰瑩が『輝ク』読者への初対面の挨拶に代えて書いた文章、「「輝ク」に寄す」が掲載されている。この文章において、彼女は女性作家の使命は「文化運動の工作」と「被圧迫女性のための解放運動」であると指摘し、「無産婦人の生活」の「苦痛と要求」を創作の中に描き出すべきだと主張している[25]。謝冰瑩は1934年の秋に、二度目の留学で来日し、その後中国文学研究会の招待を受け、12月に開催された第一回の談話会で「吾が文学経歴」というテーマで講演を行った[26]。この文章は、この座談会に参加した若林つやの依頼によって書かれたもののはずである。

興味深いことに、王瑩と謝冰瑩は二人とも中国の左翼芸術運動と深く関わり、それぞれ

---

(19) 王瑩（1913-1974）：女優、脚本家、作家。1920年代末、左翼運動に熱中し、1930年に中国共産党に入党。その後、何度も検挙され、1934年に日本へ留学に来たが、翌年帰国している。李煒は、王瑩は来日した後秋田雨雀、村山知義らと日中の新劇運動について交流しており、秋田の紹介で長谷川時雨と知り合ったと推測している。（同注10、李前掲書、pp.119-120。）

(20) 王瑩「小さいお友達に：文化学院参観の後で 」、『輝ク』、1934.7、pp.66-67。

(21) 西村アヤ、戸川エマ 「美しいお友達に：王瑩さんにお会いして」、『輝ク』、1934.8、p.69。

(22) 筆者は西村アヤと戸川エマが残った資料を調べてきたが、この時期の時局に関する二人の発言や回想などの記録が見つからず、残念ながら現時点では断言できない。

(23) 謝冰瑩（1906-2000）：作家、1928年に「従軍日記」で文壇にデビューし、世の脚光を浴びた。1931年に初めて留学のために来日し、東京左連に参加している。「満洲事変」の後、反対運動に参加したため強制帰国させられた。『輝ク』に寄稿したのは、ちょうど彼女の二度目の日本留学期間中である。1936年に「満洲国」皇帝の来日を歓迎しない理由で逮捕され、釈放された後も特高に狙われ続けていた（共産党と深い関係のある容疑者であるため）が、日本人の友人の助けで帰国した。

(24) 若林つや「従軍日記の作者」、『輝ク』、1935.1、p.92。

(25) 謝冰瑩「「輝ク」に寄す」、『輝ク』、1935.1、p.92。

(26) 趙暉「謝氷瑩と中国文学研究会 ── 竹内好、武田泰淳との交誼を中心に ──」、『人文学報』第352号、東京都立大学人文学部、2004.3、p.30。

知名度の高い左翼女性芸術家と左翼女性作家として知られている人物である。『輝ク』の前身である『女人芸術』は極左の雑誌として認定され、発禁処分を受けた経験があった(27)にもかかわらず、前期の『輝ク』における中国女性からの寄稿は依然として左翼的な性格だったといえよう。周知のように、1933年2月の小林多喜二の虐殺をきっかけに、その後の日本の左翼文化運動は挫折し、低迷の時期に入った。その意味で前期の『輝ク』はラディカルであり、当時においては異色の存在であっただろう。

2.2 中国へ行った日本女性の発信　── 望月百合子と神近市子の訪中体験談を中心に

来日した中国人女性の寄稿が載せられる一方で、中国へ訪問した日本人インテリ女性の訪中体験を語る記事もある。たとえば、望月百合子は当時北京大学の教授であったジャック·ルクリュの病気見舞いのために、1936年2月に北京を訪問(28)し、約二ヶ月滞在した。そこでの見聞を『輝ク』に寄稿したのである。

彼女は、「春も秋もなく」寒い冬が終わったら、すぐ「暑い夏がやってくる」北京の気候や、住民が「ブルジョアと最下層民」に分けられ中産階級が「極く少ししかない」という階級的な特徴を見出し、中国に対する第一の印象を「両極端を持っている国柄」としている(29)。中国の女性について、望月は最下層の女性の苦しい生活に同情を示すだけでなく、とりわけ中産階級以上の女性に感心と羨望の眼差しを向けている。たとえば、インテリ層が集まる文学サロンで、彼女は中国人の女流文学者の真面目な態度を見て、「ヨーロッパでも余り見なかった程の立派さ」であると評価している(30)。ここからは、望月のヨーロッパを基準にして評価するまなざしが見られるものの、彼女が中国の女性文学者の真面さに感心していることは想像に難くない。また、生活面において、彼女は日本の女性より中国人女性の方が幸福であると認識している。

> 夫が幾人も妾を持つ習慣以外には、支那の女は日本の女より幸福だ。第一夫が妻を大切にする事はそのオリヂンがどこから来たかは知らないが驚く。(中略)モダン支那夫婦離婚訴訟は妻の勝で、(中略)日本人である私は驚きと共に羨ましさを感じた。/又支那の娘は男の子と同じ相続の権利を与えられている。(中略)現在はどの大学にも必ず女の学生が多数いる。/主席は例外なく男学生だが女学生は一般に普通程度の男学生より好成績を得ている。/支那の婦人の生活は日本の婦人の生活以上に不幸なもので

(27) 内務省警保局の『昭和六年中に於ける出版警察概観』(1931、p.212)によると、1931年10月号の『女人芸術』は「全般極左筆致」という理由で最左翼的な文芸誌として認定され、発禁された。そのほか、左傾化した後の3巻9号(1930.9)と3巻10号(1930.10)を含め、『女人芸術』は合計3回の発禁処分を受けている。

(28) 岡田孝子「望月百合子略年譜·著作目録」、『限りない自由を生きて ── 望月百合子集』、ドメス出版、1988、p.207。

(29) 望月百合子「北平第一信」、『輝ク』、1936.3、p.145。

(30) 同上。

はなく反って幸福な点が多いのではないかと思う。[31]

中国へ行く前には、望月は「支那の女の生活程呪われた哀れなものはない」[32]と思っていたが、実際に行って見ると、夫が妻を大切にすることや離婚訴訟における妻の勝訴に、彼女は驚くとともに羨望の眼差しを注いだという。また、彼女は日本ではまだ実現されていなかった女性の相続権や大学における男女共学という環境を中国で発見し、生活と高等教育における中国女性地位の高さを認めている。「支那の婦人の生活は日本の婦人の生活以上に不幸なものではなく反って幸福な点が多いのではないか」というように、女権の獲得、実際の生活における地位の高さという一部の中国女性の状況は、望月百合子にとって意外なことであった。

また、婦人運動家の立場から、神近市子は世界の女性と連帯する必要性を強調し、中国インテリ女性と交流した自分の経験を語った。彼女は、中国人女性がすでに参政権を獲得したことに、次のような感想を示した。

> 最近、私は中華民国の婦人達の集まりに招かれて、日本の婦人問題について語ったことがあった。若い人達が多かったが、この人々が自分達の国では我々が持たない参政権を持っているのだと考えていると、私は変な気持ちがして来た。そして私共は自分達のこの無自由を除去するために一体何程のことをしたかと考えた時、先輩顔して何の婦人問題ぞや？という無気力な反省に落ちて行くのをどうすることも出来なかった。/私共が自分達の正しい地位につくことは、文明国としての見栄えや体裁ばかりではない。それは世界の我々の同性に対する一つの友情であり、又義務でもある ── これが、その時の私の反省から生まれた話であった。[33]

当時の日本より国力が低かった中国の女性が既に参政権を持っていたことに対し、神近市子は「先輩顔」をしている日本人女性として違和感を覚えたのではないか。望月百合子の中国女性への羨望の眼差しが、神近市子の語りには見られなかった。彼女は「無気力な反省」に落ち、日本人女性の婦人運動の行く方向性は世界の女性に対する友情と義務であると主張している。だが、神近市子の反省には一つの前提がある。それは、日本を「文明国」として、日本人女性を「先輩」として位置付けていることである。つまり、中国の婦人運動の現実は彼女が予想したことがひっくり返る形で現れており、それは中国の女性より上位の立場である「先輩」としての彼女にとって、意外なことであった。それゆえ、彼女は変な気持ちになったのだと考えられる。とはいえ、この時期の神近市子が、中国女性を含む世界女性と連帯するインターナショナリズムの姿勢を示しているのは明らかである。

---

(31) 望月百合子「北平第二信」、『輝ク』、1936.4、p.149。

(32) 同上。

(33) 神近市子「岸と底地」、『輝ク』、第4年12号、1936.12、p.181。

以上、来日した中国女性の寄稿と中国へ行った日本女性の体験談を語る記事を分析することで、前期の『輝ク』と中国の接点について、次の三点が明らかになった。まず、雑誌の性格として、左翼系の中国女性文化人との関わりが深く、女性の解放を目指す連帯感が高まっていることが指摘できる。それは、『女人芸術』時代の約束である「全女性進歩発達を願う」[34]方針に沿うものであり、とくに外国人女性と交流の場を作っているという点で、『女人芸術』の時期よりもさらに国際的であるといえる。また、会員たちの発言からすると、中国への好奇心が強く、中国の婦人運動や生活状況に感心する人も少なくない。そこには時に羨望の眼差しが注がれ、またそれを日本の状況を見直すきっかけとして自己反省と自己の再認識をしていくこともある。この点も、「満洲」事変以前の『女人芸術』の姿勢と一致している[35]。もう一つ注目すべきなのは、中国婦人運動の先鋭性や公と私の領域で日本女性より高い地位を獲得した一部の中国女性の現状は、彼女たちの想像の域を遥かに超えていたことである。「文明国」の女性文化人が「後進国」に当たり前のように抱いていた想像が転覆され、彼女たちはそれに驚かされることすらあったのである。

三、後期の『輝ク』と日中女性の親善と提携 ── 輝ク部隊親善部の仕事を中心に

日中全面戦争の開戦を契機に、『輝ク』は他の女性雑誌と同様に国策に適う方向へと変貌していった[36]。1937年8月に国民精神総動員実施要綱が決定されて間もなく、主宰者の長谷川時雨は、9月号の『輝ク』を「前線の兵隊慰問号とする」決定を示し、会員の協力を広く求めたという[37]。この号から、『輝ク』は銃後の女性文化人の拠点として変質し始め、その後は、現地に駐在する日本人女性や従軍女性などの寄稿文が増加していった。また、1939年1月に、従来の「輝ク会」は「輝ク部隊」へと再編成され、「知性婦人層の国策への参加」を目的とする知識層女性集合の組織となる[38]。国策に適応していったことは間違いないが、この時期の長谷川時雨は国が「女性の力を認め」、協力を求め始める時勢を鑑み、東亜建設という国策に乗り、女性知識人の個々の活躍を期待するために輝ク会から輝ク部隊へと再編したという個人の狙いもあった[39]。輝ク部隊の組織は、理事、評議員会、実行委員会などからなっており、実行委員会はさらに総務部、厚生部、親善部、研究部、出版部と分けられている。創立当初の親善部の仕事は日満支その他各国婦人との親善融和を図ることであり、1939年6月

(34) 長谷川時雨「一九三五年を迎えるにさいして」、『輝ク』、1934.12、p.85。

(35) 『女人芸術』における日本女性文化人たちの中国への眼差しについて、拙稿「『女人芸術』における中国表象 ── 越境する女性たちの記録を手掛かりにして」(『跨境:日本語文学研究』第8号、2019.6、pp.129-149)を参照されたい。

(36) 戦時下の女性雑誌の全体の発行環境について、三鬼浩子「戦時下の女性雑誌 ── 一九三七～四三年の出版状況と団体機関誌を中心に」(近代女性文化史研究会『戦争と女性雑誌 ― 1931年～1945年―』、ドメス出版、2001、pp.14-43)を参照されたい。

(37) 長谷川時雨「兵隊さんに送りたい」『輝ク』、1937.9、p.217。

(38) 時雨「輝ク部隊のこと」、『輝ク』、1939.2、p.277。

(39) 長谷川時雨「女性知識人に求める活動 ──輝く部隊について ──」、『新女苑』3-3、1939.3、pp.222-225。

の会員募集要項には、「各国の婦人との親善芸術文化の交換」を行うことも追加された[40]。後述するように、親善部における日中女性との親善融和は、中国女性との交歓、留学生を囲む会の開催、中国女性向けのプロパガンダである。

3.1 現地の中国人女性との交歓 ── 中国へ渡った女性たちの記録

日中全面戦争が勃発してまもなく、多くの女性文化人が中国へ渡っていった。『輝ク』で発信していた女性たちは概ね、従軍する女性、旅行する女性、現地に駐在する女性、公務員として中国で仕事をしている女性というように四種類に分けられる。しかし、私的に中国女性と交流していた人は少なく、政府や軍部の指示で中国人女性と交流していたのが主なパターンである。

たとえば、黒田米子は渡支慰問班の一員として兵士を慰問するかたわら、漢口、南京、上海など、占領区現地の日華婦人交歓会で、職業婦人を中心とした上流中国人女性と交流した[41]。漢口で、彼女は中国人女性たちの真面目さを意識し、彼女たちの良書に恵まれたいという希望に協力する約束をしており、日本人女性に真似のできない上流中国人女性の進取性と社交性を感じている。

> 内容は兎も角、教育にも社会の待遇にも、男女同権を実行している支那婦人には、我が国の婦人に真似の出来ぬ進取性社交性があり、勝ち気がある。それを認め？(ママ)今後の親善も建設も行われねばならぬと思う。国民は国民と結ぶべし、一人が一人のよき友をもつこと、結局はそれが解決の道ではあるまいか。[42]

ここから、黒田米子が認識する東亜建設における文化日本の婦人の指導者としての立場がわかる。彼女の語りにおいて、男女同権の背景に育てられてきた上流中国人女性の進取性と社交性を認めることは、今後の親善と建設に必要な方策であると認識されているのである。「一人が一人のよき友をもつこと、結局はそれが解決の道ではあるまいか」というように、日中女性の個人間の友好つまり親善が悪化した日中関係を解決する方法だと考えているのだろう。また、彼女は上海で日本婦人宣撫班の山岸多嘉子が中国人女性に敬愛される様子を目の当たりに見て、「どんなに嬉しかったでしょう」[43]とその心情を吐露している。それは、戦時下に中国大陸へと渡った数多くの日本のインテリ婦人たちの、さまざまなお茶会で中国の有名人や上流婦人と付き合う姿の例として捉えられる。

しかし、彼女たちのこのような社交的なやり方について、ジャーナリストである戸叶里

(40) 「輝ク部隊 会員募集」、『輝ク』、1939.6、p.296。

(41) 例えば、黒田が漢口で面会した中国人女性は女子青年会の会長である石女史をはじめとした、教育事業に関わる十六人の女性教師たちであった（長谷川時雨、長谷川春子、大田洋子、田村房、黒田米子、山岸多嘉子「座談会：新生支那を語る　輝く部隊報告」、『新女苑』4-9、1940.9、p.229）。

(42) 黒田米子「中支慰問行」、『輝ク』、1940.7、p.347。

(43) 耀ク部隊「渡支慰問報告 ── その二」、『輝ク』、1940.7、p.346。

子は厳しく批判している。戸叶は、『輝ク』で日中の親善における女性知識人のやるべきことは中国人に対して「軽跳なお世辞を云う媚態的な親善風景になく、自分自身をしっかりした見識ある婦人として磨きあげ」、中国の知識階級の人達から「尊敬されるような女性となるように努力」すべきだと指摘している(44)。

3.2 来日した中国人女性との付き合い ── 内地の女性たちと留学生を囲む会

また、中国へ行かなかった女性たちは国内における報道や映画などを通して中国や中国の女性についての状況を得て彼女らを評価している。例えば、若林つやは映画『大地』を見て、日本人と比した中国人の肉体的な優越性を認め、「肉体的に西欧に匹敵する」のは中国人ばかりであり、映画で表象される忍耐強く折れない中国人女性の品格は期待される理想的な東洋の女性であると評価している(45)。映画『大地』はパール ·バック原作の同名小説に基づき1937年に制作されたアメリカの映画である。若林が中国人の肉体における優越性を認めるのは、こうした西洋人の視点からの影響であり、また実際に来日した中国人女子学生と接した時の体験によるものである(46)。一方で、彼女は来日した中国人女学生に対して明らかに軽蔑的な態度を示している。崇貞学寮に住んでいる中国人女学生たちの日本式の教育に対する抵抗や社会秩序を守らないことなどについて、彼女は次のように評価しているのである。

> 私はこのことをきいて、最早どうにもならない血液の古さということを思った。/日本の少女たちは社会の秩序ということを考えるであろう。規則についての批判はするかもしれないが ── 永い間の圧政に対する忍従と歴史に対する果てのない諦観、これ等が人を極度の不健康な個人主義としたのではあるまいか。/私は崇貞学寮の女学生たちの他に二三中国の若い女性たちを知っているが、その人たちに会っていていつも感じることは血液の古さということである。(中略)異国の女性ということを全く忘れてしまうほど立居、振る舞みな日本風なこの人たちと話していてふと血液の古さの片鱗をみるとき、清水氏の仕事の困難さを思い、寮母の先生の苦労のほどを思い、帰国後の条件などは、少しもないそうであるが、いずれ崇貞学園を助けることにもなろうし、新しい人間形態の建設のためのよき働き手となることを期待している。(47)

中国人女学生のよくない行儀を聞き、若林つやは「血液の古さ」という軽蔑的な態度を隠さずに示している。その「血液の古さ」というのは、社会的秩序と規則を守らない、「極度の

(44) 戸叶里子「日支親善」、『輝ク』、1940.10、pp.358-359。

(45) 若林つや「次代への警告 ── 映画「大地」をみて ──」、『輝ク』、1937.12、p.230。

(46) 中国人の体格について、若林は「カイザーリング伯がアジアで欧洲人と比肩し得る肉体を持っているのは支那人だけだと言っているが、崇貞学寮の少女たちも実に立派な肉体を持ち、高貴な美しい顔をしている」と述べている(「崇貞学寮のお友達へ」、『輝ク』、1938.6、p.246)。

(47) 同上

不健康な個人主義」のことであろう。つまり、彼女の認識において、中国人のいわゆる「不健康な個人主義」はその血液に流れている古い習慣であり、日本式の女性教育にそぐわない非文明的なものを意味しているのであろう。それゆえ、外形が日本風な中国人女学生たちと話していても、その中身の「血液の古さの片鱗」を感じており、日本人教育者の苦労と困難に思いをいたしたのである。ただし、ここで注意しておきたいのは、若林は「血液の古」い彼女たちが「新しい人間形態の建設のため」の良い働き手となることを期待していることである。彼女の考えにある「新しい人間形態の建設」というのは、日本式の教育で中国の若い女性を「文明的」に改造することを意味しているのではないか。それを達成するために、まず来日した留学生たちを教育し、将来、次世代の育成を期待できる人材に育つことを期待しているのだろう。

若林がそのような期待をするのは、彼女の認識において、日本と中国を包括する東洋は西欧に対抗する存在であるためであろう。前述したように、彼女は中国人が肉体的に欧米と匹敵することを認めており、中国人女性留学生についても、「立派な肉体を持ち、高貴な美しい顔をしている」と評価している(48)。つまり、彼女の中には、中国人女性は良質な肉体を持っているが、中身は古く、非文明的な血液が流れているという肯定的な評価と否定的な評価が同時に存在しているのである。東洋というカテゴリーに包括される日本と中国の人種について、西洋人に肉体的に匹敵するのは中国人であり、精神(文明)的に匹敵するのは日本人であるというように彼女は考えていたのだろう。中国人の「血液の古さ」に閉口しながらも、日本式の教育を通して中国からの女学生を「文明的」に改造し将来の「新しい人間形態の建設」を期待することで、東洋の女性として欧米に対抗できるようになると考えているわけである。その認識は、前述した文化指導的な日本婦人の立場と変わらないものであり、新東亜建設という侵略の論理が通底している。

輝ク部隊の成立後、若林つやは親善部の仕事に携わり、来日した外国人女性との親善に力を入れている。その初期には各国の女子留学生を招待した報告があったが(49)、その後は「満洲国」と中国からの留学生を輝ク部隊に入隊させ、「日、満、支」を中心とした女性懇談会を行っていたという(50)。『輝ク』には、「満洲国」や中国の女学生からの寄稿が載せられており、戦時下の良妻賢母と女性の国に対する責任を論じた記事(51)や、輝ク部隊に平和を感じ、中日の女性の間の親善と友誼に賛嘆して祖国の建設に努力しようという意志を示す中国人女子留学生の発言も散見する(52)。それは、日本式の教育を受けた彼女たちが、親善の意志を持つ女性文化人たちの影響を受けている証だろう。また、こうした女子留学生たちは、後ほど輝ク部隊の女性インテリたちが中国女性へ発信する際の仲介者(翻訳者)となった。このよ

(48) 同注(46)。

(49) 1940年2月の国際親善部の報告によると、カナダ、アメリカ、イタリア、タイ、中華民国、「満洲国」などの国からの女学生を招待し、懇談した(若林つや「留学女学生交驩会――国際親善部報告――」、『輝ク』、1940.2、p.328)。

(50) 若林つや「国際親善部報告」、『輝ク』、1940.4、p.336。

(51) 律影潭「輝く部隊と東亜の女性」、『輝ク』、1940.4、p.336。

(52) 徐竹芳「輝く部隊に参加して」、『輝ク』、1940.4、p.336。

うに、留学生を囲む会は親日の若い中国女性を集め、文化指導的な日本婦人を補佐する人材を育てる場として機能していたことは明らかである。

上記のような若林の姿勢と違い、金原寛子は中国人女性と謙虚に付き合っていた。彼女は中国からの女子留学生との親睦会の感想を次のように述べている。

> 皆若い。そして質素で張りきった姿が気持ちよかった。然しアメリカの学生とは違って無口でとても遠慮深い。(中略)こんな所に支那の人との親善はアメリカ人との様にぱっと直ぐ出来ない代わり、真心に触れさえすれば必ず出来るという確信が得られた。/同じ血に繋がれていると思うと、どうしたってこの学生達を捨てゝ置く事は出来ない。親善は卑屈であっても傲慢であっても出来るものではない。/痛感した事は我々も支那語を学ばなければならないということ。どんなに上手に彼等が日本語を話せたとしても、それは日本人の真心としてすべきではないでしょうか。(53)

金原寛子は中国人との親善について、アメリカ人とのように「ぱっと直ぐ出来ない」ことを意識し、真心に触れる必要があると述べており、中国人女性に学び、中国人と付き合う際には、卑屈でもなく、傲慢でもなく平等に付き合おうとする。その理由は「同じ血に繋がれている」ことに帰着しており、「血液の古さ」を強調する若林の上からの眼差しとは対照的である。特に、日本人の真心として中国語を学ばなければならないという彼女の考えは、戦時下の日本占領区や「満洲国」などにおいて国策に乗り日本語教育事業に携わる女性文化人たちの姿と逆様な形で示されている。金原の発言は、日本の中国に対する侵略という時局を超えることはできないにせよ、彼女なりに理解した親善の意味合いを示している。それは国策に乗ったものとは言い難いだろう。中国を踏みつけにせず、中国語を学ぶことを意識し、中国からの女子留学生と真心を込め平等に付き合おうという彼女の姿勢は、戦時下における女性インテリの発言の中ではごく稀な例である。

3.3 中国女性向けのプロパガンダ――捻じ曲がった善意と戦時下の母性主義の絡み合い

最後に、主宰者である長谷川時雨をはじめとする女性インテリたちの中国人女性向けのプロパガンダを分析する。1939年6月の「無形の『愛の殿堂』」という長谷川時雨の文章は中国国内で放送された。すこし長くなるが、引用する。

> どうかこの後は、兄弟の国として、緊密に手をつないで、東洋の平和と繁栄を祈り、どこまでも仲よく暮したいものと思います。/人類のせめぎあう痛みは、母体である母の――子を生むところの女性でなければ、ほとんどの痛みは感じません。それを思うとき、永遠の平和を祈る女性たちは、手をつないで平和工作に力を尽くしあわねばならぬと思います。/人類が生きる目的は、良く生きること、楽しい生活をすることですか

(53) 金原寛子「親善部主催　中国留学女学生との親睦」、『輝ク』、1940.10、p.359。

ら、母である女性はその目的を目ざして、どうか、お互いが仲よく暮してゆけるようにしたいものです。それには、共に善く知ることが、最も今日の急務と思います。これはお互いに他人事とすましていられない、生きとし生けるものとしての母性の要求、女性の尽くさなければならない任務であります。/あたくしの若い友達はおなじ思いの熱意に燃えて、あなたがたと、すこしでも仲よくなろう、打解けて語りあおうと、北支へ、満洲へと行っています。彼女たちの便りは東洋人の血はおなじである、すこしも他人とは思われない。/(中略)興亜の大精神を発揮することこそ、今世紀に恵まれた、アジア民族大発展の培いを、日支両国婦人の提携で、なしとげるのではなかろうかと思います。さあ、手をつなぎましょう、仲よく。人類の母体である女性たちは、一刻もはやく仲よく手をつなぎましょう。(54)

この文章の中で、長谷川は日中女性間の母としての共通経験や東洋人としての血族関係を強調しつつ、相互理解の重要性を示し、日中女性の間の提携を通して両国の永遠の平和を祈っている。その語りにおいて、「平和工作」は女性のジェンダー役割として位置付けられ、また、「母性の要求、女性の尽くさなければならない任務」であると強調されている。さらに、そのような考えは来日した中国の女子留学生に対しても同じである。彼女は留学生をその姉妹や母の代わりに、慰めてあげたいという気持ちを示し、「輝華会」のような個人間の和睦は「両国の親善の礎石である」と信じているという(55)。つまり、長谷川の中国人女性向けた語りにおいては、東洋人という血族的な繋がりと母性を通しての女性の提携が見られ、それを通じた平和工作領域における女性の活躍が期待されているのである。

若桑みどりは戦争とジェンダーの関係を次のように論じている。戦争は男らしいもの、活動的、能動的なものであり、それに対して、平和は女性らしいもの、非活動的、受動的なものである。この枠組みの中で、男性は兵士として前線へ赴き、女性は母、劣等労働者、チアリーダーとして銃後の役割を果たしている(56)。母性と平和の関係性を強調する長谷川の語りは、女性のジェンダー役割に対する国家の期待を超えていない/超えられない。とはいえ、女性らしい、しかも「母性の要求」である平和という認識は、「北支へ、満洲へと行ってい」るインテリ女性たちが実践しているように、従来の国家の論理における非活動的な「平和」を日中女性の「提携」という語りを通して、受動的ではなく、女性が国際社会へ進出するような能動的なものに書き換える。日中全面戦争開戦の前後、林芙美子は日本の軍部の政策に先立ち、女性ジェンダー化された日中親善と平和を語り、インテリ女性の国際社会への進出を主張していた(57)。愛国心に支えられたナショナリズムが根底である林芙美子の語り

(54) 長谷川時雨「無形の「愛の殿堂」」、『輝ク』、1939.6、p.294。

(55) 長谷川時雨「輝華会」、『輝ク』、1940.10、pp.358-359。

(56) 若桑みどり『戦争がつくる女性像』(ちくま学芸文庫)、筑摩書房、2000(初版:1995)、pp.13-128。

(57) 詳細は拙稿「林芙美子的文化侵略思想批判 —— 以1936年的北平之旅為線索」(『日語学習与研究』、2022年第1期 総218号、2022.2、pp.110-118)を参照されたい。

とは異なり、長谷川時雨の語りの根底には、国境を超えて全女性をつなぐインターナショナル・フェミニズム思想があると思われるが、軍部の文化婦人への要求に応答する際に、インターナショナリズムでも、ナショナリズムでもない東亜建設という枠に陥り、戦争に加担していくのである。これは、長谷川だけでなく、「母であり、女性である心の労わりあい」をもって、中国の女性と深く結ばれたいとする黒田米子の発言(58)や、「ロマンチストであるべき若い」日中女性の提携を求める平塚らいてうの発信(59)、「東洋人同志のきずな」を重要視する徳沢献子の文章(60)においても見られる。彼女たちの立場は長谷川と全く同じというわけではないが、白人を相対化し、新東亜建設の枠の中で、日中女性の提携を唱えているという点では同様である。それは、全女性のためという『女人芸術』と『輝ク』創刊当初の方針からずいぶん離れたものになってしまっているのである。

このように、戦時下の東亜建設という論理に侵食されてしまうインテリ女性たちの語りでは、東洋という地理的な枠組みに基づく血族と女性というジェンダーの枠組みに基づく母性が日中女性の親善と提携の重要な繋がりとして位置づけられ、それを通じた日中両国の平和が期待されている。同じ血であることによる心を込めた親善と提携の必要性と母性に基づく平和の重要性が、『輝ク』を拠点とした女性インテリの望みとなり、戦時下における国境を越えた女性「連帯」の希望の新たな形となった。だが、このような「連帯」は、日本へ留学に来た女子留学生や、占領区における親日派の女性たちなど、一部のブルジョア階層の中国人女性にしか伝わっていなかったはずである。中国における全国的な抗日女性たちの姿や声は彼女たちに届いていなかっただろう。従来のインターナショナル・フェミニズムは東亜建設という名目でインターナショナリズムとナショナリズムの中間地帯に滑り落ち、戦争に加担する形で帝国のフェミニズムへ(61)と変質し、彼女たちの善意もねじ曲がってしまっているとも言えよう。

おわりに

以上、本稿は『輝ク』の前身である『女人芸術』と比較しながら、『輝ク』における日中女性の連帯とその変節の過程を明らかにした。まず、『輝ク』に見られる女性文化人たちの中国人女性に対する真摯な善意という意識には連続性が認められ、多様性と幅を持ちながら、1940年前後まで持続していたといえよう。

その特徴として、前期は『女人芸術』と同じように左翼的な性格が強く、インターナショナリズムの雰囲気が濃厚であることが挙げられる。後期になると、最初は現地に駐在する

(58) 黒田米子、余淑訳「中国女性に贈る詞」、『輝ク』、1941.5、p.387。

(59) 平塚らいてう、余淑訳「中国の若き女性へ」、『輝ク』、1941.2、pp.374-375。

(60) 徳沢献子、王汝欄訳「日本の一女性から中国の女性へ」、『輝ク』、1940.11、pp.362-363。

(61) 帝国のフェミニズム：近代国民国家の発展における植民地主義と帝国主義を内面化し、主観的に女性の権利、ジェンダー平等などを求めるために誠実に生きようとしたが、結果的に加害責任に加担してしまうフェミニズムの有様である。（大越愛子「天皇制イデオロギーと大東亜共栄圏 ―「帝国のフェミニズム」を問う」、岡野幸江ほか編『女たちの戦争責任』、東京堂出版、2004、pp.51-52。）

日本人女性や従軍女性などの寄稿文が増加するが、主観的には中国の女性に対する善意であってもその意識の延長に自分の任務を果たそうとする動向が見られるようになる。また、輝ク部隊の結成に伴い、日中女性の連帯は、日本のインテリ女性たちと中国の占領区におけるブルジョア階層の女性の間の限られた「連帯」となっていく。そこには、東亜建設の侵略論理に侵食されている言説が多かったことは否めない。特に中国人女性向けのプロパガンダでは、同じ血という繋がりと母性が平和と提携の機能を果たすことが期待され、対抗ではなく、融和と包摂の形で戦争に加担する結果となった。

ここで、『輝ク』創刊当初に目指された「全女性の連帯」というインターナショナル・フェミニズムの夢は、実現する条件が失われ夢のままになってしまっただけでなく、血族と母性の「連帯」に限定されることで侵略の論理との親和性を抱え込むことになり、帝国のフェミニズムへと変質してしまったのであると指摘したい。彼女たちは、意識的に、あるいは無意識のうちに、親善や提携などを唱えながら東亜建設という陥穽に陥ってしまった。そこには、戦争を利用する一部のフェミニストたちの思想動向と中国女性をリードしようとする姿勢が見られる。それは中国人女性に対する非対称的な関係であり、中国人女性の多くには理解されない、捻じれた形の戦争協力になってしまった。そこには、親善、提携と平和という手段の危うさが存在していた。その危うさは、平和な時代である現在においても警戒すべきものであろう。なお、戦時下という極端な環境においても、金原寛子のような、真心を込め中国人女性と平等に付き合おうとするインテリ女性がいたことは、たとえ彼女が無名な人物であったとしても、日中文化交流史においては忘れられるべきではないだろう。

楊 佳嘉（よう かか、YANG Jiajia）
中国厦門大学外文学院助理教授

付記

本稿は中国中央高校基本科研業務費（課題番号：20720231002）の助成による研究成果の一部であり（This article is supported by the China's Fundamental Research Funds for the Central Universities.）、中国女性史研究会2023年11月例会での口頭発表に基づくものである。当日の例会で貴重な意見を賜った方々に感謝申し上げる。本論文における『耀ク』の本文の引用は、『輝ク』（第一巻、復刻版、不二出版、1988）による。本文を引用する際に、旧体字、旧仮名を適宜現行のものに改め、傍点、ルビを省略した。なお、戦前の文献を引用する際の表記も同様の基準を用いた。引用内の「/」は改行を、「（中略）」は中略を意味している。下線は筆者によるものであり、テクスト分析の重要な点を強調するために施した。また、本論文における「満洲」、「満洲国」などは歴史用語として用いるものである。

参考文献

日本語

飯田祐子「「女人芸術」と外部」、『女性と闘争――雑誌「女人芸術」と一九三〇年前後の文化生産』(飯田祐子、中谷いずみ、笹尾佳代編)、青弓社、2019年。

岡田孝子「望月百合子略年譜・著作目録」、『限りない自由を生きて――望月百合子集』、ドメス出版、1988年。

岡野幸江、北田幸恵、長谷川啓、渡邊澄子編『女たちの戦争責任』、東京堂出版、2004年。

尾形明子『「輝ク」の時代――長谷川時雨とその周辺』、ドメス出版、1993年。

尾形明子「田村俊子と『輝ク』」、『俊子新論:今という時代の田村俊子』(渡邊澄子編集、[国文学解釈と鑑賞]別冊)、至文堂、2005年7月。

輝く会編『輝ク』(第1巻)復刻版、不二出版、1988年。

近代女性文化史研究会『戦争と女性雑誌―1931年～1945年―』、ドメス出版、2001年。

長谷川時雨、長谷川春子、大田洋子、田村房、黒田米子、山岸多嘉子「座談会:新生支那を語る　輝く部隊報告」、『新女苑』4巻9号、1940年9月。

趙暉「謝氷瑩と中国文学研究会――竹内好、武田泰淳との交誼を中心に」、『人文学報』第352号、東京都立大学人文学部、2004年3月。

長谷川時雨「女性知識人に求める活動――輝く部隊について――」、『新女苑』3巻3号、1939年3月。

内務省警保局『昭和六年中に於ける出版警察概観』、1931年。

楊佳嘉「『女人芸術』における中国表象――越境する女性たちの記録を手掛かりにして」、『跨境:日本語文学研究』第8号、2019年6月。

渡邊澄子「戦争下の円地文子――『輝ク』時代を中心に」、『芸術至上主義文芸』第35号、2009年11月。

中国語

李炜『她们的叙事――近现代日本女性作家的战争书写研究』、上海交通大学出版社、2023年。

杨佳嘉「林芙美子的文化侵略思想批判――以1936年的北平之旅为线索」(『日语学习与研究』、2022年第1期 总218号、2022年2月。

英語

Sarah Frederick, Beyond *Nyonin Geijutsu*, beyond Japan: writings by women travellers in *Kagayaku* (1933-1941), Japan Forum 25:3, 2013.7

紀長谷雄「九月尽日惜残菊応製詩序」成立背景に関する再検討

Reconsideration of the Background of Ki no Haseo's "Kugatsujinjitsu zangiku wo oshimu ōsē shijo"

廖栄発

Abstract

This article conducts a reconsideration of the Background of Ki no Haseo's poem preface "Kugatsujinjitsu zangiku wo oshimu ōsē shijo". This Preface was created at a public banquet, which was an honor for Ki no Haseo. However, when composing this preface, he reused expressions from his previous works. Through the analysis in this article, it was revealed that he was not arbitrarily reusing his own expressions, but rather deliberately reusing the poem preface expressions from the seventh year of Gangyō and the first year of Kanpyō. Through such poetic method, at the public banquet of Kugatsujinjitsu in the second year of Engi, without the participants present at the scene noticing, he accomplished his private reminiscence to his poetry mate Sugawara no Michizane, who initiated the banquet of Kugatsujinjitsu. Such bold technique is extremely unique and rare both within Ki no Haseo's works and within the poem prefaces of public banquet in the Heian period.

Keywords

公宴、自作の再利用、私的追想、菅原道真、本朝文粋

Public Banquet, Reuse of own works, Private reminiscences, Sugawara no Michizane, *Honchomōnzui*

はじめに

紀長谷雄は、延喜二年(902)九月二十八日に、宮中の「九月尽日の宴」(1)(九月の末日に秋の終わりを惜しむ宴)に参加して、「九月尽日惜_残菊_応製詩序」という詩序を作った。この詩序は従来、「九月尽日の宴」の関係資料として扱われてきたが、詩序の成立背景にどのような事情があったのかは明らかにされていない。特に紀長谷雄の創作の歩みや平安朝の公宴詩序の成り立ちにおいて、いかなる文学史的位置づけが可能であるか、ほとんど検討されていない。従って本稿では、これらの問題の明確化と再検討を目指すことにしたい。

一、「延喜以後詩序」から見る「九月尽日惜残菊応製詩序」

まず、紀長谷雄の創作史における当該詩序の価値について検討したい。

---

(1) 「九月尽日の宴」は、文字通り九月が尽きる日、つまり九月末日(二十九日もしくは三十日)に行われるはずの宴だが、平安時代の開催例をみれば、当該詩宴の二十八日の例のほか、寛平六年の二十七日開催の例もある。「九月尽日の宴」の成立の経緯や意義などについては、太田郁子「『和漢朗詠集』の「三月尽」「九月尽」」(『言語と文芸』第91号、1981年3月)、北山円正著『平安朝の歳時と文学』(和泉書院、2018年)第一部の第1章「菅原氏と年中行事――寒食・八月十五夜・九月尽――」(初出2002年)と第4章「菅原道真と九月尽日の宴」(初出2003年)、周防朋子「平安朝文学にみられる「九月尽」詩について」(『甲南大学紀要 文学編』第138号、2004年)などを参照されたい。

（1） 延喜以後の創作態度転換の宣言

延喜二年のこの「九月尽日の宴」については、『日本紀略』延喜二年九月二十八日条の記録に「於二御殿一有二九月尽宴一、以三九月尽日惜二残菊一為レ題。左大臣以下陪レ座、奏二糸竹一」とあるように、醍醐天皇も左大臣藤原時平らの重臣も参加した格式高い公宴であることが分かる。まず押さえておきたいのは、長谷雄の当該詩序が、延喜年間以後の公宴での作品であるという事実だ。

そして、長谷雄の延喜年間以後の公宴での作品を考えるには、「延喜以後詩序」(『本朝文粋』巻八・201)[2]という彼の自伝ともいうべき作品を抜きにしては語れない。これは詩序ではなく、「書序」(書物の序文)である。最晩年、長谷雄(845〜912年)は、延喜年間以来「独吟独作」してきた詩作をもとに『延喜以後詩巻』という書物を編み、この序文を書いて編纂の経緯を述べている。序文の中には延喜年間以後の公宴での作詩態度も語られているのである。

序文のおよそ四分の三ほどの内容において、長谷雄は詩人を目指して歩んできた軌跡を回顧している。それを読むと、師匠であり詩友でもあった菅原道真が長谷雄にとっていかに重要な存在であったかがよく分かる。ところが、道真は昌泰四年(901)の正月に大宰府に左遷される(同年七月には「延喜」に改元)。道真の左遷は、長谷雄の眼には詩道そのものの衰退を意味するものと映った。大宰府に流され、特に延喜三年(903)、道真が逝去した後の詩道の衰退ぶりについて、長谷雄は次のように痛嘆している。

> 在朝儒者、寔繁有徒。咸列王何之輩、不習潘謝之流。取捨不同、是非各異。彼豈為愛憎而然乎、誠不知文体之趣也。
> 朝(てう)に在る儒者、寔(まこと)に繁くして徒(ともがら)有り。咸(ことごと)く王何の輩に列なり、潘謝の流を習はず。取捨同じからず、是非各(おの)おの異なり。彼豈(あに)愛憎の為にして然(しか)らんや、誠に文体の趣を知らざるなり。

この段落の意味を解釈すると、次のようになるだろう。

朝廷には、たくさんの儒者はいるが、彼らは中国の王弼(『老子』『周易』の注釈を書いた)や何晏(『論語集解』を編集)のような碩儒に属しており、潘岳や謝霊運のような詩人ではないから、詩を学ぼうともしない。私は彼らと考え方(「取捨」)や価値観(「是非」)を同じくするものではない。彼らは、学問(儒学)を愛し重んじるがゆえに、詩を嫌い軽んじるのか。(いや)彼らは詩という体裁(ジャンル)の趣を知らないだけなのである。

一言でいえば、長谷雄はこの段落において、道真の左遷とそれに続く窮死の後、朝廷には詩友と呼ぶに相応しい人物はもういない、と訴えているのである。こうした状況の下、詩人の立場を堅持する長谷雄は次のような行動をとっている。

---

(2) 本稿の『本朝文粋』の本文および通し番号は、基本的に新日本古典文学大系『本朝文粋』(大曽根章介・金原理・後藤昭雄校注、岩波書店、1992年)に拠る。他本に拠る場合、その都度説明する。

司馬遷有言、「誰為為之、誰令聴之」。故予延喜以後、不好言詩、風月徒抛、煙華如棄。雖関公宴、不敢深思、只避格律之責而已。若夫覩物感生、随時思動、任志所之、不労摛藻、独吟独作、不肯視人。年往月来、徒成巻軸、題曰延喜以後詩巻。後之見者、莫咲不到佳境耳。

司馬遷言へること有り、「誰が為にかせん、誰にか聴かしめん」と。故に予延喜以後、詩を言ふことを好まず、風月徒らに抛て、煙華棄てたるが如し。公宴に関ると雖も、敢て深く思はず、只だ格律の責めを避らくのみ。若し夫れ物を覩て感生り、時に随ひて思ひ動くときんば、志の之く所に任せて、藻を摛ぶることを労せず、独り吟じ独り作し、人に視すことを肯んぜず。年往き月来りて、徒らに巻軸を成せり。題して『延喜以後詩巻』と曰ふ。後の見ん者、佳境に到らざることを咲ふこと莫からまくのみ。

まず、波線の「不労摛藻」について説明したい。従来の『本朝文粋』の校訂本では「不労」と「摛藻」との間に別の文章の本文が間違って混入していた。古写本の身延山久遠寺本『本朝文粋』等の「不労摛藻」という本文が正しいことは、拙稿「長谷雄の「詩言志」の宣言――「延喜以後詩序」を読み直す――」(3)で指摘した通りだ。なお、拙稿では当該段落に注目して、延喜年間以後の作詩態度の転換(「公」の領域よりも「私」の領域を重んずる)および詩風の転換(美文主義から平明なスタイルへ)を長谷雄が宣言していることについても述べたが、ここで改めて彼の延喜年間以後の公宴での創作姿勢の変化について確認しておきたい。

この段落で長谷雄は司馬遷の言葉を引用して、自分が詩を作ってもそれを聞かせ、分かち合える詩友がいないため、延喜年間以後、詩を作る気が失せてしまっていることをはっきりと語っている。そして、傍線部のように、出席が避けられない公宴に参加しても、深く詩思を凝らすことなく詩を作っており、韻律の正しさという最低限のルールを逸脱しなければそれでいいと述べる。つまり長谷雄は、詩友を失った延喜年間以後、公宴での作詩に対しては消極的な態度をとってきたと最晩年に告白しているわけだ。

だが、この告白は果たしてそのまま字句通り受け止められるのか。長谷雄の延喜年間以後の公宴作を改めて検討してみよう。

(2)延喜以後の公宴作

長谷雄の没年は延喜十二年である。詩友道真左遷の昌泰四年(七月に「延喜」に改元)から数えて十二年間、長谷雄は多くの公宴作を作っていたと思われるが、残念ながら伝存しているものは僅少である。

延喜二年の「九月尽日惜_残菊_応製詩序」のほか、長谷雄の延喜年間以後の詩作はわずか四つしか伝存していない。しかも、どの詩も摘句の形で、一首の詩として完全なものではない。以下の通りである。

(3) 『和漢比較文学』第56号、2016年2月

延喜三年作　「残雪伴寒梅」詩句（七言律詩の中間二聯。『類聚句題抄』168所収[4]）
延喜四年作　「花伴玉楼人」詩句（七言律詩の中間二聯。『類聚句題抄』163所収）
延喜十一年作　「霽色明遠空」詩句（七言排律の中間四聯。『類聚句題抄』28所収）
延喜十年または寛平初期作　「春風扇微和」詩句（七言律詩の頷聯か頸聯。『和漢兼作集』春部上所収）

この四つの詩作は、いずれも対句仕立ての部分であり、尾聯のような詩人の思いのたけが比較的に伝わりやすい述懐部分ではないために、これらの詩句だけを通して延喜以後の長谷雄の内面の機微を推察するのは極めて難しい。

よく見れば、「残雪伴寒梅」と「春風扇微和」の対句には、道真らの詩の表現を模倣したり、自作の焼き直しをしたりしている箇所も確かにある[5]。だが、そうした表現の再利用が長谷雄の公宴詩に対する消極的な作詩態度の現れであると結論づけることに、筆者は慎重である。なぜなら、詩は散文と違い、一つの言葉や表現が素晴らしいものと見なされ、特に詩語化されると、繰り返して詠われてゆくという事情があるからである。わずかな詩語の類似表現だけを頼りに、長谷雄の作詩態度を判断しては、早計の誹りを免れないだろう。

なお、『新撰朗詠集』（秋・九月尽・261）[6]に採録されている長谷雄の次の詩句は、延喜二年の九月尽日の公宴の作であろうと推測[7]されている。

那堪漸漸鐘声暮　　那か堪へむ　漸漸に鐘の声暮れぬることを
挑尽寒灯夜半花　　挑げ尽くせる寒灯は　夜半の花

『新撰朗詠集』では、この詩句の詩題表記は「九月尽」となっている。「九月尽日惜二残菊一応製詩序」という詩序名に見られる「惜二残菊一」という詠題に関わる記述がないため、延喜二年の詩作とするには証拠不十分だと思われる。別の「九月尽」の詩宴の作である可能性もあるかもしれない。

詩句の意味について、柳澤良一氏は「秋の最後の日、夕暮れの鐘の音が聞こえ、九月尽の日も次第に終わるのかと思うと、とても堪えられない。今、その芯をかきたて尽くし名残を惜しんでいる寂しげな灯火は、あたかも夜中に咲く残菊の花のようだ」（傍線 筆者）と訳し

(4)　『類聚句題抄』の通し番号は、本間洋一氏の『類聚句題抄全注釈』（和泉書院、2010年）に拠る。

(5)　「残雪伴寒梅」の詩句「紅蕊乍悛鶯失宿／素毛相似鶴同胎」に見られる「紅蕊」と「素毛」という色対は、道真の「早春侍二宴仁寿殿一、同賦二春雪映二早梅一応製」（『菅家文草』巻一・066）の頸聯「鶏舌纔因風力散／鶴毛独向夕陽寒」に見られる「鶏舌」と「鶴毛」という色対に相似している。また、「春風扇微和」の詩句「揺樹漸知花面目／過園偸勧薬君臣」は、『和漢朗詠集』（春・雨）所収の長谷雄詩「仙家春雨」の摘句「養得自為花父母／洗来寧弁薬君臣」に類似している。「仙家春雨」詩の作時は未詳で、どちらが先行する詩句なのかは分からないが、長谷雄が自作を焼き直しているように見受けられよう。

(6)　『新撰朗詠集』の引用及び通し番号は、和歌文学大系本『和漢朗詠集・新撰朗詠集』（佐藤道生・柳澤良一校注、明治書院、2011年）に拠る。

(7)　渡邊秀夫著『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、1991年）第332頁以降「紀長谷雄・略年譜」参照。

ており、灯火を残菊に喩えて解釈している。しかし、この詩句は一聯しか現存しないため、原詩が残菊に関係するものかどうか何とも判断しにくい。むろん、柳澤氏のように残菊にちなんで解釈をするのも一つの案である。だが、江総の「姫人怨」(『芸文類聚』巻三十二、人部十六)という詩の「寒灯作レ花羞二夜短一／霜雁多レ情恒結レ伴」のように、「寒灯」を特定の花と結び付けずに詠じた例を想起するならば、長谷雄の詩句の「寒灯」も、漠然と不特定の花と解釈するにとどめておく方が無難ではないか。その場合、この詩句の主旨は残菊とは関係なくなるが、『新撰朗詠集』の詩題表記である「九月尽」とは一致する。つまり、長谷雄が秋の最後の日の夜半には灯心を繰り返しかきたて明るくして、秋との別れを惜しんでいる、という意味になる。そうなると、「九月尽」というまさしく平安朝独特の惜秋文学の趣旨が鮮明に見えてくるのである。

このように、決定的な証拠が不十分なため、『新撰朗詠集』のこの詩句を延喜二年の公宴作と推定するにはまだ慎重を要すると筆者は考えている。もちろん、たとえそれが延喜二年の公宴作と推定しても、この一聯の詩句の解釈だけから、長谷雄の延喜年間以後の公宴での作詩態度そのものを解き明かすのは無理がある。

要するに、この詩句からも前述の四作の詩句からも、長谷雄の延喜以後の公宴での作詩態度を決定づけることは難しい。わずかに手掛かりとなるのは、この延喜二年の「九月尽日惜二残菊一応製詩序」だけなのである。この意味で、当該詩序は貴重な価値を持っているのである。

次節では、長谷雄の延喜以後の公宴での創作態度を検証しながら、当該詩序の内容の検討を行いたい。

二、「九月尽日惜残菊応製詩序」に見られる自作の再利用

当該詩序は、『本朝文粋』(巻十一・335)に全文が収められている。原文と書き下し文は次の通り。

秋之云暮、余輝易斜、	秋の云(ここ)に暮れぬ、余輝斜めなり易し、
菊之孤芳、残色可惜。	菊の孤芳、残色惜しむべし。
嗟乎、	嗟乎(あゝ)、
潘郎寓直、雖緩愁悩之心、	潘郎の寓直、愁悩の心を緩(ゆる)くすと雖も、
陶令閑居、難堪凋落之思。	陶令の閑居、凋落の思ひに堪へ難し。
況復明王用心、	況んや復た明王 心を用ふれば、
自然合理。	自然(おのづから)理に合(かな)へり。
不出戸、而知一天下之思、	戸を出でずして、一天下の思ひを知り、
不下席、而明四海内之心。	席を下らずして、四海内の心を明らかにす。
故人皆送秋、所以賜送秋之宴、	故に人皆(みな)秋を送り、秋を送る宴を賜ふ所以(ゆゑん)なり、

人皆惜菊、所以降惜菊之恩。　人皆菊を惜み、菊を惜しむ恩を降す所以なり。
豈只天意乎、　豈只だ天の意のみならんや、
抑亦人望也。　抑そも亦た人の望みなり。
臣本陪蓬莱之宮、　臣本は蓬莱の宮に陪し、
今落塵土之境。　今は塵土の境に落ちたり。
古人餌菊花者、白日昇天。　古人の菊花を餌する者は、白日に天に昇る。
請試飡飽、　請ふ 試みに飡ひ飽きて、
将験先言云爾。謹序。　将に先言を験せんと爾云ふ。謹みて序す。

この詩序は、対句(隔句対)を多用する精緻な駢儷文であるが、そこに創作意欲の衰退のようなものを示す表現はあるだろうか。仔細に検証すると、当該詩序には長谷雄が自作の表現を再利用した「焼き直し」とも言える部分が、主に二箇所ある。

(1)元慶七年の九月尽日の宴の自作との類似

一つめは、詩序冒頭の「秋之云暮、余輝易斜、菊之孤芳、残色可惜」という表現で、これは長谷雄自身が元慶七年(883)のある詩宴で作った「九月三十日白菊叢辺命レ飲詩序」の冒頭表現に類似している。詩序の題には「九月三十日」とあるから、当該詩宴も九月尽日の宴だと分かる。この序文も『本朝文粋』(巻十一・334)に収められている。全文は次の通り。

秋之云暮、唯菊独残。飲於叢辺、惜以賦之云爾。
秋の云に暮れぬ、唯だ菊のみ独り残れり。叢の辺に飲み、惜しみて以て之を賦す爾云ふ。

「秋之云暮」(傍線部)という劈頭のほか、九月の尽日に残菊を惜しむという主題も共通している。

見ての通り、短い十八文字だけの序文であり、そのやや特殊な制作事情については、同じく『本朝文粋』所収の菅原道真の同題の詩序(巻十一・333)に付けられた「各加二小序一、不レ過二五十字一」という注記で説明されている。普通、詩宴では詩序が一篇のみ作られる決まりだが、この詩宴では、道真と長谷雄とほかの詩人たちが、詩を作るほかに、各々五十字以内の詩序も作っていたのである。

まず留意しておくべきなのは、元慶七年(883)道真邸で行われたこの九月尽日の詩宴は、延喜二年(902)宮中の御殿で華やかに行われた公宴とは違い、菅家廊下の関係者しか参加していない私宴であったということだ。

道真の詩序は、以下の通り。

仲秋翫月之遊、避家忌以長廃。九月吹花之飲、就公宴而未遑。蓋白菊孤叢、金風半夜。今之三字、近取諸身而已云爾。

仲秋 月を翫ぶ遊び、家の忌を避けて以て長く廃せり。九月 花を吹く飲、公宴に就きて未だ遑(いとま)あらず。蓋(けだ)し白菊の孤叢にして、金風の半夜なり。今の三字、近く身に取りたるのみ爾(しか)云ふ。

菅家廊下の門下生との詩宴を重んじた道真は、この詩序ではおよそ次のようなことを述べている。菅家での詩宴の重要な場の一つである八月十五夜の詩宴が、父是善の忌月にあたるため停廃してしまった。また、重陽節のとき、自分は宮中の公宴に参加し、忙しかったため、自邸で詩宴を開催できなかった。やっと九月三十日の夜、この白菊のほとりで詩宴を開催できるようになった。

さて、道真の序文の最後の「今之三字、近取諸身而已」については、『本朝文粋』の本文だけ読んでも判然としないが、『菅家文草』を参照すれば事情が見えてくる。道真の当該詩序は『菅家文草』(巻二・126)[8]にも収められており、『菅家文草』の本文では、題の下の注記に「同勒二虚余魚一、各加二小序一、不レ過二五十字一」とあり、傍線を付したように作詩の韻字の規定も記されているのである。つまり、この詩宴では詩人たちはみな「虚」「余」「魚」という三つの韻字で詩を作らなければならないということである。現在、道真の詩作は『菅家文草』に伝存しているが、長谷雄の詩作は伝わらない。

この「今之三字、近取諸身而已」の解釈について、川口久雄氏は大系本の補注で「ここは、「虚しく余れる魚」というのは、ほかならぬこの自分の身のことをいうようだというのであろう。易経、繋辞伝に「近取諸身、遠取諸物」とある」と述べているが、筆者は賛同しかねる。

『易経』のこの文言は、中国古代の聖王の伏羲氏が周囲に観察できるもの(近くは自分の身体、遠くは天地日月などの自然万物)を象って八卦を発明したことを言っている。同様に考えると、道真の「今之三字、近取諸身而已」も、身近にあるものに基づいてこの三文字の韻字を決めたという意味になるだろう。

「魚」という韻字は、自邸の庭の池の魚などによって思いついたものと考えられる。しかし、「虚」と「余」を韻字にしたのは、いかなる身近な事情によるのだろうか。それは、道真の実際の詩作を通じて推測するしかない。ついでに道真の詩を通じて、詩宴の様子も窺うことができるから、その本文を掲げてみたい。

白菊生於我室虚　　白菊 我が室の虚(きよ)に生ず
残秋一夕又閑余　　残秋一夕 又た閑余(かんよ)なり
浅深淵酔花鰓下　　浅く深く淵酔す 花の鰓(あぎと)の下
取楽何求在藻魚　　楽しびを取るに 何ぞ藻に魚在ることを求めむや

前半二句は、秋の最後の夜に自邸の白菊のほとりでのんびりと宴を催すことを言っている。

(8) 『菅家文草』『菅家後集』の引用及び通し番号は、日本古典文学大系『菅家文草　菅家後集』(川口久雄校注、岩波書店、1966年)に拠る。以下、「大系本」と略す。

起句では、白菊が我が邸にのどかに咲いていることが説明されている。この部分が『荘子』(人間世篇)の「虚室生レ白」[9]を踏まえていること、この宴を純粋無垢で安心できる場と述べていることについては、波戸岡旭氏[10]が郭象注と成玄英疏を分析して明らかにしている通りだ。

おそらく道真が「虚」を韻字にしたのは、身近にある「白菊」の白さから「虚室生レ白」という典故を想起するという、現代人から見ればやや遠まわしだが、当時の知識人にとってはごく自然な連想に基づいた結果なのだろう。

さらに「余」が韻字に指定されたのは、承句から見れば二つの可能性が考えられよう。一つは、「残秋一夕」とある通り、秋が今宵一夜しか余っていないという事実に基づいた可能性。もう一つは、「閑余」(暇の意)に基づく可能性である。

転句について、大系本は「一句は、白菊の花のもとで、一同は、あるいは深酔いし、あるいは軽く浅くほろ酔いになって、魚があぎとうように、酔っぱらってしまったの意。「鰓」は「淵」の縁語」と注釈している。

結句については、大系本は「飲宴の楽しみを、昔は藻にある魚にたとえをとったが、別に魚に求めずとも、こよい淵酔の人人の姿をみよ」と解釈しているが、波戸岡旭氏[11]は「『詩経』小雅「魚藻」を典故とするが、君臣唱和の詩宴以外にも、このようにうちとけて楽しい自邸の宴もあるぞ、という意である」と解釈し、「在藻魚」が君臣唱和の詩宴を意味するものと捉えているように思われる。いずれにせよ、後半二句においては、「藻にある魚」と「白菊のもとに酔っている人」とを対比することによって、道真は自邸での私宴の楽しさが公宴と比べても遜色ないものだと誇示しているのである。

以上、「秋之云暮」という表現を持つ長谷雄の先行作品がつくられた背景を巡って検討してきた。続けて、もう一つの表現再利用の箇所を見てみたい。

(2)寛平元年晩秋の残菊の宴の自作との類似

前掲の延喜二年「九月尽日惜二残菊一応製詩序」の本文に戻る。筆者が二重傍線を付した箇所、つまり詩序の中間部分の「況復明王用心、自然合理。不出戸而知一天下之思、不下席而明四海内之心」という表現も、長谷雄自身が以前宮廷詩宴で作った詩序の表現を焼き直しているように思われる。

寛平元年(889)九月末頃(明確な日は未詳)、宇多天皇が主催する詩宴で、長谷雄は序者として「惜レ秋翫二残菊一各分二一字一　応製詩序」(『本朝文粋』巻十一・331)という作品を作った。これも残菊にちなんだ詩序である。全文は、以下の通り。

晩秋九月、夜漏三更、聖皇詔於侍臣、令各献詩。即賜題目、惜秋翫残菊。蓋賞時変也。当

(9) 「虚室生レ白」という典故については、『全訳漢辞海(第四版)』(三省堂、2016年)は「からの部屋には、日光がさして明るくなる。心をからにすれば、自然と物事の真実を悟ることができる。〈荘子・人間世〉」と解釈している。

(10) 波戸岡旭「重陽宴詩考」(同氏著『宮廷詩人 菅原道真 ――『菅家文草』・『菅家後集』の世界――』所収、笠間書院、2005年、第84～86頁。初出1992年)。

(11) 前掲波戸岡旭「重陽宴詩考」第86頁参照。

時侍者、皆相語曰、凡情之難堪者、莫過於秋天、感之至切者、莫深於歳暮。況復孤叢之将尽、寒花之纔残、豈止可惜於俗眼之下、亦知被翫於叡襟之中。所謂聖人者、不私其心、以百姓心為心、無常其思、以四海思為思者乎。如然者、何能使群下感秋之意、更過主上送夜之遊。遂以近叢而翫之、挑燭以看之。分膏腴於酔郷、割要害於楽地。臣之不敏、粗以敘之。謹序。

晩秋九月、夜漏三更、聖皇侍臣に詔して、各おの詩を献ぜしむ。即ち題目を賜ひ、「秋を惜しみ残菊を翫ぶ」と。蓋し時の変を賞するなり。当時侍する者、皆な相ひ語りて曰く、「凡そ情の堪へ難きは、秋天より過ぎたるはなく、感の至りて切なるは、歳暮より深きはなし。況んや復た孤叢の将に尽きんとして、寒花の纔かに残れるをや。豈に止だ俗眼の下に惜しむべけんや、亦た叡襟の中に翫ばるるを知る」と。所謂聖人は、其の心を私せず、百姓の心を以て心と為し、其の思ひを常にすることなく、四海の思ひを以て思ひと為す者か。然る如ければ、何ぞ能く群下秋に感ずる意をして、更に主上夜を送る遊びに過ぎしめんや。遂に以て叢に近づきて之れを翫び、燭を挑げて以て之れを看る。膏腴を酔郷に分ち、要害を楽地に割く。臣の不敏なる、粗以て之れを叙す。謹みて序す。

この寛平元年の詩宴の性格についてはすこし説明しておく必要がある。この詩宴は、元慶七年の道真邸での私宴のような性格を持たず、さりとて延喜二年の〈公宴〉のような性格でもない。先行研究によれば、宮廷詩宴は〈公宴〉と〈密宴〉の二種類に分けられ、〈公宴〉は内宴・重陽宴のような、儀式・政事の一環として天皇が詩文に興味を持つか否かを問わず催されるのに対し、〈密宴〉は内宴・重陽宴以外の詩宴のような、天皇の私的興味によって開かれるものである(12)。この寛平元年の詩宴は、まさしく宇多天皇の意志によって開催された〈密宴〉であり、宇多天皇の近臣だけ参加できた詩宴である。

さて、二重傍線を付した箇所のあたりでは、天皇がなぜこのような詩宴を開催するに至ったか、その根拠が述べられている。その「論理」について、藤原克己氏(13)の指摘を引用して説明したい。

天子が四季折々に侍臣に宴を賜うのは、天子が四海万民の心を自らの心としているからなのだ。たとえばゆく秋を惜しむ心は天下万民の切実な心情であり、天子は万民のそういう心を自分の心としているのだ。また侍臣がその宴で天子に詩を献ずるのは、そのような天下万民の四時の情を代弁するものなのだ。そういう論理を展開しています。

要するに、天皇は天下万民の心を汲み取って四季折々に詩宴を開かなければならないと

(12) 滝川幸司著『天皇と文壇』(和泉書院、2007年)の序論に詳しい。

(13) 藤原克己氏は、紀長谷雄の息子である紀淑望(きのよしもち)が執筆した『古今和歌集』の真名序と、長谷雄のこの「惜レ秋翫二残菊一各分二一字一　応製詩序」との関連性について述べながら、この詩宴開催の共通論理を指摘している。詳しくは、藤原克己・小川豊生・浅田徹「《共同討議》古今集序再考」(『文学』第6巻第3号「特集 古今集1100年」第6頁、岩波書店、2005年5・6月号)参照。

いう論理である。この詩宴開催の論理ないしは大義を確認した上で、次には延喜二年の詩序の表現が、いかにこの寛平元年の詩序のそれと類似しているかについて見てゆきたい。両序を並べて、二重傍線を付した箇所の類似度を分かりやすく示すと、次のようになる。

寛平元年の詩序	延喜二年の詩序
所謂聖人者	況復明王用心、自然合理
無常其思、以四海思為思	不出戸、而知一天下之思
不私其心、以百姓心為心	不下席、而明四海内之心

四角で囲んだ「思」「心」「四海」の表現は、延喜二年の詩序にそのまま踏襲されていることが分かる。さらに、波線部の「聖人」は、延喜二年の詩序では「明王」に置き換えられており、天皇を讃美する表現であることに変わりはない。

また、もう一つ波線を付した「百姓」は、延喜二年の詩序では「一天下」と置き換えられてはいるが、いずれも実は同質の内容を指しているようだ。後藤昭雄氏(14)が指摘しているように、長谷雄の寛平元年の詩序の「所謂聖人者、不私其心、以百姓心為心」という表現は、元稹の「才識兼茂明於用体策」の「対(こたえ)」(『元氏長慶集』巻二十八)に見られる「然後、陛下闢二四門一、使二可レ言之路通一。明二四目一、以二天下之目視一。達二四聡一、以二天下之耳聴一。不私二其心一、以二百姓心一為レ心」の措辞をそのまま借用しているからである。元稹の表現に照らし合わせれば、百姓とは即ち天下万民のことであり、「一天下」と「百姓」はその内実を同じくするものであると窺える。

ここに至って、寛平元年の詩序に展開された論理が十三年後の延喜二年の詩序にも流れ込んでいることが確認できた。だが、そうした論理の一貫性を事実として認めつつも、長谷雄のような大文人なら、もっと別の違う表現ができるはずなのに、なぜわざわざこのように類似度の高い表現を再利用しているのか。また、このような再利用、「焼き直し」は、長谷雄が「延喜以後詩序」で告白したような、公宴での作詩に対する消極的な態度によるものと理解してよいのか。

もし単なる創作意欲の衰退を理由とするものならば、長谷雄はなぜ、他ならぬ元慶七年と寛平元年のこの二つの詩序の表現を利用したのかという問題が残る。この問題を仔細に検討してゆくと、延喜二年の九月尽日の公宴において、長谷雄は消極的な作詩態度を取ったというより、むしろ苦心に苦心を重ねて当該詩序を作り上げているのではないかと思われてくる。これについては、次節で述べたい。

三、「九月尽日惜残菊応製詩序」に見られる紀長谷雄の苦心―菅原道真への私的追想―

長谷雄にとっての、道真という存在の重要性は言うまでもない。「延喜以後詩序」に語ら

(14) 後藤昭雄著『本朝文粋抄 五』(勉誠出版、2018)第163～164頁参照。

れているように、長谷雄が延喜年間以後、作詩を好まなくなったのは、詩友道真の不在に起因するものである。まして道真その人が九月尽日の宴の創始者であったことを鑑みれば、その左遷後に開催されたこの延喜二年(902)の九月尽日の〈公宴〉に参加するにあたり、長谷雄の胸の内が穏やかであったとは考えにくい。

先行研究[15]によれば、日本の九月尽日の宴の起源は、まさに道真が主催した元慶七年(883)の私宴にさかのぼる。その成立背景だが、道真が父是善の忌月にあたるため停廃していた菅家廊下の八月十五夜の詩宴に代わる新企画として、九月尽日の詩宴を創出したと北山円正氏は指摘しており、また道真創始のこの私宴が、寛平年間に宇多天皇主催の〈密宴〉になったりして、やがて延喜二年に醍醐天皇が主催する〈公宴〉に格上げされていった経緯も明らかにしている。

そのような事の成り行きを目の当たりにしてきた長谷雄は、感慨深いものを覚えたに違いない。つまり、九月尽日の宴は延喜二年九月二十八日に〈公宴〉として華やかに開催されるようになったが、その創始者の道真は奇しくも前年の昌泰四年正月(七月に「延喜」に改元)に大宰府に流されてしまっていたのである。

因みに、延喜二年九月二十九日、前日に宮中で既に九月尽日の公宴が催されていたのを知るべくもないまま、道真は大宰府の配所で「九月尽」(『菅家後集』512)という詩を詠じた。

今日二年九月尽　　今日 二年の九月 尽きぬ
此身五十八廻秋　　此の身 五十八廻の秋
思量何事中庭立　　何事をか思量する 中庭に立ちたり
黄菊残花白髪頭　　黄菊の残花 白髪の頭

平明で分かりやすい詩である。第三句の「思量何事」について、北山円正氏は「自ら始めた九月尽日の宴が、都でどうなっているかに思いを馳せることも含まれているのではないだろうか。都の様子は知るべくもなかっただろうが、この日の公宴に合わせたかのような詠である。宮廷での華やかな公宴と、大宰府における苦難の中の独詠を比べてみると、晴の場から隔絶された道真の没落が際だって来る」[16]と述べている。翌延喜三年(903)三月、道真は大宰府で逝去し、長谷雄がこの詩友と再び相見えることはなかった。

このように、長谷雄が道真主催の元慶七年の九月尽日の私宴で自ら作った序の冒頭表現(「秋之云暮」)を、そのまま道真不在の延喜二年の公宴で作った詩序にわざわざ流用している事実は、実に興味深い。そこには、師匠であり詩友であった道真を偲ぶだけでなく、九月尽日の宴の創始者としての道真の記憶を喚起するという意味合いも込められているに違いない。

では、寛平元年(889)の詩宴の自作表現の再利用については、どのように捉えるべきだろ

(15) 前掲太田郁子氏論文と北山円正氏論文参照。
(16) 前掲北山円正著『平安朝の歳時と文学』の第19頁参照。

うか。これについては、寛平元年当時の道真の所在から考えてみたい。実はこの時点の道真は讃岐守在任中(886-890年)で、都に不在だったのである。前述のように、寛平元年の詩宴は公事の一環としての〈公宴〉ではなく、宇多天皇の私的興味で催された〈密宴〉である。この〈密宴〉の献詩者は長谷雄を含めれば十六人になり、詩人と宇多天皇の蔵人・近親者と二つのグループに分けられる(17)。その詩人グループには、島田忠臣や大蔵善行などの大文人の名も見られたが、道真だけが不在であった。道真のその後の重用ぶりを鑑みれば、仮にもし寛平元年には道真が讃岐でなく都にいたなら、宇多天皇のこの〈密宴〉に招待されていたことは間違いないだろう。

因みに、道真はこの〈密宴〉には参加できなかったが、翌寛平二年(890)閏九月に宇多天皇が主催した九月尽日の〈密宴〉には参加して「閏九月尽、灯下即事応製」(『菅家文草』巻五・336。詩序は『本朝文粋』〔巻八・227〕の「時節」という分類の詩序にも所収)という詩序および詩を作っている。この時点で、道真は讃岐守の任を終え都に帰っていたのだ。ではなぜ長谷雄は、延喜二年の九月尽日の〈公宴〉で道真を追想するに当たり、寛平二年の九月尽日の〈密宴〉で詩友が残した詩序や詩の表現を用いていないのかと訝る向きもあるかもしれないが、事柄はそれほど単純ではない。

延喜二年といえば、道真左遷のまだ翌年なのである。この時点では、道真もその子たちも流罪者の立場であり、道真の嫡子の高視が赦免され、大学頭に復帰するのは延喜六年を俟たなければならない。それに、延喜二年のこの〈公宴〉には、道真の左遷を企てた張本人の藤原時平も出席している。そのような〈公宴〉において、道真の詩文の表現を用いて道真を追想していると知られたら、権力者の不興を買いかねない。ここに長谷雄が道真の表現ではなく、自作の表現を再利用した理由を求められるのではないか。元慶七年の私宴での自作表現の再利用が、九月尽日の宴の創始者である道真をさり気なく想起する役割を果すものだとすれば、寛平元年の〈密宴〉での自作表現の再利用は、あの時と同様にこの延喜二年の〈公宴〉にも道真不在であると仄めかす役割を果しているものと推測できよう。

このように延喜二年の当該詩序は、一見すると〈公宴〉詩序ではあるが、自作表現を独自のやり方で再利用することによって、詩友道真への私的追想を成し遂げているのである。極めて特殊で類稀な技法と言えよう。このような精緻な技法を有する当該詩序は、長谷雄の創作史のみならず、平安朝の漢文学史にとっても、特に公宴詩序の視点からみた場合、一種独特な存在感を放つものであることは間違いない。

ところで、このような技法で公宴作に私的追想を詠い込んでいた長谷雄の苦心を、誰か読み取った者はいるだろうか。ひとり挙げるなら、少なくとも『本朝文粋』を編纂した平安後期の大文人である藤原明衡(989〜1066年)は、長谷雄の苦心を理解していたのではないだろうかと思われる。

『本朝文粋』巻十一は「草」と関わる一連の詩序が収められている。そのうち、晩秋(九月末頃)に残菊を愛でたり惜しんだりするのを主題とする詩序は、次の通り七首ある。

(17) 前掲滝川幸司著『天皇と文壇』第一編の第二章「宇多・醍醐天皇の文壇」参照。

① 菅原道真「惜残菊応製詩序」（『本朝文粋』巻十一・329）
② 紀長谷雄「賦対残菊待寒月詩序」(同330)
③ 紀長谷雄「惜秋翫残菊応製詩序」(同331)
④ 菅原道真「秋尽日翫菊応令詩序」(同332)
⑤ 菅原道真「九月三十日白菊叢辺命飲詩序」(同333)
⑥ 紀長谷雄「九月三十日白菊叢辺命飲詩序」(同334)
⑦ 紀長谷雄「九月尽日惜残菊応製詩序」(同335)

傍線を付した③⑤⑥⑦の四作は、本稿で取り上げ検討したものである。

③の詩序は、道真不在の寛平元年の〈密宴〉で長谷雄が作ったものである。そして、同じ「秋之云暮」という冒頭を持つ⑥と⑦の詩序がこのように緊密に配置されているのが、実に興味深い。藤原明衡のような大文人なら、『本朝文粋』を編む際に、おそらく道真や長谷雄らの作品を熟読し、その詩友関係に至るまで熟知していたに違いない。

この配列順序のおかげで、⑥の「秋之云暮、唯菊独残。飲二於叢辺一、惜以賦レ之云レ爾」と極めて短い詩序を読んだ直後に、視線を⑦の詩序へ移動すれば、それもまた「秋之云暮」という冒頭で始まっていることに、読者は否応なく気づかされるだろう。仮にこの二つの序が、それぞれ『本朝文粋』の違う巻に配置されていたら、両序の冒頭の類似度に気づくのは困難になるだろう。その意味で、この配列の緊密さは、前述した公宴作に私的追想を詠い込んだ長谷雄の苦心を理解していた藤原明衡が、あえて読者に与えた無言の暗示と理解することができるのではないだろうか。

まとめ

以上、紀長谷雄が延喜二年に作った「九月尽日惜二残菊一応製詩序」の成立背景を巡って再検討を行ってきた。当該詩宴が公宴で、その名誉ある序者を任された長谷雄は、あえて自作の表現を再利用して当該詩序を作っている。本稿の考察を通して、長谷雄が自作の表現を任意に使い回しているのではなく、極めて意図的に元慶七年と寛平元年の詩序表現を再利用していることが分かった。そのような詩的操作によって、九月尽日の宴を創始した詩友道真への私的追想を、延喜二年の公宴で、その場にいる参加者には気づかれないまま堂々と成し遂げている。このような大胆な技法は、長谷雄の創作史はもちろん、平安朝の公宴詩序の歴史においても極めて特殊で類稀な試みと言えよう。

廖栄発（りょう えいはつ、LIAO Rongfa）
中国厦門大学日本語教育研究センター

付記

本稿は、中国福建省社会科学基金青年項目「中国文学対日本平安朝漢詩功用演変的影響研究」(項目批准号:FJ2021C047)による研究成果の一部である。

参考文献

大曽根章介・金原理・後藤昭雄校『本朝文粋』、岩波書店、1992年
太田郁子「『和漢朗詠集』の「三月尽」「九月尽」」、『言語と文芸』第91号、1981年3月
川口久雄校注『菅家文草　菅家後集』、岩波書店、1966年
北山円正著『平安朝の歳時と文学』、和泉書院、2018年
後藤昭雄著『本朝文粋抄 五』、勉誠出版、2018
佐藤道生・柳澤良一校注『和漢朗詠集・新撰朗詠集』(和歌文学大系本)明治書院、2011年
周防朋子「平安朝文学にみられる「九月尽」詩について」、『甲南大学紀要 文学編』第138号、2004年
滝川幸司著『天皇と文壇』、和泉書院、2007年
波戸岡旭著『宮廷詩人 菅原道真 ――『菅家文草』・『菅家後集』の世界――』、笠間書院、2005年
藤原克己・小川豊生・浅田徹「《共同討議》古今集序再考」、『文学』第6巻第3号、「特集 古今集1100年」第6頁、岩波書店、2005年5・6月号
本間洋一著『類聚句題抄全注釈』、和泉書院、2010年
廖栄発「長谷雄の「詩言志」の宣言 ――「延喜以後詩序」を読み直す――」、『和漢比較文学』第56号、2016年2月
渡邊秀夫著『平安朝文学と漢文世界』、勉誠社、1991年
――『漢語大詞典』、上海辞書出版社、1986-1994年
――『全唐詩』、中華書局、1960年
――『全訳漢辞海(第四版)』、三省堂、2016年
――『日本国語大辞典(第二版)』、小学館、2000-2002年

日本語教育への「意味順」の応用
―読解授業において日本語文の構文解析力を育成するための指導例―

Application of a Meaning-order Approach to Japanese Language Education: Examples of Instruction for Developing the Ability to Parse Japanese Sentences in a Reading Comprehension Class

セーンウライ・ティティソーン

Abstract

Moving up to the C1 and C2 levels in the JF Standard and the Framework of Reference for Japanese Language Education requires proficient learners to be able to read and understand structurally and linguistically complex texts. To acquire the ability to parse sentences, it is necessary to cultivate such skills from the beginner and intermediate levels of preliminary education. In this paper, the authors propose the "Meaning-order Approach", which has been used in English education to teach sentence structure, and examples of its application to Japanese reading comprehension instruction in order to cultivate the ability to parse Japanese sentences. When the Meaning-order Approach is applied to Japanese, it is necessary to rearrange the English word order into the basic Japanese word order: when, where, who, what, and how. By teaching meaning-order, it is expected that omitted elements such as subjects can be visualized on the superficial structure of Japanese sentences, facilitating understanding of the content. Not only that, but it can also be expected to help students grasp the role that each component of a sentence plays in the sentence. Nevertheless, the example of the Meaning-order approach presented in this paper is only a consideration and a proposal. The effectiveness of its teaching has not yet been examined thoroughly. Furthermore, no research exists on Meaning-order learning and instruction in Japanese language education at this time. In the future, the authors plan to implement Japanese reading comprehension classes utilizing the Meaning-order approach.

Keywords

意味順、構文解析、読解教授法、JF日本語教育スタンダード、日本語教育の参照枠

Meaning-order approach, Syntactic analysis, Reading instruction, the JF Standard for Japanese Language Education, the Framework of Reference for Japanese Language Education

1. はじめに

文章を理解する上で必要なスキルの1つは、文の統語構造に対する解析力である。文中の単語を自動的に認識し、統語構造を迅速かつ正確に解析し、さらに文レベルの意味を正確に構築できるようになると、流暢な読み手と評価される。

近年、海外の日本語教育の現場で、コースデザイン、授業設計、および評価を考えるための枠組みとして、国際交流基金によって作成された「JF日本語教育スタンダード」(以下、JFスタンダード)が利用されている。JFスタンダードと同様に、文化庁もCEFRを参考に「日本語教育の参照枠」(以下、参照枠)を独自に開発した。JFスタンダードと参照枠は「日本語を使って何がどのようにできるか」という課題遂行能力を6レベル指標(A1、A2、B1、B2、

C1、C2）に分け、それを能力記述文(Can-do)で表しているという点で共通している。読む能力については、上級に相当するC1と超上級に相当するC2では、C1レベルで長い複雑な事実に基づくテキストを理解できること、C2 レベルでは抽象的かつ構造的にも言語的にも複雑な文章を理解できることが要求されている。日本語文の構造の捉え方に関しては、初･中級学習者が省略された主語を特定できずに文の意味が理解できないという問題を引き起こすことなどがこれまでの先行研究で指摘されている(野田･桑原･フォード丹羽･藤原, 2013;フォード丹羽, 2018)。上級レベルの要求事項を満たすには、初級･中級レベルの段階から文の統語構造を解析するスキルを培うことが日本語教育における重要な課題となるだろう。そこで、本稿では、英語の文構造を可視化するために開発された「意味順」というアプローチを用いて日本語の読解授業への応用を考察し、指導例を提案したい。

2. 先行研究

2.1 意味順とは

「意味順」という指導法は英語教育において「英語の文構造の学習･指導を目的として開発されたもの」である(田地野･金丸2021：5)。田地野･金丸(2021)は意味順(A Meaning-order Approach)を「意味のまとまりの順序」と定義している。この意味順は英文の構成要素の観点から考えると「主語」や「動詞」、「目的語」、「補語」などといった文法用語に相当する。それらの用語は一般用語として「だれが/する(です)/だれ･なに/どこ/いつ」または5W1H(who, what, where, when, why, how)という意味のまとまりで考えられる。人が情報や意思を伝達する際に、あるいは、意味(メッセージ)を伝える際に、5W1Hを用いて話を進めることが重要視される。英文の構造を可視化させるために、図1に示すように「意味順ボックス」が用いられるほか、これらの構成要素に加え、オプションとして「どのように」と「なぜ」というボックスを設けることもできる。なお、「玉手箱」は接続詞(and, ifなど)や疑問詞(what, whereなど)、助動詞(do, willなど)といった言葉を入れるために設けられている。

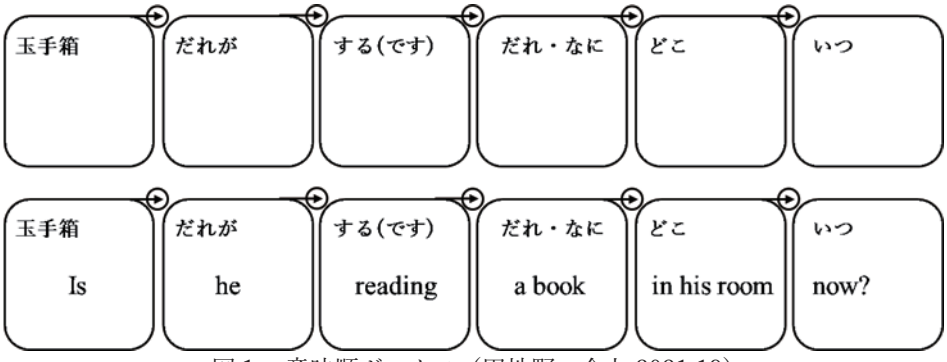

図 1　意味順ボックス（田地野・金丸 2021:19）

2.2 意味順の理論的背景

外国語学習においては、許容される文法上の間違い(局所的誤り)と許容されない文法上

の間違い(全体的誤り)がある。両者の違いは、前者では意味理解が可能であるのに対し、後者では意味理解が不能になる点である。日本の英語教育で意味順指導が行われる背景には、日本語と英語の構造的違いが大きく関係している。日本語は格助詞がくっつくことで語順を自由に変えられる言語である一方、英語は固定語順言語であるため、語順が変わると意味も変わる。例えば、「The man ate the apple.(その男性がそのリンゴを食べた)」と「The apple ate the man.(そのリンゴがその男性を食べた)」が挙げられる。日本語は自由語順言語であるため、英語を話したり書いたりする際に、日本語の語順に影響されて英語の語順を間違えることが日本語話者には多く見られる。さらに、日本語では主語が省略されることが多いため、日本語母語話者は主語を忘れがちである。全体的誤りである文構造の誤りを避けるために、英文法を整理する枠組みとして意味順が提案されたのである。

全体的誤りを避けることの重要性を裏付ける証拠として、ここで幼児の母語獲得に関する研究を紹介したい。研究対象は英語母語話者の幼児であるが、幼児は局所的誤り(local errors)をするものの、全体的誤り(global errors)はしないことが明らかになっている。

(1)　Jay *said* me no.(ロス、2歳8ヶ月)
(ジェイが私にNoと言った)
(2)　I *said* her no.(クリスティー、3歳1ヶ月)
(私は彼女にNoと言った)

(Pinker 2013:24-25)

(1)あるいは(2)でも間接目的語「me」と「her」に対しては本来「told」を用いるべきであるが、2人の幼児は「said」を使った。動詞を間違えても、コミュニケーション上は影響が少ない。意味にほとんど影響しないこのような誤りは局所的誤りに当たる。 つまり、英語母語話者は幼児であっても、語順を誤って相手に意味を取り違えさせるというような全体的誤りはしないのである。

意味順指導を取り入れたもうひとつの背景としてコミュニケーション上で物事を具体化して伝えることが重要視されているという点が挙げられる。意味のまとまり(Meaning units)である5W1Hを意識すると、重要な情報が不足なく相手に伝えられるようになり、コミュニケーションが円滑になる。

最後に、日本の英語教育では文構造を指導するにあたって5文型・7文型の枠組みが利用されてきた。5文型・7文型を説明するにあたり、主語(S)や目的語(O)、補語(C)といった文法用語が使われるのが一般であるが、英語学習の初心者にとって文法用語の理解は容易ではない。文法用語を使用せずに、図1に示したような「だれが、する(です)、だれ・なに、どこ、いつ」という日常生活の中で使う言葉で説明する方が学習者にとっては理解しやすい。この意味順の指導は表1に示すように5文型・7文型の枠組みに対応付けられる。

表 1　意味順と5文型・7文型の対応表(田地野2011:39)

	だれが	する(です)	だれ・なに	どこ	いつ
1. SV	She	laughed			
2. SVC	She	became	a doctor.		
3. SVO	She	opened	the door.		
4. SVOO	She	sent	me a letter.		
5. SVOC	She	calls	me Aki.		
6. SVA	She	lives		in Tokyo.	
7. SVOA	She	put	her bag	on the desk	

田地野(2023)は意味順ボックスを利用することによって以下の3点のメリットがあると主張した。1)「主語、述語、目的語、補語」といったような文法用語を使わずに、学習者が英語を理解することができる。2)日本語では主語などが省略されていることが多いため、日本人英語学習者が英文を作る際には主語や目的語が欠落しがちになる。意味順は主語や目的語の欠落を防ぐ効果が期待できる。3)意味順ボックスによって英文法の全体像(ロードマップ)が掴めるようになる。

2.3 意味順を活用した読解指導

日本の英語教育における意味順による指導は、文法指導をはじめ、作文指導、翻訳指導、読解指導に利用されている。英文の読解指導で意味順指導が利用されている背景には、下記の3つが挙げられる(村上2021:242)。

1)日本人の英語学習者が英語の文構造を理解できていない。英文の構造が複雑になるにつれて、読みのつまずきが如実に現れる。

2)文の構成要素として意味のまとまりである句や節を英文中で見抜けず、その句や節が文中でどのように働くかを理解していない(例(3)を参照)。そこで、学習者の理解を助ける足場かけ(scaffolding)として、指導者が例(4)のように英文の文字列を句に分けて提示し指導する。

(3)　An mean-spirited, miserly old man named Ebenezer Scrooge sits in his counting-house on a frigid Christmas Eve.

(4)　An mean-spirited,
miserly old man
named Ebenezer Scrooge
sits
in his counting-house
on a frigid Christmas Eve.

(村上 2021：245)

指導者自身が文字列を句単位に区切った場合、学習者が自力で意味のまとまりを見出す

機会が損なわれてしまう。意味順ボックスの枠に句を書き込む活動は意味のまとまりをつかむ練習となりうるため、学習者自身に作業させるのが望ましい。

3)一つの単語に複数の品詞の働きがあるが、動詞の種類ごとの働きや、文を成立させる上で動詞ごとに最低限必要な成分を理解していないことがある。例えば、下記の例文である。

(5) a. He looks young. (自動詞)
b. He looks the woman in the eye. (他動詞)
c. He looks at the window. (句動詞)

(村上 2021:247)

例文(5)のa.の「looks」は自動詞でも連結動詞でもあるが、主格補語「young」なしでは文を完結できない。例文(5)のb.「looks」は他動詞である。例文(5)のc.「looks at」は句動詞である。b.とc.の動詞には目的語が直接後続する。目的語がないと、文が成り立たない。つまり、英語学習者にとっては述語とその述語が表す意味を補う働きをする「項」の整理がつかない。意味順指導によってその述語が何項述語か、述語の種類の整理を助けることになる。

村上(2021)は読解授業において、英語文章を文構造の要素を示す意味順ボックスの枠ごとに書き込む活動を実施した。意味順ボックスの使用目的として、英文の文章を英語の語順のまま理解する力を養うことにより文構造の理解を助けること、内容の理解を語順で認知し、さらに英語表現の産出力を養うことが挙げられている。活動の進め方として、各学習者にテキストの英文を意味順ボックスに沿って意味順ノートに書き込ませる。その後、ペアワークで各枠に書き込んだ意味のまとまりを検討させる。最後に、黒板に貼ってある意味順ボックスへ書き写して発表してもらう。句の区切り方は学生各自またはペアによって異なるため、意見が分かれた際には学生同士で対話またはディスカッションもできる。村上(2021)によれば、意味順ボックスは学習者の構文読み取りを確認する上で有効なツールであるという。

2.4 日本語学習者の読解学習の問題点

日本語読解の学習においては日本語学習者も英語学習者と同じような問題を抱えている。日本語学習者の読解学習の問題点について言及した研究には、野田・桑原・フォード丹羽・藤原、(2013)、安井・井手・土居(2015)、トラン(2016)、サグアンシー(2016)、セーンウライ(2023a, 2023b)などがある。英文読解指導における意味順指導の背景とその問題意識を踏まえてこれらの研究を整理した結果、以下のように対応付けられた。

2.4.1 日本語の文構造が理解できないことについて

安井他(2015)によれば、中級レベルの日本語読解教材は漢字が多く、文構造も複雑であり、初級レベルを終えた学習者が読解を負担に感じるようになる場合があると述べている。安

井他(2015)は学習者が読解教材を難しく感じないように内容を書き換えることを試みた結果、リーダビリティの難易度判定と教師の評価が一致し、書き換えた教材が分かりやすくなったと評価された。さらに、学習者が正確にテキストを理解できない場合、読解に対する不安が生まれ、意欲が低下する恐れさえある。この点について、サグアンシー(2016)は中級以上のタイ人日本語学習者が文章理解や文構造に対して不安を感じやすいことを指摘している。

2.4.2 意味のまとまりを見抜けないこと、文中での語句の役割が理解できないことについて

意味のまとまりで区切って読めないことについては、トラン(2016)がベトナム人の実例を基に、中級学習者が説明文を読んで理解する上でその妨げとなっている要因をより具体的に分析しており、英語のような単語間の空白がないために意味の切れ目が分からない、名詞修飾のある文が分からないといった問題を挙げている。文中での語句の役割が理解できないことについては、日本語文において間接疑問節などが担っている役割をタイ人日本語学習者が把握していないことがセーンウライ(2023a, 2023b)によって明らかになった。具体的な例としては「つまり、何かほかのものにたとえることによって、相手はそれがどんなものかイメージすることができるのだ」という文を読んだ際に、「それがどんなものか」は動詞「イメージする」の目的語の役割を果たすということを理解してない。

2.4.3 一つの助詞に複数の用法がある場合にその用法の違いが整理できないことについて

英語読解指導では、英語の動詞にはさまざまな種類があるため、文を成立させる上で英語学習者が動詞とその項の間の関係を整理できないという問題が指摘されている。日本語の場合は、文を成立させる上で述語には最低限必要な格助詞が決まっている。例えば、「教える」という述語に最低限必要な格助詞が3つある。それは、「が」格、「に」格、「を」格である。例:マナさんが佐藤さんにタイ語を教える。しかしながら、一つの助詞には複数の用法がある。「あ、山田さんが来たよ」と「水が飲みたい」を例にとって説明する。前者の「が」格は主語を、後者は願望の対象語を表す。後者の「水が飲みたい」では、「水が」は目的語の位置を占めている。日本語学習者は助詞の用法の違いを認識できず、「は」や「が」の前にあるものを主語だと考えがちである(野田・桑原・フォード丹羽・藤原, 2013)。日本語読解指導でも、意味順指導によって述語とその項の間の関係を整理する助けとなることが期待できる。

そこで、英語教育の意味順アプローチを日本語の読解指導に応用することによって、学習者が複雑な構造をもった文を読んだ際に、その構造または表面的な構造の上で目に見えない省略された要素などが可視化され、内容の理解が促進されるものと考える。それのみならず、村上(2021)が述べたように、文の成分を見抜いて意味順ボックスの枠に書き込ませる活動は、学習者に自力で文の成分を考える機会を与え、それにより文の統語構造を解析する能力が培われると筆者は考えている。学習者の思考を促すこのような活動を読解授業に取り入れると、読解授業はアクティブラーニング型授業にもなるだろう。とはいえ、日

本語教育において意味順指導についての研究は見られず、まだ研究する余地が残されている。さらには日本語の読解においても、意味順指導が日本語学習者にとって文構造理解の助けになるかどうかを調べてみる必要があるだろう。次節では、英語教育の意味順を日本語教育へ応用することを考えたい。

3. 日本語教育への意味順の応用

3.1 日本語の基本語順と基本文型

英語と日本語では基本語順が異なる。人は既知の情報から未知の情報の順に説明を受けるのが一番理解しやすい。日本語母語話者は「むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました」のように、時間・場所・登場人物の順に設定し、情報を伝える。物語の言説構造のように、周辺的な事柄から焦点化されている事柄へという順序で内容を伝達するのが自然で分かりやすい(石黒2014)。このような背景のもと、日本語は「いつ、どこで、だれが、なにを、どうした」といった語順をとる(石黒2014;大橋・竹野・松浦2020)。この理由から、意味順を日本語教育に応用する際には、図2に示すように、意味のまとまりの並び順を自然な語順に置き換える必要がある。

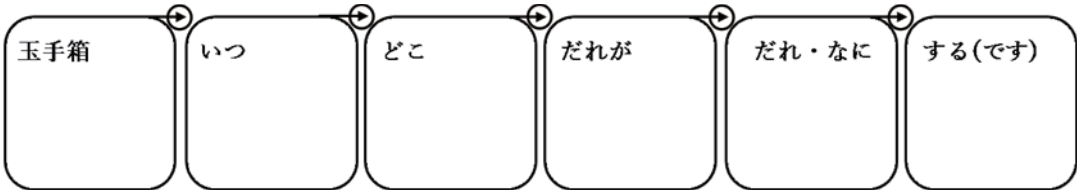

図 2 日本語の意味順ボックス　出典：筆者作成

英語教育においては、英語文法を学習・指導する上で基本文型として5文型・7文型の枠組みがある。前述したように、意味順は5文型・7文型の枠組みに対応付けられる。意味順を日本語教育に応用するならば、まずは、日本語に基本文型が存在するかどうかを調べる必要がある。日本語文の述語は3種類しかない。それは動詞、形容詞、そして名詞である。原沢(2012)は、文を成立させるために、述語との関係において消除することができない「必須成分」、そして、消除しても文として成り立つ「随意成分」を分析し、日本語の基本文型をまとめた。原沢(2012)による日本語の基本文型は、表2に示した通りである。表2で表した基本文型は「基本的なものだけで、すべてではないがこれだけでかなりの述語をカバーできる」(原沢2012：30-31)。統語的な観点から、原沢(2012)による述語の分類を整理すると、1)の動詞は1項動詞、2)～4)は2項動詞、5)は3項動詞である。6)のイ形容詞は1項形容詞、7)は2項形容詞となる。8)と9)のナ形容詞は順に、1項形容詞と2項形容詞に相当する。

表2 日本語における基本文型 出典:原沢(2012:31)を一部改変

文型の種類	例	述語の種類（本稿筆者による）	
1）～が　動詞	降る、光る、咲く、乾く	1 項動詞	動詞
2）～が～を　動詞	切る、食べる、見る、飲む	2 項動詞	
3）～が～に　動詞	反対する、かみつく、付く		
4）～が～と　動詞	結婚する、戦う、別れる		
5）～が～に～を　動詞	紹介する、教える、与える	3 項動詞	
6）～が　イ形容詞	なつかしい、正しい、美しい	1 項形容詞	イ形容詞
7）～が～に　イ形容詞	詳しい、疎い、乏しい	2 項形容詞	
8）～が　ナ形容詞	賑やかだ、静かだ、鮮やかだ	1 項形容詞	ナ形容詞
9）～が～に　ナ形容詞	熱心だ、ぴったりだ、不可欠だ	2 項形容詞	
10）～が　名詞＋だ	犯人だ、弁護士だ、学生だ	名詞	

意味順を原沢(2012)の基本文型に対応付けると、表3に示す通りになる。表内に示す例文はすべて単文の基本文型であり、「いつ」や「どこ」を表す随意成分がなくても文が成り立つ。

表 3 意味順と日本語における基本文型の対応表（筆者作成）

基本文型		いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する（です）
動詞	1）～が			雨が			降る
	2）～が～を			山田さんが		コーヒーを	飲む
	3）～が～に			私が		原発に	反対する
	4）～が～と			彼が	恋人と		別れた
	5）～が～に～を			マナさんが	佐藤さんに	タイ語を	教える
イ形容詞	6）～が			アジサイが			美しい
	7）～が～に			彼が		パソコンに	詳しい
ナ形容詞	8）～が			商店街が			賑やかだ
	9）～が～に			この電子レンジが		台所に	ぴったりだ
名詞	10）～が			田中さんが			学生だ

3.2 意味順ボックスへの書き込み方の例

さて、読解授業に意味順をどのように活用するかであるが、ここで先に意味順ボックスへの書き込み方の例の提案をしたい。冒頭で述べたように、意味順は英文を構成する重要な「意味のまとまり」の並び順である(田地野2011;2021)。日本語文の表記上、日本語の単語の間には空白がない。つまり、日本語は分かち書きしないのである。「やさしい日本語」の観点から考えると、分かち書きしないことで外国人は語句を認識することが難しくなり、文の意味も理解しにくくなる(弘前大学社会言語学研究室 2013)。よって、学習者に文を語句に区切る「語句分節活動」をさせることを提案する。日本語は「実質語(自立語)+機能語(付属語)」構造を持つ語句、つまり文節が多くあるため、文節単位に区切る練習が語句のまと

め方のヒントになると考えられる。例えば、「きのう/スーパーで/私が/買った/品物は/ヨーグルトと/野菜だ」(石黒2012：4)。その後、区切ったそれぞれの文節が意味順の箱のどの枠に当てはまるかを学習者に書き込ませる。

なお、英語読解において村上(2021：254-255)が実践した意味順指導法を参考にすると、意味順の箱への書き込み方は学習者によって多岐にわたっていた。表4のように、英文の成分を単一層に書き込んだ解答例があれば、表5の通り、英文を複数の層に分けて書き込んだ解答例もある。表4の場合は、単一層の分け方であり、「the man who was a fire fighter in America」を一つに群化し、目的語の位置に当てはめる。それに対し、表5は複数の層に分けて箱に入れた場合である。表5の場合は「the man who was a fire fighter in America」という節をさらに分けて各ボックスに当てはめる方法である。このように、英文を意味順ボックスの枠に当てはめる方法は大きく2つ分けられる。一つの方法は、文の成分を単一層に書き込む方法である。もうひとつの方法は、複数の層に振り分けて書き込む方法である。

表 4 単一層に分けて箱に入れた英文の例（村上 2021:255）

玉手箱	だれが	する (です)	だれ	なに	どこ	いつ
	I	know	the man who was a fire fighter in America			

表 5 複数の層に分けて箱に入れた英文の例（同前）

玉手箱	だれが	する (です)	だれ	なに	どこ	いつ
	I	know	the man			
	who	was		a fire fighter	in America	

日本語文の場合は、「きのう/スーパーで/私が/買った/品物は/ヨーグルトと/野菜だ 」を例にとると、日本語学習者は英語と同じように、単一層と複数の層の意味順枠に分けて振り分ける可能性がある。表6では、「きのうスーパーで私が買った品物は」を一塊にし、主語の位置に、「ヨーグルトと野菜だ」もひとつにまとめ、述語の位置に当てはめた解答例である。表7の場合は日本語文を文節に区切り、それぞれのスロットに書き込んだものである。

表 6 単一層に分けて箱に入れた日本語文の指導例（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する (です)
			きのうスーパーで私が買った品物は			ヨーグルトと 野菜だ

表 7 複数の層に分けて箱に入れた日本語文の指導例（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する (です)
	きのう	スーパーで	私が			買った
			品物は			ヨーグルトと
						野菜だ

村上(2021)によると、意味順を用いた英語の読解指導では、一つの文が何層もの構造からなる複雑な英文に対する読み取りに英語学習者が困っている様子が観察されたため、表4のような分解を終えた上で、表5のような分析へ進むことを提案したのだという。

日本語教育の分野においては意味順についての研究がまだ行われてないため、語句を意味順ボックスに振り分ける際に日本語学習者にどのようなつまずきがあるかなどはまだ明らかになっておらず、まだ研究の余地がある。意味順を指導するにあたって、日本語学習者にいきなり意味順ボックスの枠に文を書き込ませるのでは、学習者が英語学習者のそれと同様に困惑する恐れがあるため、最初の段階では指導者が文を語句に区切って示すのが適切かもしれない。その後、学習者に意味のまとまりを考える機会を与え、自分自身で文を語句に区切らせればいいだろう。段階的に難易度を上げていくのがいいかもしれない。

3.3日本語学習者の文構造理解の問題とその指導例

日本語の構文解析上の古典的な問題は主語がよく省略され、主語と述語の対応がわかりにくいことである。日本語学習者が略された主語を特定できないというような問題を論じたこれまでの先行研究の中には、野田・桑原・フォード丹羽・藤原, 2013;田中・李, 2018;フォード丹羽, 2018;中島, 2020;セーンウライ, 2023a などがある。例えば、野田他(2013)では、日本語学習者が主語を特定するストラテジーとして、「人や人物などの名詞」または「『は』や『が』」の前にあるものを主語と見做しやすいことが窺える。また、2.4で述べたように、セーンウライ(2023a)では日本語学習者にとっては、日本語文の中で文の構成要素がどのような役割を担うのかを理解するのが困難であることが明らかになった。意味順指導がどのように日本語学習者の文構造の理解を助けるか、その指導例を次で述べたい。

3.3.1　省略された情報の可視化

まずは、日本語における省略現象について述べたい。日本語の文章では、連続する文に同じ主語がある場合、直前の文に主語が現れていたら、後続の文で主語が省略される。また、一人称主語は基本的に省かれる。目的語も前文で明示されていたら、後続する文で省き得る。また、広告文などでは述語が省略されることがある。例(6)～(8)に示す通りである。

主語の省略

(6)　太郎が僕に話しかけてきた。だけど、知らん顔をして返事をしてやらなかった。
（惠谷2002：102）

述語の省略

(7)　時計を脱いで、バリ島へ。（呂2014：422）

目的語の省略

(8)　鎌倉の地図をもってきましたか。はい、もってきました。（宮島2019：146）

文章の読解は認知活動である。文を読む際に、並列的に情報の処理と保持作業をする。渡邊(2011)の具体的な作例で説明したい。例えば、「太郎は花子と一緒に公園へ行った。公園にはきれいな花が咲いていた。2人はしばらくの間それを眺めていた。」という文章について、2文目まで読み進めた段階ではすでに読んだ1文目の情報は頭の中にあるメモ帳に残っている。残らない状態で読み進めると、2文目の「公園」が太郎と花子が行った公園と解釈できなくなる。同様に、3文目まで読み進めた段階で1文目と2文目の内容が残っていないと、「2人」と「それ」が何を指すか解釈できなくなるだろう。

(6)を例にとると、母語話者は例(1)を読んだとき、「太郎が僕に話しかけてきた」を読み終わった時点で心の中に、「動作主の太郎が受動者の僕に話かける働きをかけた」という出来事が保存される。「だけど、知らん顔をして返事をしてやらなかった」まで読み進めた段階で、「知らん顔をする」の動作主は「僕は」であり、「返事をしてやらなかった」の受動者は「太郎に」であるとすぐに分かる。つまり、母語話者は、省略された成分はすぐに読み取れるが、日本語学習者にとっては表に現れていない成分を読み取ることは簡単な作業ではない。セーンウライ(2023a)では、タイ人日本語学習者の読解困難点を調査し、次の例(9)に示すように、学習者が省略された主語を特定できないことが明らかになった。

(9)　次に、もう一人のゲストは、逆に小学生に『どうしてそれが知りたいのかな』と質問をした。どうしてそんな疑問を持つのかを一緒に考えてあげたほうがいいと考えたのだろう。
(例文(9)の中の「それ」は「あしたはどこにあるのですか」という質問を指している)

例(9)では、実は、動詞「考えた」の動作主は前文と同じ「もう一人のゲスト」であるが、学習者は書き手が動作主だと勘違いし、違う意味で捉えてしまった。

筆者自身が例(6)～(9)を意味順ボックスの枠に複数の層で振り分けてみたところ、表8～11に示すようになった。例(6)～(9)は母語話者が読めば、省略されて表に現れていない成分をすぐに読み取れるが、日本語学習者、特に初中級の学習者では一筋縄ではいかない場合もあると思われる。意味順による構文解析の練習段階では、表8に示すように一つの文を複数の層に分けることで、文の中から切り出した述語とその述語と関係する項を考える上での刺激になる。例えば、述語「返事をしてやる」は意味的な必須項として動作主項(だれが)、被動作主項(だれに)、そして対象物項(何を)の3項を要求する。表面上では、動作主「僕は」、および被動作主「太郎」、対象物「話しかけ」は見えないが、練習段階で意味順ボックスを用いて空白の必須成分の枠に該当するものを学習者自身で考えさせれば、文の必須成分の思考を刺激することになるだろう。意味順ボックスに書きこむ活動を通して必須成分を考えるようになる。さらにそれを繰り返すことで、この読解の過程が習慣化すると考えられる。そうして、次に主語が省略された文章を読んだとき、学習者は文を成り立たせる

必須成分に気づきやすくなるかもしれない。表8〜11では省略され表面上に見えない成分は括弧で表している。意味順ボックスは日本語文の構造を可視化させる役割を担っており、学習者に表面上見えない必須成分を考える機会を与えることになるだろう。

表 8 主語の省略された例文（1）（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する (です)
			太郎が	僕に		話しかけた
だけど			(僕は)			知らん顔をして
			(僕は)	(太郎に)	(話しかけに対する) 返事を	(返事を) してやらなかった。

表 9 述語の省略された例文（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する (です)
			(あなたが)		時計を	脱いで
		パリへ				(行こう / 行きませんか / 行きなさい)

表 10 目的語の省略された例文（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する (です)
では		部屋へ	(私が)		カメラを	取りに行きます
から		玄関で	(あなたが)		〔私を〕	待っていてください

表 11 主語の省略された例文（2）（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する (です)
次に			もう一人のゲストは			
逆に				学生に		
どうして				↓	それが	知りたいのかな
				学生に	質問を	した
どうして					そんな疑問を	持つのかを
			(もう一人のゲストは)			一緒に考えてあげた ほうがいい
			(もう一人のゲストは)			と考えたのだろう。

3.3.2　文中での語句の役割に対する意識を向上させる

意味順ボックスのもう一つの利点は、語句が文中で担う意味役割を学習者が考えることを促す点にある。2.4で述べたように、日本語学習者は文中の語句の役割を理解できず、一つの格助詞が持つさまざまな意味と役割を認識できないことが多い。具体的には、主語を特定するストラテジーとして人や人物などの名詞、または「は」や「が」の前にあるものを主語だと考える傾向が強い (野田他2013)。例えば、「この本は田中さんが書いた (庵2020：26)」では、「この本」を主語と捉える学習者が多かったが、正しくは目的語である (表12参照)。または、文構造がシンプルな「色が赤い」や「水がほしい」(堀口1995：44)なども同じ「が」格をとるが、文中で意味役割が異なる。「色が赤い」では、「色が」は主語位置を占めている (表13参照)。一方、「水がほしい」では、「ほしい」は情意形容詞であり、主語は感情の主体であ

る「私」か「彼」でなければならない。「水が」は主語と考えにくいため、目的語位置を占めていると判断できる(表14参照)。このように、意味順ボックスの枠に語句を振り分ける活動は、学習者が文中の語句の意味役割を考え、助詞の用法を整理する契機となるであろう。

表 12 主題文の書き込み例（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する (です)
			田中さんが		この本は	書いた

表 13　主語の書き込み例（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する (です)
			色が			赤い

表 14 目的語の書き込み例（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する (です)
			(私は)		水が	ほしい

これまで述べたように、意味順ボックスの枠には「いつ (when)」、「どこ (where)」、「だれが (who)」、「だれ・なに (who(m)/what)」、「する (です)(does(is))」の5つの枠しか設けられなかったが、オプションとして「どのように (して)(how)」と「なぜ (why)」を設置することもできる (田地野2011)。田地野 (2011：59) によると、「どのように (して)(how)」の枠には、動作をするときの「ありよう：状態」や「手段・道具」を表すことばを当てはめる。「なぜ (why)」の枠には「目的」や「原因」を入れる。以下の例文を用いて意味順の枠に当てはめると、表15のようになる。

(10)　今日は取引先との約束があり、先方のオフィスへ出向きました。車で行ったのですが、雨がひどく降っていたので、注意深く運転しました。(田地野2011：60)

表 15 意味順ボックスにおけるオプションの枠（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	どのように (して)	する (です)	なぜ
	今日は		(私は)	取引先との				
			約束が				あり	
		先方のオフィスへ					出向きました	
			(私は)			車で	行ったのですが	
			雨が			ひどく	降った	ので
(ので)			(私は)			注意深く	運転しました	

なお、日本語では原因・理由を表すための表現は例 (11)a.-g. に示すようにさまざまある。接続助詞「から」、「ので」、「ため」のほか、「て」形接続と格助詞「で」で表すこともできる。

(11)　a. 体調が悪いから早退した。
　　b. 体調が悪いので早退した。

c. 体調が悪いため早退した。
d. 体調が悪くて早退した。
e. 体調不良のため早退した。
f. 体調不良から早退した。
g. 体調不良で早退した

(杉浦2013:23)

「なぜ」の枠を設けない場合は、接続助詞は英語と同じように「玉手箱」の中に書き込んでもいいだろう。また、「て」形接続構文、または格助詞「で」で原因・理由を表す複文の場合は、「する(です)」の枠に振り分けてもいい。

表 15-1 意味順ボックスの「なぜ」枠の記入例（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する(です)
			体が			悪い/
から/ので/ため						早退した

表 15-2 意味順ボックスの「なぜ」枠の記入例（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する(です)
			体が			悪くて
						早退した

表 15-3 意味順ボックスの「なぜ」枠の記入例（筆者作成）

玉手箱	いつ	どこ	だれが	だれ	なに	する(です)
						体調不良の/体調不良で
ため/から						早退した

以上、日本語文に意味順ボックスを応用する際の記入方法についていくつかの例を提示した。日本語の場合は、「象は鼻が長い」のような二重主語構文や「田中さんが大学で山田さんに会ったのは、先週です」のような強調構文などがあるため、今後の課題としてこのような構文の記入方法を考える必要がある。文法には例外があり、また、どんな規則にもそれに反する例外がある。この前提を踏まえ、田地野・金丸(2021:22)は、意味順は緩やかなシステムであり、「認知言語学で扱われているプロトタイプのような考え方の方が近い」とし、さらに、教育環境や学習段階などに応じて柔軟性を持って対応をすることが重要だと言及している。

4. まとめ

JFスタンダードと日本語教育の参照枠においてはC1とC2レベルへ上がると、熟達した学習者が構造的にも言語的にも複雑な文章を読み、理解できることが要求されている。構文解析力を身に着けるには、予備的な教育として初級・中級レベルの段階からそのスキルを培う必要がある。本稿では、その日本語文の構文解析力を育むため、英語教育で文構造の

指導に利用された「意味順」というアプローチ及びその指導例を日本語読解指導に応用することを提案した。意味順のアプローチを日本語に応用する場合は英語の語順から日本語の基本語順へと並べ替える必要があり、「いつ、どこで、だれが、なにを、どうした」とする。意味順の指導により、日本語文の表面構造上における主語など省略された要素が可視化され、内容理解の促進が期待できる。それのみならず、それぞれの文の構成要素が文中で担う役割を把握させることも期待できるだろう。とはいえ、現段階では本稿で提示した意味順アプローチの指導例は一考察、あるいは一提案に過ぎず、その指導の効果はまだ十分に検討できていない。さらに、日本語教育における意味順学習・指導についての先行研究がないため、今後は意味順アプローチを活用して日本語の読解授業を実践する予定である。

セーンウライ・ティティソーン
（せーんうらい・てぃてぃそーん、SAENG-URAI Thitisorn）
東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程

参考文献

1) Pinker, S. (2013). Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure (New Edition), MIT Press.
2) 庵　功雄(2020).「は」と「が」の使い分けを学習者に伝えるための試み:「主語」に基づくアプローチ　言語文化, 57, 25-41.
3) 石黒　圭(2012). 読解とその教え方を考える　国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要, 9, 1-18.
4) 石黒　圭(2014). 特集1　書けない人ほどあなどるもの―文章の基本のき―　公募ガイド3月号2月8日, 15-25.
5) 恵谷　容子(2002).　説明文と随筆の文章における主語の省略　早稲田大学日本語教育研究, 1, 101-115.
6) 大橋　典晶・竹野　純一郎・松浦　加寿子(2020).　Google翻訳を用いた語順と五文型に着目した日英翻訳指導　中国学園紀要, 19, 181-186.
7) 杉浦　滋子(2013).　日本語の理由表現・理由疑問表現　言語と文明, 11, 13-28.
8) 田地野　彰(2011).　意味順英語学習法　ディスカヴァー・トゥエンティワン
9) 田地野　彰・金丸　敏幸(2021). 第1章「意味順」の意義と活用―英文法の整理と英語指導の体系化　田地野　彰(編) 明日の授業に活かす「意味順」英語指導―理論的背景と授業実践―　(pp.3-37)　ひつじ書房
10) 田地野　彰(監修)　佐々木　啓成・フランチェスコ　ボルスタッド(2023). 改訂版「意味順」式で中学英語をやり直す本　Kadokawa.
11) 田中　伊式・李　在鎬(2018).「やさしい日本語ニュース」の難易度に関する学習者調査 2018年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 468-473.

12）中島　晶子(2020).　第2章　非漢字系初級学習者の読解困難点　野田　尚史(編)　日本語教育学研究8　日本語学習者の読解過程　(pp.27-45)　ココ出版
13）野田 尚史･桑原 陽子･フォード丹羽 順子･藤原 未雪(2013). 日本語学習者の読解過程―教師が考えているのとは違う学習者の実態―　第17回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム AJE フォーラム(スペイン, マドリード･コンプルテンセ大学), 38.
14）原沢　伊都夫(2012).　日本人のための日本語文法入門　講談社現代新書
15）村上　裕美(2021).　第10章「意味順」を用いた読解指導　田地野　彰(編)　明日の授業に活かす「意味順」英語指導―理論的背景と授業実践―(pp.241-261)　ひつじ書房
16）安井　朱美･井手　友里子･土居　美有紀(2015). 中級日本語読解教材の書き換えにおける一考察―リーダビリティスコアと日本語教師の評価を基に―　国際教育センター紀要, 15, 23–27.
17）トラン　グエン　バオ　ヴィ(2016).　ベトナム人中級学習者の説明文の読解上の問題点―ホーチミン人文社会科学大学日本学部2年生と3年生を例にして―　日本言語文化研究会論集, 12, 111-135.
18）サグアンシー　タンヤーラット(2016).　外国語としての日本語における読解不安･外国語学習不安･読解力との関係:タイ人大学生を対象に　言語科学研究:神田外国語大学紀要, 22, 45-64.
19）セーンウライ　ティティソーン(2023a). タイ人日本語学習者が読解において意味理解を誤る文の特性　日本語･日本学研究, 13,　東京外国語大学国際日本研究センター主催サマースクール研究発表会　夏季セミナー2022「国際日本研究への誘い」, 258.
20）セーンウライ　ティティソーン(2023b). タイ人日本語学習者における文の意味理解困難の現状調査 ―文構造の側面を中心に― Thammasat Journal of Japanese Studies, 40(2), 1-18.
21）フォード丹羽　順子(2018).　日本語学習者の読解における主語の特定―中級学習者と上級学習者の比較　佐賀大学全学教育機構紀要, 6,101-116.
22）堀口　和吉(1995).　対象語廃止論　山邊道 : 国文学研究誌,39, 44-57.
23）呂　晶(2014).　日本語広告表現の語用論的機能に関する一考察 : 述語が現れない文を中心に　日本語言文化研究, 3, 421-431.
24）宮島　敦子(2019).　日本語とスペイン語の会話文における目的語の省略　東京外国語大学留学生日本語教育センター論集, 45, 143-154.
25）渡邊　芙裕美(2011).　日本語学習者の読解―中上級者のワーキングメモリ容量―　日本語教育方法研究会誌, 18(2), 38-39.
26）弘前大学人文学部社会言語学研究室(2013).〈増補版〉「やさしい日本語」作成のためのガイドライン　弘前大学人文学部社会言語学研究室 Retrieved July 7,2023 from https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/kento207_20_sankou5-6.pdf

歎異抄研究会と『歎異抄入門』についての覚書
―冷戦期日本における仏教者平和運動の一断片―

Notes on Tannishō Study Group and *An Introduction to Tannishō*：
A Fragment of Buddhists' Peace Movements in Cold War Japan

小美濃　彰

Abstract

Tannishō, recognized as a segment of the scriptures of Jodo Shinshu Buddhism, has been passed down through diverse historical periods and societal contexts. In which eras and societal circumstances have individuals sought Shinran's teachings as documented in *Tannishō*? With this perspective in mind, this paper will concentrate on the Tannishō Study Group, a community of individuals exploring both Buddhist and Christian ideologies, which has been active for nearly 30 years since 1960. Furthermore, the paper will discuss the book published by the group the following year, titlee as *Introduction to Tannishō: Shinran and the Contemporary World*.

Introduction to the Tannishō was crafted against the backdrop of the Cold War, characterized by heightened awareness of military conflicts and the looming threat of full-scale nuclear war. The book draws upon Shinran's teachings to conceptualize an alternative world order rooted in Eastern Buddhist thought. Within its pages, the Tannishō Study Group seems to emphasize the exploration of perspectives aimed at transcending the Cold War international order that emerged after World War II, leveraging Eastern thought, rather than presenting a strict doctrinal interpretation of *Tannishō*. The contents of the book surprise readers, given its title "*Introduction to Tannishō*," as it simultaneously introduces Shinran's teachings within a distinctive context in a way of appropriation.

Due to the author's limited expertise in Buddhist history, accurately situating the Tannishō Study Group and "*Introduction to Tannishō*" within the existing body of research on Shin Buddhism and *Tannishō* interpretation poses a formidable challenge. Nonetheless, reconstructing the context in which Tannishō Study Group was established and *Introduction to the Tannishō* was composed appears feasible. Through this research, it may be possible to shed light on a realm that has been overlooked in the gap between studies of Buddhist history and the history of social movements. The aim of this research note is to illuminate the diverse range of contributors of the intellectual movement that has gradually taken shape through religious thought, encompassing Buddhism.

Keywords

歎異抄研究会、在家仏教、サービス・シビル・インターナショナル、一粒会

Tannnishō Study Group, Lay Buddhism, Service Civil International, Ichiryū Kai, India

はじめに

『歎異抄』を読むという体験はそれぞれの読み手をつうじて、様々な思想的かつ言説的な事象を生み出した。それらを思想史的に把握しようとした成果が子安宣邦による『歎異抄の近代』(白澤社、2014年)である。『歎異抄』が宗門の内部にとどまらず外部でも読まれる書物となったことに、清沢満之を師とする暁烏敏の講話や著作が果たした役割は大きい。

親鸞と門弟との間になされた〈信〉の教えの授受そのものである『歎異抄』が、そこから近現代の日本思想史においてどのように反復されてきたのか。暁烏敏にはじまり滝沢克己をも射程に含む広角的な視野に浮かぶ「先人の読みの痕跡を辿る」ことで、子安は『歎異抄』の読みの可能性を現代の教学的外部者に改めてひらいた(1)。

『歎異抄』の教学的解釈を追求するよりも、それがどのように読まれたのかを探求することに関心を向けている点で、本稿の問題意識もそこに接している。これから取りあげようとしているのは、1960年からおよそ30年にわたって活動を続けていた仏教者たちのグループ「歎異抄研究会」による集合的な読解の成果として上梓された『歎異抄入門:親鸞と現代』(社会思想研究会出版部、1961年)である。本稿は同書およびその母体となった研究会について現時点で知り得たことの中間報告にとどまるものだが、歎異抄研究会と『歎異抄入門』が生み出された社会的文脈を朧気ながらも浮かびあがらせるように心がけた。そこには戦後日本における宗教者たちによる平和運動との密接な関係性があるように思われたからである(2)。

この『歎異抄入門』という書物は冷戦下における軍事衝突や全面核戦争への危機感に満ちている。そのなかで『歎異抄』は、東洋世界の仏教思想を基礎にして新たな世界秩序を構想すべくひらかれている。第二次世界大戦後の冷戦秩序を東洋思想によって克服するために親鸞の言葉が聞かれているのだと言っても過言ではない。それは読者の意表を突くかたちで親鸞思想を領有した『歎異抄』の特異な入門書ながら、当時においては多くの読者を獲得したのであった。

真宗学および『歎異抄』の解釈をめぐる研究蓄積のうちに歎異抄研究会や『歎異抄入門』を位置づけることは、仏教史や教学を専門としない筆者に可能な作業ではない。しかし、歎異抄研究会の発足を経て『歎異抄入門』が生み出された経緯をたどりなおすことはできる。あらかじめ述べておくと筆者の研究課題のひとつは、後述(「SCIと一粒会」)のとおり『歎異抄入門』のなかで紹介されている梶大介という社会運動家が、どのような思想的平面に立っていたのかを探ることにある(3)。それゆえ『歎異抄入門』に梶大介が現れたことの意味を考えるために、同書刊行当時における歎異抄研究会のありようを捉えることが必要になる。

とはいえ、本稿では記述の中心として梶大介に多くの紙幅をあてるのでなく、歎異抄研究会や『歎異抄入門』にかかわる事柄をできるだけ多く示すよう試みた。その内容が、宗教

(1)　子安宣邦『歎異抄の近代』白澤社、2014年。序章「なぜ「歎異抄の近代」なのか」において、その方法論は同『思想史家が読む論語:「学び」の復権』(岩波書店、2010年)から持続するものだと説明されている。

(2)　大谷栄一(編)『戦後日本の宗教者平和運動』ナカニシヤ出版、2021年。とくに、永岡崇「大本・人類愛善会:世界連邦運動から安保闘争へ」(pp.183-210)は大本教に主眼をおきながら宗教界における平和運動史をたどりつつ、戦後日本の宗教界と世界連邦運動との関係性を明確に示している。本稿では十分に展開できなかったが、世界連邦構想は歎異抄研究会および『歎異抄入門』においても重要な参照項となっている。

(3)　拙稿「地域をつくる実践としての保育:梶満里の保育運動とその背景」(『日本語・日本学研究』第10号、東京外国語大学国際日本研究センター、2020年、pp.1-22)、同「梶大介の1968年」(大野光明・酒井隆史・仲田教人〔編〕『1968年論』以文社、近刊)などで梶大介を取りあげてきた。しかし、いずれも歎異抄研究会との関係あるいは宗教者たちの平和運動との関係を明確に意識することができるようになる以前に執筆したものである。

者たちのあいだで形成されていた戦後日本の平和運動のネットワークに深くかかわるものと思われたためである。このことを念頭におきながら、以下の部分では第1節「『歎異抄入門:親鸞と現代』の人脈的背景」、第2節「『歎異抄入門:親鸞と現代』の内容的特質」、第3節「『歎異抄入門』と歎異抄研究会のその後」という構成をとる。これにより、戦後日本における宗教者平和運動の広い裾野にまで光を向けることができればと考えている。

1.『歎異抄入門:親鸞と現代』の人脈的背景

1-1. 歎異抄研究会と在家仏教協会

『歎異抄入門:親鸞と現代』の「あとがき」によると、同書の出版計画が持ちあがったのは1960年3月のことだとされている。歎異抄研究会の発足に関する明確な記述は見当たらないが、おそらく書籍制作の計画にともなう共同研究の場として同時期に発足したものと思われる。その背景にあった問題意識を知るためには、長いながらもここに「あとがき」の一部を引用しておくべきだろう。

> 戦争が終わってから一五年の歳月がたち、「もはや戦後ではない。」という言葉がジャーナリズムを賑わしていた頃であったが、人々の外見上豊かな生活は、この言葉を肯定するに十分なようであった。しかしその後に起こったいろいろの社会的事件が端的に示しているように、人々の精神は落ち着きを失い、本当の意味での安定さを欠いていた。そして人々が共通の精神的なつながりによって結ばれることはきわめて少なく、皆がバラバラに各自の孤独な領域にたてこもっているような感じが強かった。このような生活面の華やかさと、精神面の荒廃とのきわだった対照。
>
> 「いかに生くべきか？」の課題はこうした社会の現実に直面している私どもにとって、大きくかつ重いものであった。
>
> けっきょく「いかに生くべきか？」の課題に対する私どものささやかな、しかし真剣な追求が私どもを「歎異抄」に近づけさせたものといえるだろう。したがって私どもは、「歎異抄」を読みながら、それが単に字句の解釈に終わることは極力さけ、それを通して親鸞の思想全体、むしろその人間像全体を学び取ろうとした。そして親鸞について議論を進め、それらの言葉を現在の社会的な問題にかかわらせながら、討議を進める形をとった。また現代に生きている親鸞の思想に、中間に何の介在物もおかずじかに触れようとの態度であった。(4)

経済発展による生活水準の上昇と精神的状況の変容。『歎異抄』をとりあげた共同の討議は、一言にまとめるならば、こうした問題意識のもとで親鸞の思想を現代社会にひらくべく開始された。そのなかで模索されていたのは、信心の獲得という実存的かつ単独的な経験に向かって『歎異抄』を読むことではなく、『歎異抄』を読むという体験を現代社会でいか

(4)　歎異抄研究会『歎異抄入門:親鸞と現代』社会思想研究会出版部、1960年、p.270。

に他者との間にひらくことができるかということでもあった。それは共同研究の方式が選択されたことについての「個人色の強いといわれる宗教の面でも一つの新しい共同研究を打ち出して見ようという野心めいた気持ちがあった」(5)といった述懐によって示唆されている。

その共同的な作業は、執筆担当者から提出された草稿に研究会参加者が検討と推敲を重ねていくというかたち進められた。研究会そのものの詳細な様子を知ることはできないが、『歎異抄入門』末尾には同書執筆に向けた討議参加者の一覧が記されている。これは先にみた問題意識がどのような人物たちによって抱かれ共有されていたのかを知る重要な手がかりであり、本稿においては〔付表1〕として転載した。その内容をここで少しばかり掘り下げておきたい。

この一覧によれば、歎異抄研究会は合同酒精株式会社、日本銀行、大学(東京大学、早稲田大学)、在家仏教協会に所属する参加者から構成されていることがわかる。ちなみに当時の研究会に関する問い合わせ先は在家仏教協会内におかれていたが、そこには在家仏教協会から二橋進が参加していたことによる便宜的な措置というだけにとどまらない関係性がある。

その名称のとおり在家者を中心とする在家仏教協会は、1952年に在家仏教会として発足したのち、1954年に一般社団法人在家仏教協会へと改組された。その初代会長を務めた協和発酵工業株式会社(現在の協和キリン株式会社)元代表取締役社長の加藤辨三郎は、同会の発足以前から月刊誌『大法輪』(6)で増谷文雄や渡辺照宏といった仏教学者らによって主唱されていた在家仏教に対し、寺も僧侶も排斥するものとして共感を抱いていたわけではなかった。ゆえに、はじめは『大法輪』を中心に呼びかけられた在家仏教運動への参加を加藤は拒んでいた。それでも最終的には、仏教を説くということをめぐっては在家者と出家者との共存および協力が必要だという立場をとる加藤を受け容れるかたちで、在家仏教協会は発足したのであった(7)。

横道にそれるようではあるが、歎異抄研究会参加者の構成にも関連する加藤の足どりを、自伝『いのち尊し』(在家佛教協会、2002年)にもとづき確認しておきたい。加藤は1923年に京都帝国大学を卒業後、四方合名会社(1925年に株式会社宝酒造へ改組)に入社。1937年には戦時統制経済下で設立された宝酒造・大日本酒類醸造・合同酒精の共同経営機構である協和会に出向し、その研究部門を担う協和化学研究所で研究部長を務めている。また、協和会は購買部を法人化した日本共商株式会社(1939年に協和化学興業株式会社へ改組)を設立しており、その社長を合同酒精社長の野口喜一郎が兼任していた。

この野口について加藤自身は「仏教と“縁”をもちはじめたのは、野口社長のもとで仕事

(5)　同前、p.272。

(6)　月刊誌『大法輪』は仏教書の取扱いを中心とする出版社である大法輪閣が1934年から刊行していたもので、仏教研究者らによる在家仏教運動についての議論も盛んに展開していた。同誌は長きにわたって多くの仏教者たちによって共有された超宗派的な仏教雑誌であったが、2020年7月号を発行してから現在に至るまで休刊状態にある。

(7)　加藤辨三郎『いのち尊し:加藤辨三郎著作集』在家佛教協会、2002年、pp.96-103。

をするようになってから」だと語っている。加藤が「熱心な仏教信者」と仰ぐ野口は「会社へ、ときには自宅へ、高名なお坊さんを招いて、仏教の話を社員に聞かせられていた」という。この聞法の場を加藤は「野口教室」と呼び、そこで浄土真宗本願寺派僧侶の松原致遠にめぐりあったことが仏教に向き合うきっかけになったと回想している。加藤いわく「野口教室」は、いつまでのことかは定かでなくとも戦後も続けられていたらしい(8)。歎異抄研究会に3名の参加者を送り出した合同酒精には、それだけの仏教的な素地が存在していた。

そこから推察するに、歎異抄研究会と在家仏教協会との関係は、後者を所属先とする二橋進が前者に参加していたというだけのものではない。在家仏教協会あるいは在家仏教の運動全体のなかに歎異抄研究会がどう位置づくかは現時点で不明だが、その一部を担っていたものと考えることが妥当なのではないだろうか。また、歎異抄研究会は親鸞への深い信仰を生活に生かしていると思われる人々へのアンケート調査を実施しており、それも在家仏教協会の会員ネットワークをもとに行なわれたものではないかと考えられるが、定かではない。参考のために〔付表2〕としてアンケート回答者の氏名・年齢・肩書を一覧にした。

歎異抄研究会に結集した面々について、合同酒精については以上のような背景を把握することができたが、それ以外についてはどうだろうか。さらに検討を進めるべく、つぎに、当時は日本銀行から参加していた井上信一に焦点をあててみたい。井上はのちに宮崎銀行に移って頭取も務めた人物である。

1-2. 歎異抄研究会のキーパーソン

歎異抄研究会が発足する以前から、井上信一は在家仏教協会の月刊誌『在家仏教』への寄稿を行なうなど、同会への積極的な参加を続けていた。同誌は第5号(1954年8月号)から、仏典の言葉や先人の行状に触れることによってひらかれた様々な考えを交わす、「仏祖のことば」ならびに「先徳のあゆみ」を誌上に設けており(9)、井上は第28号(1956年7月)の「仏祖のことば」で「誓願」と題した一文を発表していた。『歎異抄』冒頭部分の「弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて」からはじまる第一条を取り上げたその文章には、親鸞によって語られた信心獲得の経験を生涯にわたって追求しようとする井上の姿勢が示されている(10)。

その一方、銀行員としての職業生活を送る井上は、経済活動と仏教思想をどのように重ね合わせることができるのかという問題意識を抱いていた。この問題をライフワークにした探究を続けた結果として、やがて井上は日本における仏教経済学の提唱者として知られるようになる。仏教経済学といえばE・F・シューマッハーが1973年に発表した*Small is Beautiful: A Study of Economics As If People Mattered*がよく知られており、もちろん井上自身もシューマッハーの議論に依拠しながら自身の仏教経済学を組み立てている。しか

(8) 同前、pp.88-96。

(9) 在家仏教協会『在家仏教』第5号、1954年8月。

(10) 井上信一「誓願」、在家仏教協会『在家仏教』第28号、1956年7月、p.8.

しながら、大乗仏教の理想にあたる「自利利他円満」を基本理念とする仏教経済学の構築は、親鸞の言葉に耳を傾けながら積みかさねた思索に根をもつ、井上固有の取り組みでもあった(11)。

駒澤大学仏教経済研究所の研究紀要『佛教経済研究』第30号(2001年5月)には、その前年に逝去した井上への追悼文集「井上信一先生を偲んで」が掲載されている。ここに収められた追悼文をみると井上は、具体的な時期やその様子こそ不明だが、日本銀行の職場において『歎異抄』を説くことのできる場をひらいていたようである。宮崎銀行在職中にも思索を続けて『歎異抄:二つの気付き』(樹心社、1989年)や『地球を救う経済学』(すずき出版、1994年)といった成果を生んでいる。その他にも井上は、1995年4月から1996年3月までの一年間にわたって、『歎異抄をよむ』という番組をNHKラジオ第二放送で担当するなど幅広い活動を展開していた(12)。

歎異抄研究会への日本銀行からの参加者が他に4名もいたということは、以上のような井上の活動と大いに関係しているものと考えられる。また、〔付表1〕ではさらに学部生・大学院生の参加も確認でき、このことに関して、のちに井上は「今では錚々たる仏教学者で当時はまだ学生あがりだった何人かをかたらって安保騒動のさ中、歎異抄の共同討議を続け、それを『歎異抄入門』(教養文庫)にまとめました」(13)と振り返っている。

その通り歎異抄研究会に加わっていた学生たちの多くは、のちに浄土真宗本願寺派の宗務総長となる石上智康や、武蔵野女子大学で教育にたずさわりながらその死を惜しまれた花山勝友をはじめ、僧侶や仏教学者としての活躍を果たしている。坂東性純も浄土真宗大谷派の僧侶でありつつ多くの著述を行ない、鈴木大拙の*Mysticism, Christian and Buddhist*の日本語版訳者の一人としても知られている(14)。中山久美子についてはその後の足跡をたどることができないのだが、早稲田大学大学院在籍中に真宗教団史研究に取り組んでいた記録が残されている(15)。

さらには佐伯真光のように高野山真言宗の僧侶となる人物も含まれていたし、当時唯一の学部生として参加していた小川修はのちに聖書神学へと進む。その研究はパウロ書簡に

---

(11) 井上が構想した仏教経済学は『地球を救う経済学:仏教からの提言』(すずき出版、1994年)という成果にまとめられている。井上が著述活動を本格的に開始したのは、尖鋭化する米ソ対立のもと朝鮮戦争をはじめとする軍事衝突がアジアにも展開された1950年代のことであった。ソ連崩壊後に上梓された『地球を救う経済学』は、社会主義陣営に対する「勝利」を謳う自由主義陣営への批判を含んでいる。

なお井上については『佛教経済研究』第30号(駒澤大学仏教経済研究所、2001年)に掲載された追悼文集「井上信一先生を偲んで」(pp.213-241)に掲載された以下の記事を参照した。武井昭「日本のシューマッハー・井上信一先生を偲んで」、安原和雄「仏教経済学の今日的意義―井上信一著『地球を救う経済学』を読んで―」、辻井清吾「井上信一様との思い出」。

(12) 辻井、同前、pp.235-241。井上は『歎異抄入門』と同時期の著書『サラリーマンとその師』(普通社、1961年)のなかで、1950年頃から「木蔭会」という同僚との読書会を日本銀行の職場にひらいていたと述べている。

(13) 井上信一『歎異抄:二つの気付き』樹心社、1989年、pp.252-258。

(14) 鈴木大拙(著)坂東性純・清水守拙(訳)『神秘主義;キリスト教と仏教』岩波書店、2004年。

(15) 「真宗教団における番頭の変遷」という研究発表要旨が『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第7号(早稲田大学大学院文学研究科、1961年12月、pp.238-239)に掲載されている。

主眼をおくものでありながら、浄土真宗の念仏者・中村久子という存在とのめぐりあいを通じてキリスト者・座古愛子を知り、浄土教とキリスト教を照らし合わせながら思索を深めるものであった(16)。

これだけの参加者を呼び寄せることができたのは、おそらく、井上が在家仏教協会や職場での活動以外に精力的な著述を行なっていたことにも関係している。単行本として井上が手がけた最初のものと思われるのは、インド初代首相ネルーの講演録を翻訳した『ネール:自由と平和への道』(社会思想研究会出版部、1952年)であり、5年後に単著となる『現代に生きる親鸞:青年の歎異抄』(実業之世界社、1957年)を上梓している。とりわけ後者は、同内容の英語版原稿を手にしたアーノルド・トインビーがイギリスでの刊行協力を申し出た書簡のほか、仏教学者の江部鴨村、おなじく仏教学者として立正大学で英文学の教鞭を取ったジョン・ブリンクリー、そして版元の野依秀市による序文を所載して世に出された注目作だった(17)。

個別宗教による真理の相対化を克服すべく現代において『歎異抄』を読みなおすという『現代に生きる親鸞』のモチーフは、歎異抄研究会による『歎異抄入門』が目標とするところにも重なるものがある。井上信一は当時の在家仏教運動における優れた組織者であると同時に活発な議論の提起者であり、歎異抄研究会においても中心的な役割を果たしていたのであろうことがうかがえる。

では、在家仏教運動とのかかわりをおそらく基盤にしながら、ここまでに見たような多彩な人材からなる歎異抄研究会は、井上信一を中心としながらどのような『歎異抄』の読みを提示したのだろうか。

2.『歎異抄入門:親鸞と現代』の内容的特質

2-1. 基本的な構成と内容

よく知られているように『歎異抄』とは、浄土真宗の宗祖である親鸞の滅後、主として関東の門弟の間に異議が生じた状況を歎いた著者が、親鸞よりうけた口伝にもとづき書きあげたものである。本文の全18ヶ条のうち前半10ヶ条は親鸞の法語を収め、後半8ヶ条では著者による悲歎と異議への反駁が記されている(18)。『歎異抄入門』で重点的に取扱われているのは前半10ヶ条であり、後半の8ヶ条については原文を転写したものが収録されている。

まず『歎異抄入門』の各章は、「上篇」とも呼ばれる前半部分の各条々をひとつずつ取りあげ、引用された原文を意訳し、その後で読者のために解釈を敷衍していくという構成になっ

(16) 小川修「十字架につけられし女:座古愛子覚書」、『ルーテル学院研究紀要:テオロギア・ディアコニア:ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校紀要』第39号、ルーテル学院大学、2006年3月、pp.21-31。小川修『パウロ書簡講義録』全10巻、リトン、2011-2022年。

(17) 井上信一『現代に生きる親鸞:青年の歎異抄』実業之世界社、1957年、pp.i-xi。

(18) 厳密には第10条にある「「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそうらいき」(真宗聖典編纂委員会〔編〕『真宗聖典』東本願寺出版、1978年、p.630)までが親鸞の法語で、続く「そもそもかのご在生のむかし」(同前)以降は著者自身の言葉からなる後半部分すなわち「歎異」の序にあたると見られている。

ている。そこでは逐語的な現代語訳に照らした解釈の心がけよりも、まず意訳によって歎異抄研究会の「読み」を端的に示すという方法が際立っている。参考のために第2章「思いたつ心の起こる時」から第一条の「本文」と「意訳」を引用してみよう。表1では本文と意訳の対応箇所が分かりやすいよう便宜的に一文ずつ分割した。

表 1 :『歎異抄』本文の第 1 条と歎異抄研究会による意訳（下線は筆者による）

	本文	意訳
①	弥陀の誓願不思議にたすけまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつこころのをこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。	この宇宙に不思議にも存すると思われる大慈悲を受けいれることによってのみ人間の救済は可能なのだと納得して、この慈悲をナムアミダブツと仰ぐように心が転回したその瞬間、ただちに私どもの救済は完成するのです。
②	弥陀の本願には、老少善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。	この慈悲のはたらきは年や道徳を条件とせず、ただ必要なのはすなおに受けとる態度だけであります。
③	そのゆへは、罪悪深重・煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。	なぜなら仏の慈悲の本質はまさに罪深く悩み多い私のような者にこそ向けられていると思われるからです。
④	しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。	かくてこの大慈悲をただ受けいれさえすれば他の徳目はとくに必要ありません、人間の心の純粋さにはナムアミダブツと受け入れる時以上のものはないのですから。
⑤	悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへにと、云々。	また過去の不道徳も気にすることはありません。この慈悲はこれら一切の罪とがを乗り越えてわれらに注がれているのですから。

表1に示したように、『歎異抄入門』では『歎異抄』本文が歎異抄研究会による意訳によって、次々と読みひらかれていく。そこでは逐語的かつ辞書的な釈義が補われているわけでもなく、仏教固有の概念をめぐる細かな注釈をできるかぎり退けながら、解釈を示しているようにも見える。これは例えば、下線を付した①「受けいれることによってのみ」、②「すなおに受けとる態度だけ」、③「向けられている」、④「ただ受けいれさえすれば」、⑤「われらに注がれている」といった意訳を通じ、親鸞の言葉から阿弥陀仏から衆生にかけられた慈悲の絶対性と不可逆性というニュアンスを端的に掴みだして強調する効果を生んでいる。

こうした手順をふまえて、『歎異抄入門』の本文において歎異抄研究会による意訳がパレフレーズされていく。それはひとつの到達点としての意訳にいたるまでの足跡を明かすような作業であり、たとえば慈悲の絶対性と不可逆性については、大正期に絶大な親鸞ブームを巻き起こした倉田百三が『生活と一枚の宗教』(1931年)で語っている「うしろをみる眼」が参照されている。

一時ながら社会主義に共鳴していた倉田は、病身ゆえに労働もままならぬ自分自身の病床生活は許されるのかという懊悩にとらわれた末、自分が生きているのは何らかの資格があるからということでなく、あらゆる生命が絶対的な力によって平等に背後から支えられ

いるからなのだという考えに到達している[19]。

大正期に戯曲『出家とその弟子』(1916年)を発表して社会的に親鸞思想を膾炙させた倉田百三を通じて導入される、親鸞の法語や浄土真宗に固有の語法から離れた詩的ながらも日常言語的な表現は、仏教における慈悲や我執といったキーワードをキリスト教に接合させる媒介として活用されている。「『うしろを見る目』が開け、あるいは慈愛に目ざめることのすばらしさは、釈尊が、そしておそらくキリスト教が中心課題とした我執が崩れ去るところにあると思います」[20]といった具合に、歎異抄の本文からいったん離れたところから自由に様々な思想や概念へと架橋するという動きが、本書では繰り返されていく。

また『歎異抄入門』は、親鸞の教えとキリスト教の比較自体は目新しくなくとも、『歎異抄』本文を取りあげた第2章から第11章までの各章が必ず『新約聖書』の引用で閉じられており、『新約聖書』を通じて親鸞思想を理解するための経路が意識的に設けられている。それら各章ごとに引用された『新約聖書』の記述は、歎異抄研究会が『歎異抄』と『新約聖書』をどのように重ね合わせているのかを端的に示しており、この第2章においては「ローマの信徒への手紙」3章28節から「人が義とされるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるのである」という一節が引用されている。プロテスタンティズムの信仰義認論が「ただ信心を用とすべし」という親鸞の教えに重ね合わされていることが分かる。

各章に引用されている歎異抄と新約聖書の組み合わせについての評価は、ここで論ずる紙幅をもたないだけでなく筆者のなしうることでもないが、参考のため〔付表3〕に対照表を掲載した。『歎異抄』に語られた親鸞の言葉を『新約聖書』の言葉に重ね合わせるということは、本書において中心的な課題のひとつでもあるが、そのことによって提示される『歎異抄』を読むことの意義は何か。次項では歎異抄研究会のねらいがどこにあるのかを、もう少し具体的に検討してみたい。

2-2. インドという参照点

『歎異抄入門』のごく基本的な構成と内容だけでは『歎異抄』への入門書として、さほど注目に値するものとは思われないかもしれない。ただ、本書の大きな特徴はまったく別のところにもある。それは『歎異抄入門』のなかで繰り返されるインドへの言及である。ただし、それは仏典にもとづいて原点へと回帰していくというような志向ではない。歎異抄研究会によって参照されているのはマハトマ・ガンディーをはじめナビンドラナート・タゴール、ジャワハルラール・ネルー、ビノーバ・バーベといったインド独立運動の歴史にかかわる思想家

(19) 倉田百三「生活と一枚の宗教」、『世界教養全集』第10巻、平凡社、1963年.「後ろを見る目」は「法的自然主義の生活へ」(pp.519-521)という節のなかで説かれている。風が凧を空へと押し揚げていくように「私」というものを生かす力があり、またそうに生かされているあらゆるものは「法的に善」なのだとして、生命の絶対的な肯定が導き出される。1931年の満州事変以降、このような倉田の宗教的な感性は近代天皇制に含まれる神話的非合理性へと重なっていった(百川敬仁「日本主義者・倉田百三」、鈴木貞美(編)『大正生命主義と現代』河出書房新社、1995年、pp.242-255)。

(20) 歎異抄研究会、前掲、p.34。

たちであり、仏教徒ですらない。

『歎異抄入門』のなかでインドについての言及が集中しているのは第7章「弟子ひとりももたず」である。『歎異抄』の本文に即して言えば「親鸞は弟子一人ももたずそうろう。そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀の御もよおしにあずかって、念仏もうしそうろうひとを、わが弟子ともうすこと、きわめたる荒涼のことなり」(21)という一節を取りあげた部分である。念仏は阿弥陀仏の本願力によって、人間の有限性を超えた絶対他力によってもよおされる。だからこそ弟子を争うようなことはひどく荒んだことなのだという。

しかしながら、それに通ずる「みずからの優越を主張する心」や「他と張りあう気持ち」というところでいえば、同様のことが「単に昔の宗教界のことではなく、私どもの身近に日常起こり、そして平等と平和を破って」いる。歎異抄研究会はそのような自己意識の存在を意味する我執に焦点をあて、「弟子一人ももたずそうろう」という親鸞の言葉は「これら人間のあさましい我執からの絶縁」なのであり、それは優劣のような比較衡量や支配／被支配を離れた「人間としての平等」を自覚することなのだと説いている。まずはここで、その「人間としての平等」を実践し、あらゆる宗教間の協力や被差別カーストへの差別撤廃を主張した思想家としてガンジーが登場する(22)。

それだけではない。続く部分で「政治学者は、現実の政治の本質を権力であり支配することだと説いています。また政治の特色は敵と味方とにわけることだそうです」(23)と述べ、カール・シュミットの「友・敵」理論を想起させる。現実の政治経済的な利害をめぐっては、消極的にも「敵味方があるのも仕方のないこと」と述べながら、そこで必要なものは利害を争う「友・敵」の区別を超える原理なのだとする。そのうえで参照されるのが、寛容の精神を政治原理としたアショーカ王を記念する法輪を国旗にあしらったインドであり、また初代首相ネルーの掲げた非同盟主義なのである(24)。

当時におけるインドとパキスタンや中国との関係を考慮すれば楽観的にも思われるが、冷戦体制のなかでアジア・アフリカ地域の非同盟諸国にかけられた新たな国際秩序形成への期待がいかに大きいものであったかが分かる。平和十原則を宣言したバンドン会議の強いインパクトが持続する当時において、歎異抄研究会はインドをはじめとする非同盟諸国から提起される新たな世界秩序の構想実現にはたらく思想的な力を親鸞から取り出そうと模索していた。

---

(21) 真宗聖典編纂委員会、前掲、p.628。

(22) 歎異抄研究会、前掲、p.116-117。しかしながら、被差別カーストに対する差別の撤廃を主張したガンジーがカースト制度そのものが持つ意義を必ずしも否定していたわけではないことなど、その評価を単一的に下すことはできない。加藤正彦「ガンディーと被差別カーストの解放」、国際身分制研究会(編)『第3期国際身分制研究会報告書』社団法人部落解放・人権研究所、2003年。なお、同論文はインターネット上に公開されたものを参照した。https://blhrri.org/old/kenkyu/project/mibun/mibun_h/mibun_h_0006.htm（最終閲覧日：2023年9月29日）

(23) 歎異抄研究会、前掲、p.118.

(24) 同前、p.118-119。

第1章「親鸞と歎異抄」にある「現代は新しい宗教を求めている」という見出しのついた一節で、核の平和利用という論調への同調を明らかにしつつ、東洋思想を読み直す意義を以下のように説いている。

> 二つの世界が対立し、その結果として久しくばかにされ無視されてきた中間地帯アジアには米ソ両巨頭が訪れるほか、たくさんの西欧人が研究の歩をむけるようになりました。すでに埋もれていた文化とともにいくつかの東洋の古典も西欧人に研究されはじめました。ドイツのハイデッガーという実存主義の哲学者にも、スイスの深層心理学者ユングにも東洋思想がはっきりと表れていることは有名な事実です。近代の物質主義や対立主義から比較的自由であった東洋の思想が、第二のルネッサンスを呼び起こす日も案外近いかもしれません。この自由をよりよくこなした陣営が、第二の産業革命といわれる原子力とオートメーションを使いこなし、来るべき世界の指導者となるであろうことは、ルネッサンス後のヨーロッパのたどったところから想像されるでしょう。親鸞の中心思想が、自然法爾という高い自由であったことは九章に述べますが、私どもは右のような希望と誇りのもとに、アジアの古典の一つを味わい、またできるなら世界の人に紹介しようではありませんか。(25)

東洋が指導的地位に立って冷戦下の世界的かつ先鋭的な対立状況に代わる「来るべき世界」をひらいていくという展望のもと取り上げられる『歎異抄』。このような位置づけ方は「北方民族的性格も南方民族的性格も、インド的直覚力もシナ的実証心理も、みな共に具有」すると述べた鈴木大拙の日本仏教認識を思い起こさせるものでもある。仏教の精神がインドにおいて他宗教のなかにも生き続けており、「ガンディの如きは、実にこの精神を生きている一人である」と述べたのも鈴木大拙であった(26)。

だとして自然法爾を親鸞思想の中心に位置づける歎異抄研究会は、それをどのような形でインドに接続していくのだろうか。親鸞が説いた自然法爾という境地について、第9章「非行非善」では道元の『正法眼蔵』から「仏法をならふというは自己をならふなり、自己をならふといふは自己を忘るるなり、自己を忘るるは万法に証せらるるなり」という一節が引かれている。それを親鸞思想の解釈へと重ね合わせようと進みはじめる『歎異抄入門』の記述を引いておこう。

> つまり、仏法というがそれは結局自分を発見することだ、ところが本当の発見というのは自分にとらわれる気持ちを忘れることだ、それはその時その場を精いっぱい「ナムアミダブツ申されるように」生きて、自分がその仕事なり環境なりにとけこむこと、

(25) 同前、p.16-17。

(26) 鈴木大拙『日本的霊性』岩波書店、1972年、p.75。

自己を包む世界と自分と一体となった生活を営んでいくことだ、といっている[27]

禅師として道元が説いたことと絶対他力への信心を説いた親鸞が説いたこと、すなわち「自分にとらわれる気持ちを忘れる」という道元の教えと、自力を離れるという親鸞の教えは本質を共有するものとして解釈されている。ここでは親鸞と道元、あるいは他力教と自力教が重ね合わされている。『歎異抄入門』には、このように他力教と自力教の区別を相対化するような論理が、ガンディーをはじめとするインドの思想家たちに親鸞思想を結びつけるための、基本的な手立てとなっているように思われるところがある。

すでに「弟子一人ももたずそうろう」という言葉は親鸞による我執との絶縁宣言なのだという第7章の解釈に触れた。『歎異抄入門』はそのうえで我執が権力に対して発揮されることをふまえ、ジョン・アクトンの格言「権力は腐敗する。絶対的(独裁的)権力は絶対的に腐敗する」を引く。さらに、そのような絶対的な権力にもとづく政治を「権力政治」、それを斥けた政治を「道徳政治」と区分する。そこにタゴールから引かれた「政治と商業の組織すなわち別名を国家と称するものが、高尚な社会生活を犠牲にして全権をにぎるときは、人類にとって悪い時代である」という権力観が重ねられ、我執にとらわれた権力の排除が目標として掲げられる[28]。

さらにガンディーによる断食、ビノーバ・バーベによる土地の解放と分配(＝ブーダン運動)にも言及しつつ、道徳的であることは「ガンジーの断食が示すように、まず自分に克つこと」[29]だと意味づけている。信心は自力が捨てられたところで生じるのだという親鸞の教えを基礎とするこの入門書は、自力的な克己にもとづく実践へとたどり着いている。ただし、こうした行論の土台に既述したような親鸞と道元を重ね合わせた理解があることをふまえれば、決して不思議なことではない

同様に考えることが可能な箇所が続きにもある。そこでは『教行信証』(真仏土巻)で親鸞が引いた曇鸞『論註』から「願もって力を成ず、力もって願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力・願あい府うて畢竟じて差わず。かるがゆえに成就と曰う」[30]という一節が参照されている。これは「不虚作住持功徳」――阿弥陀仏の本願力への気付きを得たならば虚しく漏れることなく広大な功徳に満たされること――を説くものである。法蔵菩薩の立てた誓願により阿弥陀仏の不可思議な力が成り、かつ阿弥陀仏の力により誓願が就げられるという双方の一致。そこにおいて阿弥陀仏の本願力が成就しているのだという内容である。

---

(27) 歎異抄研究会、前掲、p.168。

(28) 同前、pp.120-122。タゴールの引用は1916年～1917年に日本とアメリカで行なわれた講演をもとにした「ナショナリズム」からのもの。『タゴール著作集』第8巻(第三文明社、1981年)では「国家」の箇所が「『国民』」とされており、原語nationの日本語訳としては後者が適切であろう。とはいえ「『国民』とは、全人民の私欲が組織されたものであり、最も人間味にかけ、最も精神的でないものである」(p.326)という一節をふまえれば、我執という概念に照らしてタゴールが引用されていること自体に過誤はない。

(29) 歎異抄研究会、前掲、p.122。

(30) 真宗聖典編纂委員会、前掲、p.316。

『歎異抄入門』ではこれをうけて「仏の人類救済の願いは現実の力となるべきだし、力というものは、仏の願いに裏づけされねば意味がない。その両者が正しく一致した状態である、というふうにでも解すべきでしょうか」と記している。願と力が相かなうためには「仏の願いにめざめた人々のはたらきが必要です」と続け、さらには「私どもを奥底から動かしているものは『如来より賜りたる信心』なのですから、如来の願われるところに向かって、それぞれの縁に従ってともになにごとかをなすべきだと思います」[(31)]という主張が提示される。ここで投げかけられているのは、我執にとらわれず、しかし何事かをなさねばならないという難題である。『歎異抄入門』におけるガンジーやタゴール、ネルー、バーベといった思想家たちは、まさにその実践者として位置づけられている。

井上信一は『歎異抄入門』に先立って上梓した『現代に生きる親鸞』のなかで、インドを盟主とするアジア・アフリカの非同盟諸国を冷戦体制下の「真空地帯」とみなし、「強大化したアメリカとソ連の国家権力を修正することは殆ど不可能に見えるが、かかる強大権力の無意義であることを、この真空地帯で実証することが、国家権力否定の方向を推進する一番の捷径である」と述べていた[(32)]。井上はインド独立運動のなかで形成されてきた思想の可能性を親鸞思想との接合のうえで実現していくことを課題として抱いていたように思われる。

『歎異抄入門』においてインドが重要な参照点として位置づいていることや井上信一の思想的背景については、同時代における言説のありようや人物関係を含めてさらに検討を重ねていく必要がある。それでも、同書が親鸞思想の入門書としてどこに狙いを定めているのかということは、以上によっておおむね把握することができるのではないかと考えている。これは当時の世界において宗教思想がはたすべき役割とは何かを記した、歎異抄研究会による宣言文なのでもあった。

2-3. 一粒会とSCI

ここで『歎異抄入門』の内容について付けくわえておくべきことは、最後の第11章「無義をもて義とす」のなかで「私どもと縁の深い実践活動」として「一粒(いちりゅう)会というバタヤさんの『新しい村』」が紹介されていることであろう[(33)]。一粒会とは、梶大介および梶満里子という2人が中心となって東京都調布市で共同仕切場や保育所を運営していたバタヤの協同組合だが[(34)]、ここで言われるほどの縁の深さがなぜ歎異抄研究会との間にあった

(31) 歎異抄研究会、前掲、pp.123-124。

(32) 井上信一、前掲、1957年、p.13。

(33) 歎異抄研究会、前掲p.211。

(34) バタヤとは紙類や金属類の「ゴミ」を再生資源として拾い歩く「屑拾い」を生業とする労働者のことだが、その多くは仕切屋と呼ばれる資源回収業者の従属下にあった。バタヤについては星野朗・野中乾『バタヤ社会の研究』(蒼海出版、1973年)が、その生活と労働のありようを知る良い手引書となっている。また一粒会は、松居桃楼や北原怜子といった人物とともに良く知られている「蟻の街」と合わせて、秋山健二郎・森秀人・山下竹史(編)『現代日本の底辺　第1巻　最下層の人びと』(三一書房、1960年)でも紹介されている。

のか。その詳細は未だつかみきれていないところだが、ここでは断片的ながらも両者の関係性に近接する手がかりを挙げておきたい。

1960年7月29日付の『読売新聞』に日印親善にかかわるひとつの記事が掲載された。そこに記されているのは、既述のビノーバ・バーベが一粒会をインドに招待したということであり、それを受けた一粒会からは石橋清司と白井彰の2名がインドに渡航予定だと伝えられている。この記事には、1958年9月～12月に梶大介たちが東京から西日本を中心にかけての行脚で各地のバタヤと交流を行なったことに触れ、それが「海外に紹介され、とくにインドで大きな反響をよんだ」[35]とも書かれている。それがどのように海外へと伝わりインドで受容されたのかということを知るだけの手がかりはまだない。しかしながら、歎異抄研究会ないしその参加者が、インドとの接点をもちながら一粒会の活動について知ることのできたネットワークのなかにいたことは、ここから推測することができる。

一粒会に関連して視線を他に移してみると、同会が1961年1月から伊豆諸島の・新島において、防衛庁のミサイル試射上建設反対闘争による島民の分断にとり残されていく子どもたちのため、保育所づくりに取り組んでいたことが分かる。その活動にかかわる主要な記録を残した梶満里子によれば、新島での保育所づくりは梶大介が関係を通して一粒会との関係を有していたSCI(Service Civil International、国際市民奉仕団)日本支部との協力で進められた[36]。当時刊行されていた雑誌『新週刊』は、新島で活動するSCIの様子を取材して「『S・C・I』の旗印は、国境をこえ、むくわれることなく、ただひたすら世界の平和建設に労力奉仕をすることだ」と紹介している[37]。

『歎異抄入門』には一粒会だけでなくSCIの活動についても触れている箇所がある。第8章「無礙の一道」において、ガンジーが軍隊に代えるべく提唱したシャンティー・セーナー(平和部隊)を参照しながら「平和というものは、内に充実した道義的精神、内なる平和があってはじめて可能」[38]と述べた箇所に脚注を付し、以下のとおりSCIに言及している。

> このような考えはスイスのピエール・セレゾール(1875－1945)によってはじめられた運動、SCI(サービス・シビル・インターナショナル)によくあらわれている。それは平和を言葉によってでなく、奉仕的建設な労働と、そこでの相互理解とによって築こうとする国際的運動で、第一次大戦後ベルダンの再建作業に出発し、いまではユネスコの一組織として広く活動しており、わが国にもその支部ができた[39]。

引用でも触れられていることではあるが、SCIはスイスのピエール・セレゾールが良心的

(35) 「“貧民解放”の運動に:バタヤさん二人、インドへ親善の旅」、『読売新聞』1960年7月29日、東京、夕刊、p.6。
(36) 梶満里子『愛の砂に花ひらく』第二書房、1964年。
(37) 「ミサイルの島の“平和の楽園”」、『新週刊』第2巻第14号、新週刊社、1962年4月5日、pp.94-95。
(38) 歎異抄研究会、前掲、p.138。
(39) 同前、p.150。

兵役拒否者に対する処罰にかわる奉仕活動を提唱したことにはじまり、1920年に設立された。その活動は第一次世界大戦により荒廃したヨーロッパの再建作業にあたるワークキャンプを基礎としていた。このピエール・セレゾールはダニエル・アネットによる評伝の翻訳書『スイスの良心　ピエール・セレゾール』(アポロン社、1981年)を通じて日本にも紹介されており、高良とみがその翻訳をつとめていた(40)。

1962年3月に発行されたSCI日本支部の『SCI通信誌』によると、日本にSCI運動が導入されたのは、当時参議院議員だった高良が1950年に訪欧した際に運動を知ったことがきっかけとされている。その後、高良はSCIから依頼されたワークキャンプ参加者の推薦を務め、日本から国外のワークキャンプへの参加が開始された。日本国内においてはインドでの活動を経験した佐藤博厚が1958年に帰国してからのことで、日本で初めて実施されたワークキャンプの場所が、ミサイル試射場をめぐる闘争下にあった新島なのであった(41)。

さらに、同じく『通信誌』によると、1962年1月27日に開かれたSCI日本支部の総会で承認された名誉会員4名のなかに井上信一が含まれている(42)。歎異抄研究会に参加していた井上信一は、自身が翻訳をおこなった『ネール:自由と平和への道』に寄せた序文で、刊行のために翻訳権を得ることができたのは高良とみのおかげであったという謝辞を記しており、高良とみとの交流関係の存在が示されている。これをふまえ、SCI日本支部の名誉会員として承認されている井上信一と同一人物であるとみて、間違いないものと考えられる(43)。

ここに挙げた諸事実はそれぞれ断片にとどまるものだが、冷戦体制に代わる新たな国際秩序に向けた実践を親鸞思想にもとづき構想するという歎異抄研究会のプロジェクトに、なぜ一粒会というバタヤの協同組合が浮上しているのかを、その経緯の一端に触れているのではないかと思われる。一粒会および梶大介に関する諸資料においてインドが参照項として現われることの意味が不明瞭であったことを鑑みても(44)、この点にかかわる調査をさらに進めていく必要がある。

一粒会やSCIのような実践的な活動の紹介は、『歎異抄入門』において歎異抄研究会が目標とする実践のひとつとして位置づいている。そのような実践を社会に広げていくことが、冷戦下に構想された新たな世界の実現に向かう道と考えられていたとして、その実践が時代の文脈からまったく自由に展開していたわけでは決してない。そこにどのような可能性と限界があったのかを、社会運動史の文脈に照らして検討していかなければならないこと

(40) 高良とみの生涯と著作の詳細については、『高良とみのの生と著作』全8巻(ドメス出版、2002年)で知ることができる。高良とみについては、一粒会およびSCIの活動をめぐって予定している別稿において論じたい。

(41) サービス・シビル・インターナショナル日本本部『S・C・I通信誌』1962年3月1日号、pp.2-3。

(42) 同上、p.6。他には木下徹、馬場ゑよ、前田八郎が挙げられている。

(43) ジャワハルラール・ネルー(著)井上信一(訳)『ネルー:自由と平和への道』社会思想研究会出版部、1952年、p.4。

(44) これは梶大介という人物の評価が、東京・山谷における寄せ場労働運動の内部、あるいはそれより広い視野をとっても浄土真宗との関係を念頭においたところにとどまってきたことの要因であるように思われる。梶大介自身の著作でも明確に示されていることではないが、その思想と活動が位置していた平面は戦後日本社会における世界連邦運動に密接に重なり合っていたはずである。。

は言うまでもない[45]。

3.『歎異抄入門』と歎異抄研究会のその後

以上、『歎異抄入門』その基本的な構成といくつかの内容的特徴を論じてきた。最後に付け加えておきたいことは、この書物が1961年の初版刊行後にどのような反響を生み、歎異抄研究会がその後どのような展開を遂げていったのかということである。

『歎異抄入門』は1961年11月に刊行され、その発行主体である社会思想研究会出版部は1962年に社会思想社へと改称し、その社名は本書を収録した「現代教養文庫」の版元としても知られている。本書は増刷を経ながら1968年には英語版が、1995年には新版刊が刊行されるなど少なからぬ読者を獲得していたことがうかがわれる[46]。版元の社会思想社は2002年に事業の停止に至るが、本書を含む現代教養文庫はインタープレイブックスと文元社の協働によりオンデマンドおよび電子書籍での出版が継続されている。

1995年に刊行された新版には「歎異抄研究会―その後の動き―」が加えられており、これによって初版の反響や研究会の展開をいくらか知ることができる[47]。まず1963年には、本書が宗教をめぐる優れた解説書であるとして、中外日報社の真渓涙骨を記念する「涙骨文化賞」を受けている。その後は、井上靖と臼井吉見が編集を手がけて主婦の友社から1968年に刊行されたシリーズ「10冊の本」(全10巻)の第5巻『生死をこえるもの』(1968年12月)に、第1章「親鸞と歎異抄」・第4章「善人なおもて往生をとぐ」・第8章「無礙の一道」・第10章「念仏申し候えども」の主要部分が収められている。

また既述のとおり、1968年には本書の英語版が北星堂出版から刊行された。この英訳作業は、日本国内におけるSCI運動史において重要な役割を果たした佐藤博厚と配偶者のフィリスによって共同で着手され、のちに九州大学の多久和新爾・井田好治・橋口保夫・藤田実ら英文学グループに引き継がれて完成したようである。訳者を代表した多久和は「訳者あとがき」(Translator's Postscript)のなかで、講談社から刊行されていた月刊誌『現代』において『歎異抄入門』が人格修養の書として若手実業家に推薦されたことにも触れている[48]。

ちなみに、英語版の帯に推薦文を寄せた花山信勝は日本語で、本書が「仏教の内容・術語の難解さと、それに伴う英訳の困難さ」を解きほぐし「日本仏教の神髄たる親鸞の思想を、西欧の人々に紹介し得る人物を養成する意味で、極めて有意義である」と述べている。日本

(45) 注2に挙げた文献は、このような意味で宗教者たちの活動を戦後日本の社会運動史研究に接合させた試みとして、きわめて重要な意義を有している。

(46) どこまで増刷が重ねられたのかは不明だが、筆者は1962年2月28日時点の初版3刷を参照している。なお、初版の内容はほとんど英語版と新版に引き継がれているが、梶大介が一粒会として東京都調布での活動を続けていたのは1963年までのことであり、それ以降に刊行された英語版と新版のいずれにおいても、一粒会を紹介した部分は削除されている。また、新版では『入門』の討議参加者一覧から佐伯真光の名前が消えているが、その理由については不明である。

(47) 歎異抄研究会『新版　歎異抄入門:親鸞と現代』社会思想社、1995年、pp.252-258。

(48) Tannishō Kenkyūkai. *Perfect Freedom in Buddhism*, tr. Shinji Takuwa, Yoshiharu Ida, Yasuo Hashiguchi and Minoru Fujita, Tokyo: Hokuseido Press, 1968, p.174.

語で帯文が書かれたということからして、英語版が日本語圏での流通を念頭に置いて刊行されていたのか、その意図や実際の流通に関する詳細は不明である。

この英語版には*Perfect Freedom in Buddhism*というタイトルが与えられ、序文には最晩年の鈴木大拙が“On the Tannnishō”を寄せている。そこには「真宗信者は固有の語を用いているが、私が見ているかぎりの全宗教は浄土真宗の核心をなす弥陀の本願力という思想に収斂していくものである。われわれが持ちうるもの、それは信である」(49)といった旨の一節がある。『教行信証』を英訳するなかで弥陀の本願力を「絶対的な祈り的意志」(the absolute prayerful will)と、キリスト教における神から人間への愛＝アガペーにもなぞらえて理解していた鈴木大拙にとっても(50)、弥陀の本願力に向けられる信心の構造は決して浄土真宗だけのものでなかった。それゆえ鈴木大拙は「人間が様々な場所で、類似した事柄を異なる用語でどう説いているのか」を、キリスト教徒がこの英語版『歎異抄入門』から読み取っていけるのではないかとの望みを寄せている(51)。

刊行後に『歎異抄入門』がたどった歩みは概略以上のようなところだが、歎異抄研究会は冒頭に述べたように形を変えながらも長きにわたって活動を持続させていた。同会は初版刊行後に読者との議論および交流を期し、『歎異抄入門』に向けた共同研究参加者の野口直吉を代表とした定例研究会を新たに開始している。研究会は毎月一回を基本とし、隔月に講師を迎え、翌月は講話にもとづく会員の討論をひらくという形式をとった。その講師は在家仏教協会を中心とするネットワークのなかで招聘されていたものとも考えられるが、正確なことは判明していない。これも参考のため新版「歎異抄研究会―その後の動き―」に掲載されてた定例研究会の講師一覧を〔付表4〕として文末に転載する。

この定例会は東京を中心に行なわれた活動だが、『歎異抄入門』は初版刊行から日本国内だけでなく遠くはハワイにいたるまで歎異抄研究会への入会希望を生んだようである。涙骨文化賞を受賞した1963年時点で会員はすでに約400名、同年には「関西歎異抄研究会」と「鹿児島歎異抄研究会」が発足し、5年後には兵庫で「歎異抄友の会」が発足している。また、1962年から1971年まで機関紙『親鸞』が14号、1963年から1974年まで『歎異抄研究会会報』が計60号刊行されたという。しかし、1995年の新版刊行時には初期の会員の高齢化などにより活動が静止状態に至っており、井上信一が理事長を務めていた財団法人・仏教信仰財団における新たな展開を期待されていた。それ以降の活動状況についても、現時点では分かっていない。

『歎異抄入門』と歎異抄研究会の足跡は以上のように新版に収められた「歎異抄研究会―その後の動き―」から知ることができる。在家の仏教者たちによる活動をもとに組織された歎異抄研究会の『歎異抄入門』が決して小さからぬ反響を生み、それが在家仏教全体の動

(49) *ibid*., p.2.

(50) 田村晃徳「「意志と祈り」としての願い：鈴木大拙の本願理解」、親鸞仏教センター(編)『現代と親鸞』第48号、2023年6月、pp.216-190。

(51) Tannishō Kenkyūkai, *op. cit*, , p.4.

きにどのような影響を与えていたのか。本稿では他にも今後の研究課題をいくつか積み残しているが、在家仏教者を中心とする運動史の把握は、それらを把握するための重要な研究領域であるように思われる。歎異抄研究会が発足し『歎異抄入門』が上梓されたことの歴史的な意味については、今後も探究を続けていく必要がある。

まとめにかえて

以上、歎異抄研究会と『歎異抄入門』をめぐる①人脈的背景 ②内容的特質 ③その後の活動について、現時点における調査の成果をまとめてきた。ここでは、それらの内容をふまえたうえで、今後の研究課題を改めて整理しておきたい。

まず、はじめに歎異抄研究会のキーパーソンとして井上信一に注目したが、そこからさらに浮かびあがってきた高良とみやSCI運動との関係も、継続的な調査を進める必要がある。とりわけ本稿で十分に触れることができてない高良とみについては、歎異抄研究会にとっての重要な参照項でもあったインドが思想史的にどう位置づけられるのかを正確に捉えるためにも、研究を深めていく必要がある。欲張って言えば、アジア主義が戦前から戦後にまたがってどのような形で持続していたのか、という議論にもつながっていくはずである。

また、本稿では歎異抄研究会が『歎異抄入門』のなかで一粒会というバタヤの協働組合を取りあげていることにも注意を向けた。その中心的な人物であった梶大介は、1963年から山谷拠点を移して「山谷解放運動」に取組み、1960年代後半には中国文化大革命に共鳴して日中友好協会(正統)との関係をもって訪中も行なっている。梶大介の思想や活動の変遷過程についても、歎異抄研究会との関係のなかで『歎異抄入門』に一粒会として登場していた事実をふまえておかなければならない。絶対平和主義から毛沢東主義的な武装闘争へと、梶大介の思想はなぜ、どのような状況のなかで傾いていったのかという問題がそこにはある[(52)]。

一粒会として調布で活動していた時期から梶大介との交流関係を有していた竹中労は、山谷における運動のなかで決裂した後の1969年に梶大介について、「親鸞から右翼へ、右翼から毛沢東へと無限大に振幅する、梶の思想遍歴(?)」[(53)]と評しているが、その含意はこれまで問われることがなく、そもそも重要とも思われてこなかった。しかし、竹中労が「右翼」と呼んでいるものが具体的に何を意味しているのかという問題は、梶大介のような人物がいかなる思想と運動の文脈に位置づいていたのかの検討を必要とする。それは、歎異抄研究会と『歎異抄入門』をめぐっていくつか判明していることからも分かるように、冷戦体制

(52) この点についても、梶大介の時流に対する迎合的な態度としてのみ片付けることは適切でない。梶大介と日中友好運動との間では西川景文という日蓮宗の僧侶が重要な役割を果たしていた。戦後日本における中国人強制連行犠牲者の遺骨送還運動に参加し、日中友好協会(正統)の活動にもかかわった西川については坂井田夕起子「戦後日本宗教者の日中友好運動:仏教、キリスト教を中心に」(大谷栄一〔編〕『戦後日本の宗教者平和運動』ナカニシヤ出版、2021年、pp.247-278)を参照。梶大介と西川景文との関係については、拙稿「梶大介の1968年」(大野光明・酒井隆史・仲田教人〔編〕『1968年論』以文社、近刊)で若干の検討を試みた。

(53) 竹中労『山谷:都市反乱の原点』全国自治研修協会、1969年、p.195。

下の日本社会においてどのような主体によっていかなる世界秩序が構想され、そこにおいてアジアはどのように想起されていたのかを問い直す契機となる。

課題は未だ漠然としたところがあるが、仏教者を含む宗教者たちの平和運動の広い裾野の一部に光を向け、戦後日本社会運動史についての理解を深めることに、本稿がわずかながらも資することがあればと考えつつ、研究を継続していきたい。

小美濃　彰（おみの　あきら、OMINO Akira）
東京外国語大学大学院博士後期課程

付表

〔付表 1〕『歎異抄入門』の討議参加者一覧

氏名	所属	氏名	所属
石丸　雄造	合同酒精 KK	井上　信一	日本銀行
石上　智康	東京大学大学院印哲科修士課程	小川　修	東京大学教養学部在学
佐伯　真光	東大大学院印哲科博士課程 ハーヴァード大	坂　正夫	日本銀行
佐野　義光	合同酒精 KK	堤　孝一	日本銀行
永井　紀代	日本銀行	中山　久美子	早稲田大学大学院 文学研究科修士課程
二橋　進	在家仏教協会	野口　直吉	合同酒精 KK
日比野　佳子	日本銀行	花山　勝友	東大大学院印哲科博士課程
坂東　性純	東大大学院印哲科博士課程 オックスフォード大		

〔付表 2〕歎異抄研究会によるアンケートへの回答者（年齢は初版刊行当時）

氏名（年齢）	肩書	氏名（年齢）	肩書
今村　均（75）	元陸軍大将（ラバウル司令官）	上辻　義一（51）	住友石炭鉱業経理部長
梅原　真隆（75）	富山大学長	江部　鴨村（77）	武蔵野女子学院教授
長田　恒雄（58）	詩人、評論家	小山内　千代（59）	官吏未亡人
加藤弁三郎（61）	協和発酵社長	金子　寿美子（35）	事務員
金子　大栄（80）	大谷大学名誉教授	河村　誠（35）	屑物収集業
木下　正治（33）	日本銀行神戸支店	古賀　進（55）	住友石炭鉱業専務
佐古　純一郎（42）	文芸評論家	佐藤　春代（78）	無職
島　保（69）	最高裁判所判事	下沢　誠二（52）	職人
白石　凡（60）	朝日新聞論説顧問	多賀　重治（67）	医師
竹田　暢典（32）	高校教員	外村　繁（故人）	著述業
中島　正三郎（21）	学生	南部　勇（59）	会社役員
西　武雄（46）	在福岡刑務所	野口　時子（65）	札幌北の誉酒造監査役
橋本　龍佶（65）	農業	原　彪（66）	衆議院議員
村田　保（55）	合同酒精総務課長	山本　現雄（32）	教員

〔付表 3〕『歎異抄入門：親鸞と現代』各章のタイトルと新約聖書からの引用句

章	タイトル	新約聖書からの引用
	私たちの願い	
1	親鸞と歎異抄	
2	思い立つ心の起こるとき	人が義とされるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるのである。〔ロマ人への手紙・3 章 28〕
3	愚身が信心	神を見た者はまだひとりもいない。もし私たちが互いに愛しあうなら、神は私たちのうちにいまし、神の愛が私たちのうちにまっとうされるのである。〔ヨハネの第一の手紙・4 章 12〕
4	善人なおもて往生をとぐ	あなた方の中で罪のない者がまずこの女に石を投げつけるがよい〔ヨハネによる福音書・8 章 7〕
5	すえとおりたる大慈悲心	栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにもきかざってはいなかった。〔マタイによる福音書・6 章 29〕
6	ただ自力を捨てて	あなた方は、私が平和をこの地上にもたらすために来たと思っているのか。あなた方にいっておく。そうではない。むしろ分裂である。〔…〕父は子に、子は父に〔…〕対立するであろう。〔ルカによる福音書・12 章 51 ～ 53〕
7	弟子ひとりももたず	なぜわたくしをよき者というのか。神ひとりのほかによい者はいない。〔マルコによる福音書・10 章 18〕
8	無礙の一道	わたしは飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘訣を心得ている。わたくしを強くして下さる方によって、なにごとでもすることができる。〔ピリピ人への手紙・4 章 12 ～ 13〕
9	非行非善	あなたがたの救われたのはじつに恵みにより、信仰によるのである。それはあなた方自身から出たものではなく、神の賜物である。けっして行ないによるのではない。それはだれもが誇ることがないためなのである。〔エペソ人への手紙・2 章 8 ～ 9〕
10	念仏申し候えども	信じます。不信仰なわたしをお助け下さい〔マルコによる福音書・9 章 24〕
11	無義をもて魏とす	それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられた。〔マタイによる福音書・7 章 29〕
付録	巻頭の序および下篇 親鸞略年譜 アンケート	
	あとがき	

〔付表 4〕『歎異抄入門』刊行後の月例研究会に招聘された講師一覧

氏名	所属	氏名	所属
白石　凡	朝日新聞論説委員	雲道　義道	武蔵野女子大学監
江部　鴨村	武蔵野女子大教授	佐古　純一郎	評論家
小松　文雄	親和女子大教授	今村　均	元陸軍大将・ラバウル方面軍司令官
寺田　弥吉	親鸞研究家・作家	原　彪	衆議院議員
竹田　鴨典	伊勢崎高校教諭	加藤　辨三郎	協和発酵（株）会長・在家仏教協会理事長
千輪　慧	武蔵野女子大教授	堀　一郎	成蹊大教授
武田　泰淳	作家	松林　宗恵	映画監督
麻布　清澄	麻布泉明寺住職・義人党の集団更生で朝日新聞から賞を受けた	関　祐光	皆和会会長
二階堂　行邦	元・教学研究所主事	伊藤　哲雄	東京本願寺輪番
森　恭三	朝日新聞主幹	吉田　久一	日本社会事業大教授

松尾　邦之助	元読売新聞主筆・評論家・「出家とその弟子」を仏訳、ロマン・ローランの序文を得てパリで出版した	佐伯　真光	ハーバード大留学より帰朝
紀野　一義	学習院大教授・真如会主幹	原　富男	荘子研究家
末綱　恕一	統計数理研究所長	坂東　環城	浅草坂東法恩寺住職
辻　嘉一	懐石料理「辻留」主人	吉岡　奎	寂円寺住職
高山　岩男	日大教授	松野　純孝	文部省宗教専門職
唐沢富太郎	教育大教授	相渓　順忍	竜谷大名誉教授
稲垣　俊夫	浅草・通覚寺住職	三角　寛	作家
増谷　文雄	日本宗教学会会長	赤松　常子	参議院議員
早島　鏡正	東大教授	折原　脩三	思想の科学研究会会員
岩本　泰波	埼玉大教授	元柳　行志	元九州精機会長
山崎　竜明	武蔵野女子学院教諭	坂東　性純	大谷大助教授
中津　功	教学研究所東京分室主事	脇本　平也	東大助教授
武藤　義一	東大教授	真木真之介	読売新聞事業部
美濃部　薫一	美濃部学園	長田　恒雄	詩人
長谷川　耕作	光雲舎主幹	竹山　道雄	ドイツ文学者・評論家
井上　信一	宮崎銀行頭取	山本　米治	元日銀理事
玉城　康四郎	東大教授	竹内　維茂	崇信教会主幹
田丸　徳善	立教大助教授	古賀　進	住友セメント会長
近藤　章久	精神科医・近藤クリニック院長	花山　勝友	武蔵野女子大教授
菊村　紀彦	国際仏教学園教授	稲津　紀三	玉川大教授
中村　元	東大名誉教授	千谷　七郎	女子医大教授
石上　智康	千葉県・光明寺住職	平川　彰	東大教授
富岡　秀善	東京真宗同朋の会	大野　信三	明大教授

参考文献

秋山健二郎・森秀人・山下竹史(編)『現代日本の底辺　第１巻　最下層の人びと』三一書房、1960年

井上信一「誓願」、在家仏教協会『在家仏教』第28号、1956年7月、p.8

——『現代に生きる親鸞:青年の歎異抄』実業之世界社、1957年

——『サラリーマンとその師』普通社、1961年

——『歎異抄:二つの気づき』樹心社、1989年

——『地球を救う経済学:仏教からの提言』すずき出版、1994年

大谷栄一(編)『戦後日本の宗教者平和運動』ナカニシヤ出版、2021年

小川修「十字架につけられし女：座古愛子覚書」、『ルーテル学院研究紀要：テオロギア・ディアコニア：ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校紀要』第39号、ルーテル学院大学、2006年3月、pp.21-31

——『パウロ書簡講義録』全10巻、リトン、2011-2022年。

小美濃彰「地域をつくる実践としての保育:梶満里の保育運動とその背景」、『日本語・日本学研究』第10号、東京外国語大学国際日本研究センター、2020年、pp.1-22

——「梶大介の1968年」、大野光明・酒井隆史・仲田教人〔編〕『1968年論』以文社、近刊

梶満里子『愛の砂に花ひらく』第二書房、1964年
加藤辨三郎『いのち尊し：加藤辨三郎著作集』在家佛教協会、2002年
加藤正彦「ガンディーと被差別カーストの解放」、国際身分制研究会（編）『第3期国際身分制研究会報告書』社団法人部落解放・人権研究所、2003年
https://blhrri.org/old/kenkyu/project/mibun/mibun_h/mibun_h_0006.htm
（最終閲覧日：2023年9月29日）
倉田百三「生活と一枚の宗教」、『世界教養全集』第10巻、平凡社、1963年
子安宣邦『歎異抄の近代』白澤社、2014年
在家仏教協会『在家仏教』第5号、1954年9月
サービス・シビル・インターナショナル日本支部『S・C・I通信誌』1962年3月1日号
坂井田夕起子「戦後日本宗教者の日中友好運動：仏教、キリスト教を中心に」、大谷栄一（編）『戦後日本の宗教者平和運動』ナカニシヤ出版、2021年、pp.247-278
真宗聖典編纂委員会（編）『真宗聖典』東本願寺出版、1978年
ジャワハルラール・ネルー（著）井上信一（訳）『ネルー：自由と平和への道』社会思想研究会出版部、1952年
鈴木大拙（著）坂東性純・清水守拙（訳）『神秘主義：キリスト教と仏教』岩波書店、2004年
――『日本的霊性』岩波書店、1972年
武井昭「日本のシューマッハー・井上信一先生を偲んで」、『仏教経済研究』第30号、駒澤大学仏教経済研究所、2001年
竹中労『山谷：都市反乱の原点』全国自治研修協会、1969年
田村晃徳「「意志と祈り」としての願い：鈴木大拙の本願理解」、親鸞仏教センター（編）『現代と親鸞』第48号、2023年6月、pp.216-190
歎異抄研究会『歎異抄入門：親鸞と現代』社会思想研究会出版部、1960年
――『新版　歎異抄入門：親鸞と現代』社会思想社、1995年
辻井清吾「井上信一様との思い出」、『仏教経済研究』第30号、駒澤大学仏教経済研究所、2001年
永岡崇「大本・人類愛善会：世界連邦運動から安保闘争へ」、大谷栄一（編）『戦後日本の宗教者平和運動』ナカニシヤ出版、2021年、pp.123-210
中山久美子「真宗教団における番頭の変遷」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第7号、早稲田大学大学院文学研究科、1961年12月、pp.238-239
星野朗・野中乾『バタヤ社会の研究』蒼海出版、1972年
百川敬仁「日本主義者・倉田百三」、鈴木貞美（編）『大正生命主義と現代』河出書房新社、1995年、pp.242-255
安原和雄「仏教経済学の今日的意義：井上信一著『地球を救う経済学』を読んで」、『仏教経済研究』第30号、駒澤大学仏教経済研究所、2001年
ラビンドラナート・タゴール（著）山室静（編）『タゴール著作集』第8巻、第三文明社、1981年

Tannishō Kenkyūkai. *Perfect Freedom in Buddhism*, tr. Shinji Takuwa, Yoshiharu Ida, Yasuo Hashiguchi and Minoru Fujita, Tokyo: Hokuseido Press, 1968

「“貧民解放”の運動に:バタヤさん二人、インドへ親善の旅」、『読売新聞』1960年7月29日、東京夕刊、p.6

「ミサイルの島の“平和の楽園”」、『新週刊』第2巻第14号、新週刊社、1962年4月5日、pp.94-95

即興ミニ漫才づくりとネタに見られる特徴:
学部言語科目における漫才ワークショップの可能性

Improvised Mini *Manzai* Creation and Types of *Boke* in *Manzai*: The Potential of *Manzai* Workshops in Undergraduate Language Courses

鈴木 美加・島岡 学

Abstract

As a sequel to a paper by Suzuki and Shimaoka (2022) on *manzai* workshops and student learning, this paper presents content from the second half of the workshop analyzing the *manzai* material created, according to Kinsui's (1992) classification of *boke* in manzai, by the participating students. Finally, the competences and knowledge that can be developed in a *manzai* workshop are examined in light of Ackermann's (2010) assertions regarding language competence and communication.

Keywords

漫才づくり、ワークショップ活動、複数言語使用、ボケ(ズレ)の分類

producing a *manzai* skit, workshop-style activities, learning through plural languages, types of *boke*

1　はじめに

本稿は、鈴木・島岡(2022)で示された漫才ワークショップと参加学生の学びに関する検討に続き、ワークショップ後半の内容を示すとともに、受講学生作成による漫才ネタの特徴を、金水(1992)の漫才のボケの分類を参考に確認するものである。さらに、Ackermann (2010)の主張する言語能力およびコミュニケーションの観点を踏まえ、漫才ワークショップで養える能力や知識に関して検討を行う。

2　漫才ワークショップの概要

東京外国語大学国際日本学部の「メディア日本語」科目では、受講学生(日本語母語学生と非母語学生)が現在のメディア状況や伝達情報の特徴を観察、分析すると同時に、メッセージを創る活動も行い、その一環として「漫才ワークショップ」を実施している(図1参照[1])。ワークショップでは、漫才に関するミニ講義と漫才ネタ作り、発表(ネタ見せ)を行う。鈴木・島岡(2022)で紹介した2020年度のワークショップは90分1コマによるオンラインZoom授業であったが、翌年度以降は2コマ設定とし、第1回オンラインZoom、第2回対面形式で開催している(図2およ

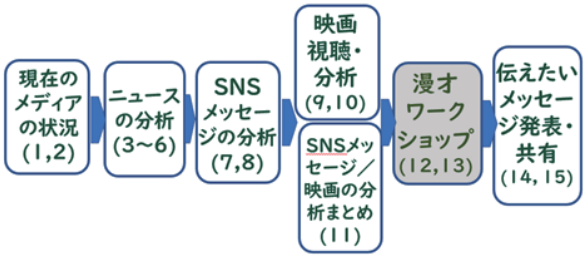

図1　「メディア日本語」授業の流れ

(1)　数字は授業回を示す。

び図3参照)。ワークショップの目的は、漫才ネタ作りや発表のテクニック上達を目指すというより、リラックスして参加し、漫才について知り、ほかの参加者とともに積極的に楽しむことであった。この2回分の授業の目標として、①漫才ワークショップを通して、漫才を体験し、その面白さを感じることができる、②ワークショップをきっかけに、メッセージを伝える方法としての漫才について、考えてみることができる、という2点を設定した。

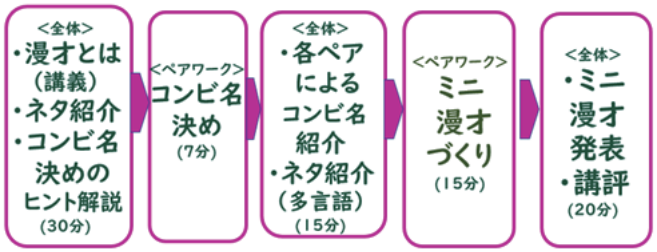

図2 「漫才ワークショップ」第1回の流れ

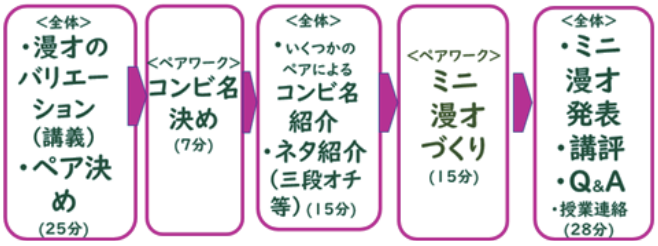

図3 「漫才ワークショップ」第2回の流れ

ワークショップの第1回の流れは、①講義(漫才について)、②ネタ紹介およびコンビ名決めのヒント解説、③ペア決めと各ペアのコンビ名決め、④各ペアによるコンビ名紹介、⑤ネタ紹介(簡単なバージョン)、⑥ミニ漫才づくり、⑦ミニ漫才発表(全体)、⑧講評、と進んだ。第2回は、第1回を踏まえ、三段オチの紹介、ネタ見せ(紹介;日本語・他言語)もなされ、第1回の学生ペアとは異なる組み合わせで、各コンビがミニ漫才をつくり、授業後半にクラス全体で発表がなされた。

3　漫才ワークショップ(第2回)のミニ講義:漫才の構成(日本語・他言語)

本節では、第2回ワークショップでの講義内容を以下に示す。ワークショップは第二著者が講師を務め、第一著者は授業を第二著者とともに運営した。第2回ワークショップでは、第1回の内容(鈴木・島岡 2022)をさらに進めて、基本的な漫才の作成方法を教示した。その内容のポイントを以下に記す。第1回ワークショップの主な内容は、鈴木・島岡(2022)を参照いただきたい。

3-1　漫才の構成

○飛び出し:(あいさつ)、「どーもー」と言って舞台に出てくる行為

デオチ:「どーもー」の挨拶の後、言葉を使わずジェスチャー(マイム)だけで笑いを取る、例えば転ぶ、変な顔をするなど

○自己紹介:

A: xxx の xxx です。

B: xxx の xxx です。

A: コンビ名は?

B: xxx です。

AB: よろしくお願いします。

○ツカミ:本ネタに入る前に季語や時事問題を入れた一件(ひとくだり)のネタを披露する。これをツカミと呼び、このツカミの後に本ネタを披露する。

○本ネタ(例 参照)

3-2　ネタの展開1:「回収」

最初に出たボケ(冗談)が最後に再び使われ、そのままオチとなる。回収は伏線回収とも呼ばれている。

例

A: どこから来たの？

B: あ、今　トイレから来た。

A: 今　来た場所じゃなくてどこの出身？

B: あ、自分は大阪出身。

A: 大阪出身なんだ。もし大阪に遊びに行くとしたらオススメの場所はある？

B: トイレ。

A: もういいよ。どうもありがとうございました。

3-3　ネタの展開2:「三段落ち」

やりとりの問いへの答えで、最初の2つが正しく3つ目が間違っているというパターン。「ラーメン、つけ麺、僕イケメン」が三段落ちである。最初の2つ目は実在する麺類であるが、「僕イケメン」は麺類ではないので間違っている。

例

A: 日本のスポーツは何が好き？

B: うーん　柔道かな。

A: 他には？

B: うーん　剣道かな。

A: 他には？

B: うーん　極道かな。

A: ずいぶん道を外れたね。

3-4　ネタの展開3:「かぶせ(天丼)」

ボケが同じ形の冗談を単純に連続で繰り返す。「かぶせ」が5回連続するが、6回目でボケが正しいことを言う。これを「裏切り」もしくは「スカシ」と呼び、そのままオチになる。

例1(2回連続)

A: ごはんの上に天ぷらを乗せると？

B: おいしい。

A: じゃなくて何という料理になる？

B: あー　天丼。

A: じゃ　ご飯の上にカツの卵とじを乗せると？

B: おいしい。

A: かぶせてきたね。

例2(4回連続、5回目は「裏切り」となりオチとなる)

A: どこから来たの？

B: あ、今　トイレから来た。

A: 今、来た場所じゃなくて出身地を聞いてるの。どこから来たの？

B: あ、今　便所から来た。

A: かぶせてきたね。出身地を聞いているの。どこから来たの？

B: あ、今　お手洗いから来た。

A: 今、来た場所じゃなくて出身地を聞いてるの。どこから来たの？

B: あ、今　化粧室から来た。

A: あ、今　来た場所じゃなくて出身地を聞いてるの。どこの町の出身？

B: 御手洗町(みてあらいちょう)。

A: そうだろうね。

3-5　ボケの役割

ボケという言葉は「トボケル」という言葉から来ており面白いことを言う人、もしくは、おかしな人であり、滑稽である。ツッコミが簡単な質問をするが、ボケが間違える、これがボケになる。

例

ツッコミ: あなたは おいくつですか？

ボケ: 23.5。

3-6　ツッコミの役割

「ツッコミ」とは「突っ込む」から由来しており、ボケの間違いに対して質問したり、訂正(説明)を加えるという役割である。

例

A: あなたは　おいくつですか？

B: 23.5。

A: なんでやねん、それクツのサイズでしょ。

ボケに対して「なんでやねん」という質問の形を取り、間違いを説明している。関東では「なんでだよ」となるが関西弁の「なんでやねん」の方が漫才らしくなる。

3-7　漫才と地域性

関西（大阪）では関西弁で早口で漫才を披露する「しゃべくり漫才」が一般的であり、関東（東京）では見た目を重視した「キャラクター漫才」が主流である。漫才ネタにも地域性が反映する。

3-8　日本語以外の漫才（MANZAI）

留学生の出身国や参加者の学習言語による漫才（MANZAI）も可能である。ここでは、英語による漫才ネタの例を示す。ほかに、フランス語、イタリア語、スペイン語などによる漫才ネタもあり、文化や社会の状況に合った内容や演じ方も可能である。

例

A: Can I have your name?

B: My name is Takoyaki.

A: How come? Ask you again, can I have your name?

B: My name is Okonomiyaki.

A：How come? Ask you again, can I have your name?

B: My name is Yakisoba.

A: Oh! No Way….

AB: Thank you very much.

4　学生による漫才ネタの特徴：金水（1992）のボケのパタンを参考に

ワークショップでは、漫才の入門編となるミニ講義を聞いた上で、コンビ決めを行い、コンビで、①コンビ名決め、②漫才ネタ作り、③発表を行った。本節では、金水（1992）の漫才のボケの分類を示した上で、その各分類に対応する学生の漫才ネタを紹介、確認する。

4-1　金水（1992）の「ボケのパタン」

金水（1992）は漫才の会話について、「一見相手のいうことをまともに受けているように見えながら、しかし実は変である、というものでなければならない」とし、「つながりながら

ずれる」のが漫才のボケのあり方であり、「正常な会話と異常さとの落差」によるテンションには大小あり、緊張と弛緩が波のように繰り返されると述べる。グライスの会話の原則やリーチの丁寧さの原則を参考に、「しゃべくり漫才のボケとツッコミは、会話の原則とそこからの逸脱とそれに対する修復として分析できる」とし、ボケのパタンとして、網羅的ではないとしながらも、以下の6種を挙げている(金水 1992; pp.85-87)。学生の作成した漫才ネタの確認については、この6種に分けて行うこととした[2]。

・音の類似性(似通い):だじゃれ、聞き間違い(例スキーとすき焼きの話が並行して進む)
・単語の連想:連想により、話題がずれる
・論理的な誤り:よく考えると論理展開に矛盾がある
・様式の錯誤:曖昧な言い方で誤解を招く(例「さんこう」:「旧制第三高等学校」(京都大学の前身の一つ)」あるいは「西宮第三尋常高等小学校」)
・態度や立場の食い違い:規範からの逸脱(例　目下の者が目上に人に、自らを謙遜することなく尊大になる)
・表現形式の不整:発音/文法/表現の言い間違い(による笑い)

4-2　学生の漫才ネタ

ここでは、受講学生ペアが作成した漫才ネタに、どのようなタイプのズレ(ボケ)が含まれているか、1タイプずつ順に例を示す[3]。文字で示しているが、会話の音声を聞いているようなつもりで確認していただきたい。

A　音の類似性(似通い):だじゃれ、聞き間違い(例　スキーとすき焼きの話が並行して進む)

同音異義語やミニマルペアの活用などをこのタイプに含めることとした。母語話者も非母語話者も、構音の位置が同じあるいは近い音(例「ト」と「ド」)を含む言葉を聞き間違えることがあり、それらをうまく使った例が見られた。①は同音異義語を、②は意外に似ている音で構成されている言葉をうまく組み込んだネタで、やりとりの構成の工夫も感じさせる。

なお、2回のワークショップで作る漫才ネタでは、ともに音の類似性を取り上げたネタが多い。これは、日本語母語、非母語学生ともに日本語の同音異義語の多さをうまく活かしたネタ作りをしているのだと言えそうである。

①コンビ名:在日中国大使館(2022)

---

(2)　漫才のネタの分類については、ほかにも検討がなされている(申 2016など)が、数は少なくまだ確立されたものはないようである。

(3)　タイプ別に示すにあたり、第一著者と研究協力者(本学の日本語教育学専攻大学院生)がネタを確認した。二者は、別々に全ネタについて、各ネタがどのようなズレ(ボケ)の特徴があるか、1つあるいは複数、該当するタイプを選択した。両者が全ネタについてのタイプ記載を完了した段階で、判断が一致したかを確認し、互いの判断を共有した。4-2に示すネタは、判断が一致したものを示す。なお、コンビ名の横のカッコ内は、そのコンビが受講したワークショップ開講年度を示す。

A: この前多摩のカレー屋さんにいったの。
B: どんなもの食べたの？
A: これだよ（写真を出す）
B: これってなんていうの？
A: うん、あってるよ。
B: いやだからなんていうの？
A: だから、あってるって。
B: いや違うよ、これの名前を聞いてるんだよ。
A: ナンだよ！
B: どういうこと？
A: もういいよ！

②コンビ名：チュロス（2023）
A: 最近寒くなってきたねー。
B: そうだねー。
A: もうすぐクリスマスだし、この近くでショートケーキ売ってる所あるかな？
B: 駅前の薬局でしょうー。
A: 薬局、、、？
それは消毒液でしょ、もうええわ。
AB: どうも、ありがとうございましたー。

B 単語の連想：連想により、話題がずれる

多義語による連想のずれや、複数言語間の言葉の意味の違いの活用も含めることとした。同音異義語の連想による違い、ズレはBのタイプとした。③は同音異義語を、④は二言語間の語の意味の異なりをうまく取り入れ、ボケ、それに続くツッコミも気が利いた反応になっている。

③コンビ名：東北地方（2022）
A: 好きな食べ物は何ですか？
B: たこ焼きです。
A: 私もタコ好きです。だからタコライスが大好き。
B: タコ入ってないよ。

④コンビ名：アンチ唐辛子（2023）
A: ねぇねぇ、日本語の漢字って昔朝鮮からきた渡来人って人が伝えたらしいよ？知ってた？

B: だから日本の漢字ってこんなに難しいのね。
A: え？なんで？
B: だって「トライ」って韓国語で頭のおかしい変なことばっかやる人間のことだよ。
A: そうなんだ〜知らなかった！
　でも言語の勉強はやっぱりトライアンドエラーなんだなって、ってなんでやねん。
AB: どうもありがとうございました。

C 論理的な誤り：よく考えると論理展開に矛盾がある

テンポ良く会話が進み、自然に感じつつ、「あれ？ずれてる」と感じさせるボケが含まれる。金水(2012)は例として、「右手に剣、左手に拳銃を持ちながら、この手紙を書いています」というボケを挙げている。また、聞かれた質問の意図からずらした形で答えるネタもここに含めることとし、以下の例(金水 2012)もCのタイプとした。

例
A: 先生、私のレポート、どうでしたか。
B: ああ、字がきれいだったね。

この論理展開の矛盾が含まれるネタは、先のAやBのネタより高度であり、漫才ワークショップ第1回では見られず、第2回に現れる。多義性のある語とその共起語や、似た発音の語の組み合わせや取り合わせの妙を感じさせるネタとなっている。

⑤コンビ名：ブラボー(2022)
A: 最近、物価上がったじゃない？
B: はいはい。
A: なんか、高くなったもの挙げてよ。
B: 玉ねぎ？
A: 他には？
B: お肉。
A: また？
B: 気温。
A: それは温暖化のせいでしょ？もういいわ。

⑥日韓首都(2023)
A: いらっしゃいませ〜
B: すいません、骨なしキッチンください。
A: ああ骨なしチキンですね。レンチンしますか？

B: うーん骨なしキッチン、ランチで。
A: なんでやねん。骨なしチキンをレ・ン・チ・ンで？
B: ああ、じゃあ骨なしチキン、リンチで
A: もうええわ。
AB: どうもありがとうございました。

D 様式の錯誤:曖昧な言い方で誤解を招く(例「さんこう」)

会話の前半にはあいまいに答え、誤解を招き、あとでそれがはっきりするようなやりとりが含まれる。順序や明確性に欠くボケの答え方が含まれる。会話が平行線で続くネタもこのタイプとされる。

例(金水 1992)
A: 君はどこの学校や。
B: さんこうや。
A: さんこう、ははん、京都で勉強したんですか。
B: 僕はね、どうも不思議と大阪に住んでいていまだに京都は知らないんですよ。
・・・(略)・・・
A: 西宮、そんなところにさんこうってありませんよ。
B: 西宮第三尋常高等小学校。

⑦甘党(2023)
A: 最近何してるん？
B: “しゅうかつ”してる。
A: 偉いやん。何してんの？具体的に。
B: “しぼう”動機書いてる。
A: 他には？
B: 写真もとったよ！
A: あとは？
B: もう思い残すことはない。
A: えっ、終活！？まだ死なないで！もうええわ。

今回行った漫才ワークショップでのネタ作りタイムは毎年約10分のみという短い時間であり、Dのタイプは１つのネタのみであった。⑦は、二つの意味になる言葉の活用と談話の流れの工夫により、漫才ネタの聞き手は前半は「ふんふん」と自然に受け止め、終わる直前に、「え？」という驚きともに「そうか！」と理解させるという構成のうまさが光ったネタだった。

E 態度や立場の食い違い:規範からの逸脱(例　目下の者が目上に人に、自らを謙遜することなく尊大になる)

立場の取り違いなどで、取るべき態度とは異なる態度、言い方をボケがするネタが該当する。急に、目下が相手に命令したり、けんかを売ったりするのも含む。コントでは時々見られる。

今回の漫才ワークショップでは、このタイプのネタはなかった。役割を決めて演じるようなネタがあまりなかったことも関係しているであろう。

F 表現形式の不整:発音/文法/表現の言い間違い(による笑い)

語や文法、表現の誤りをうまく活用したボケのタイプで、論理で考えた間違いではないものをこのタイプとした。文法のねじれ、受け答えの不一致も含めることとした。以下の金水(2012)の例では、Aにほめられた B は謙遜、あるいは「ありがとう」を言えば普通の反応となる。ネタのボケでは、その予想を外し、リズムよく、さらなるほめを要求したところにズレが生じ、笑いが起きる。

例　金水(1992)

A: あんたきれいやね。

B: そんなこともっとゆうて。

今回のワークショップでは、意図しない言い間違いによるネタは少なかった。ただ、AあるいはBのタイプとFのタイプの両方の性格を有すると思われるネタもあり、1つのタイプなのか、2つのタイプを有するとするか、判断がつきにくいものがあった。この点については、今後の課題とする。

⑧コンビ名:MBTI

A: そうそう髪切ったんだ〜どう？

B: うん！かわいそう！

A: え、あ、うん、、、そういえば誕生日だったからこれ誕生日プレゼント！

B: ありがとう！とってもかわいそう！

A: え、あんまり好きじゃなかった？

B: ううん、わかいそうだとおもったよ！

A: あれ、もしかしてずっとかわいいっていいたかったの？

　日本語間違えて覚えちゃって可哀想

B: もうええやん。

AB: ありがとうございました〜

⑧は、言葉の学習で起こりやすい現象をうまく発話に組み込み、やりとりを展開させているネタである。日本語学習の途上で、「かわいい」と様態の「そう」を組み合わせたり、言葉の一部の音が入れ替わったりすることが起こる場合のあることを、聞き手もこのネタから感じることができるであろう。

5　漫才ワークショップで養える能力や知識とは

5-1 学生の授業コメントの結果からわかること

本稿において、これまでに、漫才ワークショップの概要とワークショップ第2回の講義内容、学生作成のネタの特徴の確認を行った。学生による漫才ワークショップに対する反応は好評で、授業コメントの結果も2020年度の授業コメントをまとめた鈴木・島岡(2022)の結果とほぼ同様である。図4に2022年度受講学生の授業コメントをKH Coder(樋口 2018)で分析し、作成した共起ネットワークに示す。また、表1に授業コメントの一部を示す。

図4から、学生コメント記述の共起として、「漫才－作る－面白い」、「言語－ネタ－考える」、「今回－体験－楽しい」、「間違い－学習－勉強－日本語／英語」、「学習－経験－勉強」といったつながりが見られる。これらは、元のコメント内容と突き合わせ、多くの学生が漫才づくりの面白さの発見をしたこと、言語学習の間違いを生かした漫才ネタの可能性への気づき、言語学的観点からのネタ分析の可能性への言及がなされたことによるとわかった。

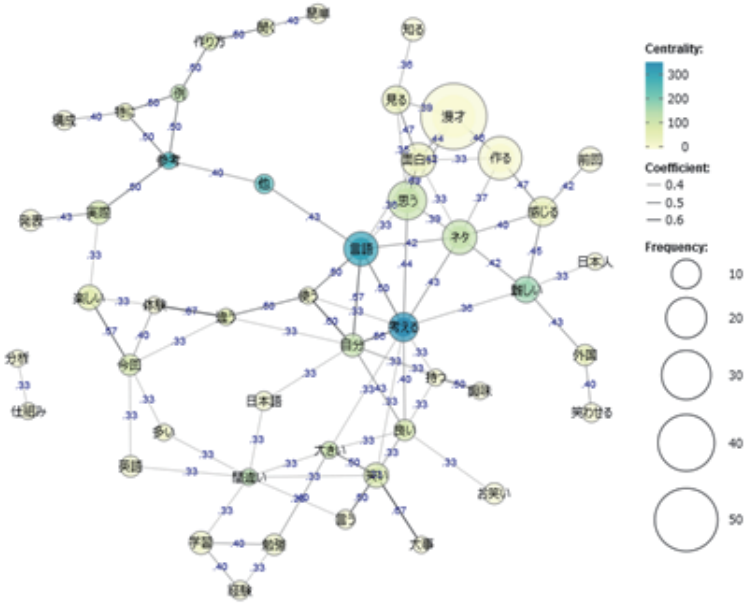

図4　授業コメント(第2回)データによる共起ネットワーク：
KH Coder(樋口 2018)を用いた分析

表1　ワークショップ(第2回)終了後の授業コメント(一部;太字および下線は発表者が付した)

・漫才といえばテレビで見る娯楽で、学術的に学ぶものというイメージはなかったのでとても新鮮でした。ネタ作成は想像していたよりも簡単で面白かったです。言語学的観点から日本の漫才と他の言語で行われる漫才を比較してみるのも面白そうだなと思いました。
・これは人生初めての漫才でした。よく考えたら、自分が日本語に興味を持つ理由の一つは漫才が面白いからである。漫才を言語の教材として使うのは天才的な発想だと思います。最高の授業でした
・今回、私は英語で漫才をするという初めての経験をした。日本語で漫才をつくるよりもさらに難しく感じ、自分自身では良いネタを思いつくことができなかった。しかし、英語漫才をつくろうと試みる中で、言い間違いや勘違いなど言語学習に欠かせない「間違い」がやはり日本語にも英語にも共通してあることに思い当たり、「間違い」を漫才に、笑いに昇華することによる学習効果が確かにあるのだろうと実感した。このように、「間違い」だけでなくその他の言語間での違いなどから得られる学びは多く、そのため言語学習における漫才が果たす役割はさらに大きくなっていくのではないか、また漫才が一種の勉強法のようになれば更に「楽しい」言語学習になるのではないかと考えた。

5-2 漫才ネタ作りと発表のプロセス:養える能力や知識は何か

90分2コマの漫才ワークショップで、受講学生に身につくものは何だろうか。今回の活動では、漫才づくりと授業の場での発表(ネタ見せ)による共有を行った。学生の授業コメントの内容も踏まえ、学生は漫才を「する」機会を得て、以下のことを経験したといえる。

・プロの芸人の講師(第二著者)から漫才の基本的な枠組みやネタの作り方、多言語漫才の基本についての教示を受けた
・ネタを10分でペアの学生と二人で協力して仕上げた＋言語学習の失敗を含む経験を出し合い、共有した
・恥ずかしさや緊張を多少感じつつも漫才ネタを披露し、プロの芸人の講師からの丁寧かつ明快なフィードバックを得た
・参加者として、お互いのコンビ(ペア)の漫才を味わった

学生の漫才ネタおよび授業コメントから、以前は見る/聞く側だった漫才であったが、漫才ネタ作りにより、その言語学的分析の視点も獲得しつつあることが認められた。学生の漫才ネタを、金水(1992)のボケのタイプに対応づけ、流れを確認してみると、言語の特徴を意識したネタ作成であったことがうかがわれる。また、学びの2点目として、言語学習における「間違い」の使い道の可能性への気づきも挙げることができる。さらに、間違いを含め、日本語の対象とした言葉や表現、談話を、ほかの言語、あるいは、ほかの形式を対照させながら組み立て、何らかのズレ(その一つが間違い)を生じさせる経験を通し、普通の言い方とずれた言い方という複数の視点による言葉の使い方を確認しながらネタを作成し、日本語やほかのよく知っている言語を相対化させて捉えることができた経験になったとも言える。つまり、漫才を、多言語・多文化的な観点と結びつけて捉える機会となったのではないかと考えられる。

Ackermann(2010)は、種々の異文化コミュニケーション理論を踏まえつつ、言語学習は、「知っていること」と「できること」(「知識」「認識」と「行動」「感情・情意」)の相互作用とバラ

ンスが重要であり、「できる」能力は、発信面のみならず、適切に解釈する、受容的・共感的な面も含まれると同時に、関連する人間の体、神経の適切な反応が必要となることにも言及する。コミュニケーションは、自らと相手双方の有する知識と行動パタンの共有化によって成り立つとし、一瞬一瞬その場で、「接点を模索する力量が言語能力の本質である」と述べる(pp.1-2)。

漫才ワークショップにおいて、受講学生が漫才ネタを作り、披露し合う試みは、ペアとなった学生がお互いの経験を踏まえ、知識と行動パタンの共有と反応が起こる場となった。さらに、ネタ披露により、クラスの参加者、講師、授業担当者、TA(授業サポートの大学院生)がコミュニケーションへの参加者となり、知識、行動の共有の場となった。プロの芸人であるワークショップ講師からの明瞭で肯定的なコメントも、各ペアそれぞれの心に残るものになったと言えよう。

最後に、もう一名の2022年度受講学生のコメントを紹介したい。

「前回は英語での漫才を発表したので、日本語で漫才を作ることができて楽しかったです。クラスメイトとの思わぬ共通点が見つかり、思ってもみなかったようなネタを作ることができて、漫才づくりはアイスブレイクにも役立つのではないかと感じました。

また、今回、質疑応答では日本のお笑いの世界の状況を、テレビの産業構造も踏まえて、漫才をしているかたからうかがうことができて非常に勉強になりました。政治は私達の生活に密接に関わっているもので、私達自身で動かすことのできるはずのものなのに、影響力のあるメディアであるテレビでその批判を放送することができないという状況はとても歪だと思いますし、変えていくべき状況であると思います。」

コメントで記されているように、今回のワークショップが、クラスメイト同士のコミュニケーションによるネタ作り、披露の機会となると同時に、漫才という切り口で「メディア日本語」科目での学習内容や社会を再考する機会ともなったことを伝え、筆を置くこととする。

付記

本稿の漫才ワークショップに関する記述は、外国語教育メディア学会第71回大会ポスター発表「学部学生によるミニ漫才づくり(日本語・英語)とネタの特徴:学部言語科目における漫才ワークショップと学生による漫才への分析可能性への発見」に大幅に加筆・修正を行ったものである。なお、漫才ワークショップ実施にあたり、本学国際日本学研究院競争的経費(学部教育)を得た。

漫才ワークショップでは、ゲスト講師(第二著者であるフランポネのマヌ―)とともに、ボランティアでゲスト参加をしてくださったフランポネのシラちゃん、藤田ゆみさんに大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

鈴木 美加(すずき みか、SUZUKI, Mika)
東京外国語大学国際日本学研究院教授
島岡 学(しまおか まなぶ、SHIMAOKA, Manabu)
吉本興業

参考文献

金水 敏(1992)「ボケとツッコミ:語用論による漫才の会話の分析」『上方の文化:上方ことばの今昔』和泉書院 pp.61-90

申 彩然(2016)「日本語の笑いのパターン分析―談話分析における語用論の方法論を用いてー」『一橋日本語教育研究』4, pp.197-206

鈴木 美加、島岡 学(2022)「多国籍の学生と芸人・教師による漫才ワークショップ―「メディア日本語:メディアとメッセージ」授業における試み―」pp.95-115

中河 伸俊(2016)「談話標識としての笑いと『お笑い』:フレーム分析の実用のための試行的検討」同志社社会学研究20, 2016, pp.1-17

長谷川 一、村田 麻里子(2018)『大学生のためのメディアリテラシー・トレーニングテキスト』三省堂

樋口 耕一(2018)『社会調査のための計量テキスト分析:内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版

Ackermann, Peter(2010)「異文化理解に必要な言語能力とは何か」日本国際理解教育学会第２０回研究大会資料<http://peterackermann.net/wp-content/uploads/2010-%E7%95%B0%E6%96%87%E5%8C%96%E7%90%86%E8%A7%A3%E3%81%AB%E5%BF%85%E8%A6%81%E3%81%AA%E8%A8%80%E8%AA%9E%E8%83%BD%E5%8A%9B.pdf>(2024年2月29日閲覧)

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第14号　執筆者一覧

劉　志毅	早稲田大学大学院博士後期課程
解　放	中国吉林大学外国語学院准教授
楊　佳嘉	中国厦門大学外文学院助理教授
廖　栄発	中国厦門大学日本語教育研究センター
セーンウライ・ティティソーン	東京外国語大学大学院博士後期課程
小美濃　彰	東京外国語大学大学院博士後期課程
鈴木　美加	東京外国語大学国際日本学研究院教授
島岡　学	吉本興業

『日本語・日本学研究』国際編集顧問一覧（順不同）

孫建軍	北京大学	郭連友	北京外国語大学
蕭幸君	東海大学（台湾）	尹鎬淑	サイバー韓国外国語大学校
李吉鎔	中央大学校（韓国）	鄭家瑜	国立政治大学
金鍾徳	韓国外国語大学校	林慧君	国立台湾大学
LIM Beng Choo	シンガポール国立大学	Tasanee Methapisit	タマサート大学

編集後記

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第14号を、ここにお届けいたします。今号では学内外から寄せられた論文4本、研究ノート3本を掲載しました。本号刊行にご協力いただいたすべての皆様に心より御礼申し上げます。（友常）

東京外国語大学国際日本研究センター
日本語・日本学研究 vol.14
Journal for Japanese Studies

発行日　2024年3月31日
編集者・発行者　東京外国語大学国際日本研究センター
代表者　友常勉
〒183-8534　東京都府中市朝日町3-11-1　アゴラ・グローバル2F
Tel/Fax：042-330-5794

国際日本研究センター
International Center for Japanese Studies

Online edition: ISSN 2186-0777

Journal for Japanese Studies vol.14 (2024)

Peer-Reviewed Articles

The Choice of Active or Passive Voice in the Negative Form
LIU Zhiyi (1)

The Ambivalence in the Text between Empire and Colonies in Abe Kōbō:
"Karasu numa"
XIE Fang (17)

Sino-Japanese Women's Solidarity and its Apostasy in *Kagayaku*:
An Analysis of the Transformation from International Feminism to Imperial Feminism
YANG Jiajia (37)

Reconsideration of the Background of Ki no Haseo's
"Kugatsujinjitsu zangiku wo oshimu ōsē shijo"
LIAO Rongfa (53)

Peer-Reviewed Research Notes

Application of a Meaning-order Approach to Japanese Language Education:
Examples of Instruction for Developing the Ability to Parse Japanese Sentences in a Reading Comprehension Class
SAENG-URAI Thitisorn (67)

Notes on Tannishō Study Group and An *Introduction to Tannishō*:
A Fragment of Buddhists' Peace Movements in Cold War Japan
OMINO Akira (83)

Research Notes

Improvised Mini *Manzai* Creation and Types of *Boke* in *Manzai*:
The Potential of *Manzai* Workshops in Undergraduate Language Courses
SUZUKI Mika, SHIMAOKA Manabu (107)

Contributors
International Editorial Committee Members
Postscript

International Center for Japanese Studies
Tokyo University of Foreign Stuies